

かく言つて郷舎は有樂の側に馳せ寄り、右の高股をば佩楯かけて斬つた。有樂は驚いて馬より落ちた。織田の郎黨澤井久藏、主人の大事と吾れを忘れて郷舎に槍つけた。郷舎は小癩と思つたか、久藏の槍を二太刀に切り折り、そこを引かさず切り倒した。久藏の下人某この有様を見てまた吾れを打ち忘れ、郷舎に飛び附いて引組むだ、郷舎はこれをも刺殺し、將に立ち上らむとするところへ數十人の敵が駆け合つて、前後左右から槍をすくめあはれ郷舎は槍すくめにされて突き倒された。この時、有樂は起き上がり來つて、郷舎を斬つた。ア、蒲生郷舎はかくの如くにして壯絶悲絶の最後を遂げた。時人は爲にその死を哀むだ。以て如何に當世に惜まれたかを察するに足る、けだまた一世の勇士といふべし。

一四七 乾坤一擲 (十三)

戦場の大勢は逆軍の大勝に決した。もはや義軍はいかに石田隊が奮闘するとも、挽回すべきやうはないのである。しかるにその石田隊さへも遂に崩潰した。これに反して敵は倍加に倍加の勢ひを以て追撃し石田の陣地には總が、りで突入する。三成鬼神たりとも策の施しやうがない。ア、萬事休す。三成よ、公それ奈何する。彼れは「大吉・大一大萬」の旗を絞らせた。伊吹山の方角指して退走した。草野の谷へかゝり、大谷山を経て鳥上山に至つて振り返り見れば、従ふ者は三人のみ。磯野平三郎・渡邊甚平・鹽野清助の三人がそれである。彼等は平素三成が寵愛してゐた者である。さすがに主人の最後を見届くるにあらざれば、去り難しと思ひ、かくは附き従つて離れなかつたものであらう。

三成は三人を顧みて曰つた、

「我れはしばらくこの邊に身を隠し、やがて大阪に赴き、薩摩へ下り、島津を語らつて、重ねて大軍を催すべし、汝等はこれより離散して時節を待てよ」

磯野平三郎は言下に曰つた、

「口惜き仰を承はるものかな、これまで御供申したるも、御大事に逢はむ爲でござる。甚平・清助は兎も角もあれ、某ばかりは歸るまじ」

挺でも動かぬ態度である。三成は重ねて曰つた。

「では千田采女は定めし在所へ歸つてをることであらう。彼れの許まで従へよ」

平三郎は賛成せぬ、

「采女は肥たる者なれば、山路の歩行はなり難し、討死したるも知れ申さず、某が兄、この程出家して鹽津に住みをれば、それへお忍び遊ばされ、彼の浦より大津までお船に召され、夫れより大阪へ赴かせたまへ」

三成は首を掉つた、

「いや、今の折柄大阪へ旅行は覺束なし、先にもいふ如く汝等を召具してはナカ、隠れ難きに由り、平にこれより立ち歸れよ、もしも我が旨に従はずは、我はこゝで自害をするぞ」

一世の雄も一朝悲運の取巻くところとなり、五尺軀の置きどころなき惨境に達するや、あはれ三人の寵臣だもこれを伴ふに由なき仕合せである。三人は泣いた、死別は諦むべし、生別に至つては残念限りなし。婦女子の態といふなけれ、寵臣として何とて泣かずにをられやう。されど三人の泪がたとへ湖水とその暈を競ふとも悪運強き家康がその搜索の手を妨ぐることはできないのである。三人は終に涙を揮つて三成に別れた。

寵臣に離れてたゞ一人となつた三成は鳥上山にその日を暮した。夜に入つて山を下り、半福寺村に現はれたが、指して往つたのはその村の最勤院といふ一寺である。幼少の頃、手習したる因みを以て訪うたのであつたが、訪う者愚か訪はるゝ者賢か、末世の賣僧は世間普通の人情もて遇した。即ち門内にも入れずして曰つた。

「疾く〱何方へなりとも落ちさせたまへ」

ア、三成は頼む木蔭が無いのである。されどいかに末玉でも棄つる佛ばかりはない。三成よ、窮通は命なるぞよ、公それ何れに行かむとする。彼は最勤院より程遠からぬ善住院といふを訪ねた。果してこの寺では活きた人をも扱つた。住持は快よく三成の請ひを容れてその夜を明かさせた。三成は漸く潜伏し得てホツと一息ついたのであつたが、その悦びも束の間に過ぎなかつた。隠れたるより顯はるゝはなし、翌日は早くも村人の感附くところとなつた。

「御僧は落人を隠し置かるゝと聞く、後日の憚なきにあらず、急ぎ寺中を出だされよ、然らずば地

頭へ訴へ申さむ」

と怒鳴り込む者さへあつた。住持もこの上は如何ともすべからず、三成に襤褸を着せ、蓑笠を冠らせ鎌を腰に差させて裏門から遁がせた。ア、佐和山二十萬石の殿様は樵夫姿となつた。運命の神はいかに彼を翻弄せむとはするぞ。三成は板村、吉村、七曲を過ぎ、復び山中に分け入つた。人目を忍むで山田に下り落穂を拾ひ食ふて三日は飢を忍むだが、終に下痢を病つた。天はどこまでこの正直漢を苦しむるぞ。三成は病に堪へかねて山を出た。思ひ出したは往時、情をかけた古橋村の與次郎太夫といふ者であつた。病軀を喘ぎ〱つゝ、與次郎太夫を訪れた。

「與次郎、しばらく隠れ得させよ」

いふところの情は人の爲めならず與次郎太夫は三成が成れの果を見て、泪を流がして臥床を設け、心を罩めて看護した。

一四八 乾坤一擲 (十四)

大谷隊は殲滅し、宇喜多も小西も石田も崩潰し、乾坤一擲の戦場には今や義軍として残存する者、只惟り島津あるのみ。

これより先、島津隊に在つては三成の請援を排け、宇喜多・小西の敗兵の混入するを拒ぎ、
「我が隊を亂るものは、味方といへども斬るべし」

石田三成を中心に

と命令して全隊を坐せしめた。又、

「敵近づかざる間は撃つべからず」

と下知して、鐵砲隊を跪かせたが、諸隊を破つた逆軍は總が、りで突撃して來た。その狀宛然洪水の押寄せたごとくである。その突撃の急なるや、海嘯の如くにして鐵砲は何の役にも立たず、ただ呆然たるのみである、こゝに於て刀槍の接戦は火花を散らすに至つた。敵味方混淆するや、合言葉も判然せず、混戦亂闘、同志打も多かつた。

惟新入道は岡阜に在つて戦況を視てあつたが、義軍はみな崩潰する、自隊も過半の死傷を出したので、豊久及阿多盛淳を召き寄せて、

「この上戦ふも勝目はない。さりとて我が老軀を以てしては伊吹の嶮を踰ゆべくもない。幸ひ向ふに見ゆるは内府の旗本らし。これより突入して潔く討死せむ」と決心のほどを語つた。盛淳は言下に止めて、

「一軍に將たる人の、粗忽に討死を仰せらるゝは沙汰の限りの御覺悟でござる、千騎が一騎になるまでも、今日の戰場を退かせたまへ」

豊久もまた口を極めて諫止した。そこで惟新は家康との決戦を思ひ止まり、残れる手兵を一團となし牧田村より西南に退却するに決し旌旗を棄て馬章を折り、密集團結以て洪水の中を突破した。福島正之は之れを見て進路を遮り惟新父子を討取らむと駈向つた。小早川・本多・井伊の諸隊も追撃

した

豊久は剛勇の士である、馬を返して奮闘し、終に名譽の戦死を遂げた。彼れに殉して討死したる勇士もまた五十餘人に上つた。豊久の首を取つたのは、小田原の浪人笠原藤左衛門といふ者であつたが本多の兵、豊久の首を取つたと連呼して味方を勵ましたので井伊の隊も我れ劣らじと阿多の隊を急撃した。盛淳は左右を顧みて主人惟新のことを聞けば、既に遠く去つたといふ。こゝに於て首を肯いて敵中に取つて返し、

「羽柴義弘入道が、最期の合戦するぞ」

と聲高らかに呼はつて奮戦し、遂に松倉重政の家人山本七助に首を授けた、一方惟新はまた福島隊の追撃を受け、取つて返へして奮戦し、思ふ存分に撃破したが、遂に盛返されて退走した。この時惟新の本隊では死傷散亂夥しく、顧みれば餘すところ僅に八十餘人である。一騎當千の薩摩隼人も最早かうなつては戦闘力はない。松平忠吉・井伊直政等が追躡を拂ひつつ牧田川を越えて多良に向つて走り、途中わづかに松平三郎兵衛が忠吉を傷け、松田源太が直政を射て馬より落して虎口を脱した。

かくて家康が間もなく追撃中止の命となり、乾坤一擲の大快戦はこゝに全く終りを告げたが、時は方に午後三時半であつた。午前八時忠吉・直政が宇喜多隊に對する進戦に始まり、兩人が島津の追撃に終はる。戦場の開閉共に忠吉・直政に由つて行はれたるは奇といふべし。

一四九 乾坤一擲 (十五)

大事の場合に際會して優柔不斷なるもまた有つて用なき味方である。長東・安國寺の如きは即ちそれではなかつたか。

彼等兩人は關ヶ原方面に當つて銃聲喊聲が聞ゆるや、使者を秀元の營に遣はし、

「諸將を下知して御旗を進められよ」

彼の毛利・徳川の單獨講和なるものは廣家一人の計らひであつて、秀元はこれを知らなかつたのである。秀元に在つては長東等からの使者に接して、その要求通り動かむとした。しかるに先鋒の廣家は家康との約を守り一向に旗を立て直さない。秀元の本隊の前に立ち塞がった體裁で、秀元は甚だ困つた。速かに山を下るべきを命ずるや、廣家は言を左右に托して應じない。かゝれば秀元は進退・度を失つて大に當惑し、兵糧をつかふ眞似して時を移した。頗る愚劣な振舞であるが、その困惑の狀が見られる。果して時人はこれを評して宰相殿のカラ辨當とはいつた。

但しカラ辨當なればなほさらいつまでもつかつてゐる譯にはゆかぬ、しばらくして秀元は使ひを長東・安國寺へ遣はし、

「先鋒の廣家等旗を進めず、我等力に及び難し。この上は兩人相談あつて然るべく計らはれよ」といはせた。少しく思慮ある者ならば、たとへ密使の往來を知らずとも南宮山の頂上に陣取るといふ

無法なことをしたときに、既に闘志のないことぐらゐは察すべきである。しかるを長東や安國寺はそれに氣附かずして自分等もそれに従つてその山麓に陣取るさへ愚劣なるに、さらにイザ戦ひといふ時に至つてなほ感附かず、依然として毛利は我等の味方であると信じてをる淺慮のほどむしろ憫れむべきである。長東・安國寺の輩遂に大事を爲すべきものではない。果して秀元の返詞に接するや、進退を如何にすべきと煩惑し、惶惑した。けだし愚惑の骨頂である。今に際むで何の進退ぞや。取るべき道は關ヶ原に突進するに在り、しかも優柔不斷の經理家や生真坊主はこれをなすの勇氣なく右やせむ左やせむといたづらに時を空過した。しかして戦況視察の者の途中島津の退却せるに逢ふて馳せ歸るや兩人は驚いて、伊勢路を指し、尻に帆をかけて退走した。秀秋の裏斬も醜體だが、この卑劣なる振舞もまた醜體である。長島城に在つた山岡景友にまで大鳥居から追撃されて散々な目にあはされ、長東は辛うじて居城の水口に逃げ入り安國寺は京都に匿る、といふ仕合せとなつた。

醜體ではまだこの上手を越したものがあつた。長曾我部盛親がそれである。彼れは大阪の弓、鐵砲の者と共に栗原山に陣取つたが、合戦の朝、逆軍が關ヶ原に向つたといふを聞くや、早くも輜重を伊勢地方に退却させ、關ヶ原に斥候を出して戦況如何を視察せしめ、そして味方の敗戦と聞くやそれとばかりに逃げ出した。彼は最初から闘志のなかつたものであらうが、その逃げを打つに餘りに敏ではなかつたか、その退走するに當り、逆軍の徳永壽昌・横井父子等の多藝口・金谷積から行進し來れるに出會して、散々に撃破され兵士八十人から失ふたといふに至つては、いよく出で、いよく醜とい

ふぐしだ。

一五〇 乾坤一擲 (十六)

長曾我部は逃げ仕度して逃けた。長東・安國寺も尻に帆かけて退走した。單獨調和の毛利軍は如何にしたる。秀元は廣家・廣俊を先鋒として山を下り、近江路に向つた。

先鋒の廣家・廣俊は正則・長政の注意があつたので、家康に面對すべく彼れの陣營に向つたが、秀元はそのまゝ大阪を指して退いた。

秀元が江洲野路で部隊を休息させてをると、黒田長政が膳所から秀元に會見を申入れた。これは長政が先廻りして秀元を待ち受けてゐたからである。それはまだ秀元を人質に取るためであつた。秀元はそれとは知らなかつたが、それでも或は長政は自分を手籠めにするつもりかも知れないとその用心はして長政の陣營を訪ふた。長政は營から五六間立ち出で、迎へ、

「さて、この度は不慮の御弓矢出來いたしてござる」と口を切ての挨拶秀元は言下に、

「そのこととござる」

といひさま、長政の右の手を小手ぐるみに取つて引き締めた。之は懇親の體を見せるためであつたが長政は却つてありがた迷惑であつた。それは秀元の奮力と來ては大したもの、さすがの長政でさへ

五六日は右の腕が痺れて利かなくなり「さて、事々しい」と他日家人に話したといふほどであつたからである。それはさておき長政はいつた。

「吉川・福原の兩人が申した由でござるが、その兩人の申したやうに人質にお出で然るべし、この儀を申すため、お先へ参り待ち申した」

秀元は長政が自分を手籠めにするのではあるまいかと用心した、それが幾分中つたので、早くも心に決するところあつた。彼は斷乎としていつた、

「御内意畏入つてござる、仰せのごとく兩人の者共の申すこと、は申しながら、今度の和議は吾等に於ては少しも存ぜざることとござる。されば内府へ人質に出てもそれは詮なきことである。その譯はこの和平について何事にもお訊ねあらむ時、元より一向存ぜぬことゆゑ、返答の申上やうもござらぬ。この度の出陣は輝元の申付に由つてとござれば、この上輝元より人質に出でよと申さるゝにおいてはその時は是非に及ばず、罷出づべきが、さなくては誰人が宣ふとも出で申すまじ、兎に角輝元に用談の儀あれば我等は大阪へ参るべし」

と長政は右の腕を痺れさせられた上、この返答を聞いて、呆れかへり、しばしは無言であつたが、遂に當人の自由に任せて大阪へ去らせた。

記してこゝに至つて顧みれば義軍はかくして或は講和或は内應或は全滅或は散潰、或は敗走、或は遁走、或は退去して以て悉く關ヶ原よりその影を去つた。秋天は恰も九月の十五日である。その夜の

満月は果して如何の色をかしたる。

一五一 乾坤一擲 (十七)

敗者の慘憺たるに引かへ勝者の賑やかなことはまた格別である。逆軍の陣營々々はみな有頂天になつて歡呼拍手してをる。この時に當つて御大家康は如何といふに、天満山の西南なる藤川の高地に在つて、俄に兜を打ちかぶつた。左右みな怪訝の思ひをしてをると彼れは曰つた。

「勝つて冑の緒を締よとはこの時をいふ」

さすがは石橋たゞきだけあつてドコまでも行き届いたものである。これに反して諸將はみな大得意、早くも天下を取つた氣で、いづれも冑を脱いで高紐に懸け、または家來に持たせて打ち寛いだ様子して、續々本營を訪ひ來つた。家康は首級を検しつゝ、これ等の諸將を延見したが黒田長政先づ伺候し

「今日の合戦に某が手の者の持は赤井五郎父子が能く視てござる」

といふや、家康は長政を膝近く召し寄せ、その手を取つて頭上に戴き、

「今日の合戦に勝利を得たるはひとへに貴方の計策に因る、その上今に始めぬことながら、今日の戦ひに手を碎き、忠義を勵み、敵の張本石田を追ひ崩されたる手柄は比類なし、この忠節報い難ければ、代々黒田の家に疎意あるまじきぞ」
かくて差せる吉光の小脇差を引いて手づから長政の腰に差し、

「是れは當座の引出物である」

この時諸將大概至る、長政は諸將列座の前でこの賞美を得たので、甚く面目を施して引下つた。長政が退くや、諸將夫れ々々戦勝を賀したが、家康は一々その功勞を賞美して喜ばせた、中にも本多忠勝は進み出で、

「今日の諸將の御働きは實以て比類なし」

と稱揚して主人の言葉の足らざるを補ふ。それをまた福島正則は聞いて、

「中務大輔が人數の差引、常々承はり及びたるよりは、勝つてござる」

と褒め返す、忠勝は飽くまで謙遜して、

「某が差向ひたる敵は、いづれも殊の外脆弱であつた」

と答へて功を蔽ふ。そこへ手傷を負つた老人が家來に首級を持たせながらやつて來る。見れば織田有樂である。首級は蒲生郷舎のそれであつた。家康は差し召いて、

「老人に似合はぬ働させられしと覺ゆ、蒲生備中は弱年の頃より用ひられたる者、不便なればその首は貴老へ參らす。然るべく葬りたまへ」

忠勝の次男内記は曲つた太刀の鞘に入り兼ねたるを、拔懸けにして參候した。家康はこれにも、

「内記、功名したか」

と一語をくれ、しばしあつて松平忠吉が手を負うて參候するや、

「手を負うたか」

「かす手でござる」

と父子の間答がある。續いて腕を首にかけた一將が入り來つた、こは赤鞆の隊長井伊直政である。家康は打ち見て床几を離れ、

「兵部、創は如何に」

と驚きたるさまして進み寄り、手づから藥を取つて創に注ぎ、餘りを忠吉に與へた。將士を愛することかくの如く厚し、彼の爲めに死なむことを思ふ者ある、宜なるかなだ。直政は藥を注がれつゝ、諸將に會釋もなくいつた。

「今日の合戦、某より先なる人はあるべからず」

家康は言下に、

「其方が軍功、今に始めこと」

直政は更に忠吉の戦功を稱揚して、

「逸物の子は逸物でござる」

といふを家康はまた受引いて、

「さればとよ、取飼手がよかりし故であらう」

見至れば君臣の睦まじきこと、父子兄弟の如くではない歟。重ねていふ、彼れの爲めに死なむことを思ふものある、宜なるかなだ。

一五二 乾坤一擲 (十八)

上杉押へのため宇都宮に置かれて關ヶ原戦に従軍を許されなかつた結城秀康は、家人の眞砂作兵衛山名與次兵衛等を従軍させてあつたが、當日上記の二人も功名手柄して家康の前に參候した。家康は一見その戦ひ振りを賞揚し、

「今日の注進として關東へ馳せ下るべし」

と命じた。これは名譽の使ひである。兩人は願ふところであつたらうが、奈何せむ、兩人とも手傷を負ふて、苦しむでをる。兩人はそれを辭退して別人に譲つた。

戦捷參賀の諸將は大方は來たが、まだく來ない者も二三はある、中にも當日義軍の死命を制した裏斬り者の秀秋のまだ來ないのに氣の附た家康は、家人の村越茂助を召し出し、

「筑前中納言、裏斬の功あれど、先非を惶るゝか、未だに參向なし、其方急ぎ馳向ひ、秀秋を案内せよ」

茂助は畏まつて、金吾の陣に馳せ着け、

「御案内のため馳せ參つてござる」

といつた。秀秋は家康の想像通りであつたと見え、茂助の使を一方ならず悦むで、茂助に黄金百枚を

取らせ平岡・稻葉の兩家老その外近臣二十人許り召しつれ、茂助に案内されて家康の陣營に伺候した。黒田長政はかねてこの肝煎であるから、先づ迎へてそれを家康に披露した。家康は床几から下りて、兜の忍の緒ばかりを解き、

「中納言殿、弓矢の禮儀これまでである」

秀秋は芝の上に平伏して、恐る／＼戦捷を賀した。家康は重ねていつた。

「貴殿、今日の戦功莫大なれば向後遺恨は少しもない。これより佐和山に行き、石田の居城を攻落せられよ」

秀秋は喜むで佐和山攻城の先鋒となつた。秀秋に續いて脇坂安治も参候した。このところ裏斬者拜謁の順番の體である。家康はこれにも言葉をくれた。そこへまた吉川廣家から長政方まで戦捷大賀の使者があつたとて長政より披露あり家康は聞いて、

「それは祝着」と辭令を與へた。

この時正則はまた進み出で、頌辭を呈すべく曰つた。

「内府公の威烈の廣大なる、大敵を僅に半日の間に踏み潰せり、かく大功を立てらるゝことの速かなるは、古來未だ聞かざるところでござんぬ」

岡江雪も進み出で、曰く、

「夜の明けたるやうになつてござる、宜しく凱歌をあげさせたまへ」

寄つてたかつて、述ぶるところはみな戦捷慶賀である。家康の武功稱讚である。大抵の大將なら賀辭に中毒するところだが、古狸に限つてはナカ／＼そんなものではない。彼は早くも兜の緒を締た位だから、百千萬の賀辭があつても、それがために有頂天になるやうな男ではない。彼れは江雪に對していつた。

「平場の戦はいつもかくあるべし。さりながら諸將の妻子はなほ敵中に在ることなれば、凱歌を上げるはまだその時節でない、近日大阪に登り、人質を諸將に渡して然る後に凱歌を上やう」

これはまた道理あることである。一面諸將に對する同情の言葉とも聞ゆる。それかあらぬか諸將は涙を流して感謝したといふ。

一五三 乾坤一擲 (十九)

諸將の参賀も終りを告げた。夕刻家康は藤川の高臺に在る大谷吉繼の捨小屋に宿し、諸將の多くもその近邊に露營したが、秀秋及び脇坂安治、朽木元綱は佐和山攻城の先鋒なるが故にその日直に出發し、井伊直政もまた之れが監軍となつて、次いで發した。

これより先、朽木元綱は裏斬して多少の武功を立てたといふものゝ、後暗くして戦捷参賀もなしかねてゐるが、時は過ぎて夜に入つたので密に細川忠興の營に至り、

「今度某上方へ與して内府公のお咎め遁れ難い。さりながら脇坂と一手になつて、少しの志をなしたるにつき、この上は如何にもして内府公の御機嫌を直し給はれよ」と哀願した。武士が泣いての頼みである。如何に忠興でもこれを見捨つることはできまい。

「然らば御本陣へ同道して貴方の罪を謝してみやう」

と元綱を伴うて藤川の本營に伺候した。家康は今しも晩食最中であつたが、忠興が、

「朽木河内守、内府公へ御敵をなし今更後悔身に迫りたりとて某を頼み、色々詫言申してござれば……」

といひその間に當の元綱も入り來つて陳謝したので、ハ、と笑つて、

「其の方などは少身なれば、草の靡きといふものである、敵したりとて大罪ではない。本領安堵申付くべし」

かう大きく出られては元綱いよいよ恐縮せざるを得ない。彼は平伏し、

「有がたき御恩徳でござる」

と繰返し、禮を述べて退出した。元綱が秀秋と共に佐和山に向つたのは、此陳謝の後の事である。

なほこれより先であつた、家康の細心を覗ふに足る一話題が拾はれてある。それは丁度申ノ刻即ち四五時の間であつた、俄に大雨が至つて盆を覆へすやうな有様となり、各陣營では飯を炊くこともできないうやうな仕合せである。その時家康は使を各營に遣はして、

「諸勢、米を食するにおいては能く洗つてほとびたるを食すべし、然らずば腹中に當るものぞ」と下知した、かかる細心なことはかかる場合において尋常人のできることはない。諸將はそれを聞いてその心遣ひに感歎したといふことである。

感歎で思ひ出すが當日家康には感歎すべきことがなほ澤山あつた。中にもその膳立所の質素なこと、の如きは意想の外で感歎を禁ずる能はざるものである。太閤は何事にも華美を競うた。これに反して家康の質素と來ては高利貸もなほ及ばぬほどのものであつた。當日彼れの膳立所を見るに芝原山に細竹を渡し、その上に澁紙一枚張り、その下に鍋二つ、火を焚く覆ひもなければ、料理する敷物もない水汲み桶が三ツ、湯を湧かす藥罐が一ツ、三人前の辨當が一ツある限りで他には何も無い、料理人も一人で水を汲むだりその他の雑用する荒醜(下男)が五人をるばかり、見至れば天下分ケ目の大合戦をなす一方の總大將の膳立所とは、どう考へても信じられない。實に板阪卜齋はその覺書において「今時三千石ばかり知行取り、野陣に居候とても、これよりは増し可申候」と記してをる。三百年の覇業をなす者は違つたものではない歟。三百年を持続するその精力はかゝる質素な行事の内に潜在してゐるものであらう。

一五四 佐和山の悲劇 (上)

彦根の東北に當つて一山がある。これぞ三成が居城して有名なる佐和山である。

石田三成を中心に

三成が美濃に出征するや、留守として父の正繼、兄の正澄、岳父の頼忠(宇多)その外妻子を置いてあつた。

留守の將士はみなこれ石田の一家一門である。勝てば勝ち、敗くれば死は免れぬところである。これ位の覺悟は彼等には在つた。三成出征後の戦況や如何にと日夜鶴首してその報道を待つてゐるが、關ヶ原の大敗を聞くや、中にも正繼、正澄等は早くも決意した。この上は城を支持したとてそれは單に幾干かの日を延ばすに過ぎない、歸するところは落城あるのみ。いたづらに支持して多年忠勤の士卒を殺すは情として忍びざるところである。むしろこれを放還して我等數輩のみで死守して以て潔く死するに如くはないといふが銘々の同一意向であつた。こゝに於て凝議の結果、士卒を集めてその旨を諭し、死を共にしたき者のみを留まらしめて嬰守することゝなつた。それでも留まつて死を冀つた者は凡そ二千八百人あつた。

味方が關ヶ原に大敗した以上、敵は洪水の如く押し寄せて來るは必定である。正繼等は直に部署して城を固めたか、果して十七日には數萬の大軍が山下に押寄せた。小早川秀秋・朽木元綱・脇坂安治・小川祐忠等は箚尾口より攻めかかつた。

正午の頃秀秋の先鋒平岡頼勝等は切通しより城壁に迫つて戦つたが、こゝを守る者は津川清幽父子であつたので、拒戦防闘大いに敵を惱まして敗走させた。しかも脇坂・朽木等の箚尾口を攻むること急なるや、守將山田上野支ふる能はずして使を本丸に馳せて援兵を請ふた、本丸では直にかねて大阪から來援せる弓・鐵砲頭の赤松則房・長谷川守知を遣はした。山田は新來の援兵を得て士氣大いにあがり、更に二時間餘も奮闘したが、奈何せむ寡は衆に敵すべからず終に敗走した。山田が敗走したので則房もまた本丸を差して引揚げた。この時に當つてこゝにもまた小秀秋を見るの醜體が演ぜられた。長谷川守知が裏切つたのである。しかも秀秋の隊に向つて内應の矢文を發した。牛は牛づれ、馬は馬づれか、醜漢、醜漢を知る、平岡頼勝は大に喜むだ。けだし守知の叛意は當日俄に萌したのではない。彼れは實にさきに京極高次と約するところあつて大阪からの援兵と稱して佐和山に入つてゐたのであつた。ア、油斷のならぬ人の世よ。やがて正繼はそれと覺つた。彼れは大いに怒つて守知を殺さむと計つたが、醜漢守知は早くも察して水道から脱出して同類の下に走つた、秀秋の隊に奔逃したのである。

一五五 佐和山の悲劇 (下)

田中吉政は水の手口を攻めてほとんど破りかけたが、時は丁度日暮であつた、家康よりの使者船越五郎右衛門景直といふが來て、津川清幽を招きたいといふことであつたので、戦鬪を緩めて清幽を招かせた。

一方清幽は船越の招きがあつたので、その旨を正澄に告げて命を待つたが正澄は直にそれを許して「兎も角、出張して聞いて見るがよい」

といひ、副使を一人出した。清幽は副使と二人で吉政の許に往いて吉政、景直の兩人に會見した。景直は家康の旨を傳へて速かに降参せむことを諭し、關ヶ原で捕虜とした鐵砲頭の青木市左衛門を還へし與へた。こは關ヶ原に於て義軍が大敗せることを證するための贈物である。

清幽は景直の言ふところを聞きいづれ後刻返詞すべしとて青木を伴うて城に歸り、委細を正澄に傳告した。正澄はそれを聞いて嗟嘆之れを久しうしたが、如何に嗟嘆するも、歸するところは死あるのみである。遂に清幽の傳告に聽いて使を吉政に遣はした。

「某一人の死を以て士卒の生命に換へたまはることならば明日にも城を渡すべし、村越直吉殿を城中に遣はされよ」

といふが正澄の返答の要旨であつた、家康はそれを聞いて快諾を與へた。

しかも翌十八日の朝に至つて、吉政の兵は天守閣下の門を破り、内城に突入する、清幽の子の重氏等は奮戦激闘してこれを撃退して門を鎖す、さうかうする中にまたもや裏斬する者があつて火を本丸に放つたので、正澄・正繼等は如何ともせむ術なく、天守閣に駈登り銘々に妻子を殺して自盡した。兎も角も一死を以て女童士卒の生命を救ふことになつてゐた折柄のできごとであるから正澄の無念はけだし非常であつたらう。それよりは罪なき女童があつたら一命を棄つる當座の光景はどんなであつたらう。佐和山城内のこの瞬時の光景はまた一大悲劇であつた。三成の夫人宇多氏もまた正澄等の妻子と共に最期を遂げたのである。三成の家老土田桃雲が刺して以てその死を助け、己れもまたこれに

殉じたのであつた。正澄等みな死するや、岳父の頼忠及びその子の頼重も尋いで自害した。

これより先、家康は正澄が前日の約に従ひ、彦坂小刑部・村越直吉の兩人に命じ、城を受取るべく遣はしたが、兩人がまだ城に到着せざるうちに、早くも前記の始末となつて落城したので、呆然として引き返した。かゝれば家康は城の全く陥るに及むで内藤信正・石川康通・西江正員を城に入れ、以てこれを衛らせた。

こゝに一ツ附け加へて置かねばならぬことがある。それは三成の子の重家のことである。彼れは正澄等と共に城中に在つたが、自盡の時に當つてその列に加はつてゐない。或はいふ、この時近臣三人重家を護して城を脱し、高野山に登つた、と後年本多正信が家康に伺候した時、家康は、

「石田の倅が妙心寺の永壽院といふにをるといふことで寺中一同訴へ出で、同時に命請ひがあつた」

といつた。正信が、

「いかゞ仰せつけられしや」

と問ひ返せば、

「否やの儀はまだ言はぬ」

といふ。この時正信膝を進め、

「それは疾くにも御免ある儀と存する、何故なれば治部は御前へ大きな御奉公を致した者でござ

石田三成を中心に

る。即ち治部が不了簡から關ヶ原の大合戦は起り、御前の天下となりしものでござる。かかる大奉公の者の坊主子一人ぐらゐるは御助命なされてもよろしかるべしと存する」といつた。家康はそれを聞いて失笑し、

「昔よりおが屑も結へばゆはるゝといふが……」

といつて、その言に従つた。おが屑もゆへばゆはるゝとは俚諺である。理窟をつくればつくものであるといふことである。かくして三成の一子は岡部美濃守に目を懸けられ、長壽して泉州岸和田に在つたといふ。之の子即ち彼の重家ではなかつたらうか。

一五六 輝元降る (上)

家康は關ヶ原に夜を明かして、翌日佐和山に向ひ、十七日平田山に陣取つて佐和山攻城の様子を見てあつたが、この日早くも正則・長政に大阪なる輝元誘降のことを命じた。正則等は命に従つて一書を認め、使を大阪に遣はした。家康はまたその使に附するに毛利の家老福原廣俊を以てし、以て廣俊をして關ヶ原合戦の前日單獨講和を締結したことやらその結果として直政・忠勝の兩人から封土舊に仍るの誓書を入れてあることやらをつぶさに語らせた。

正則等の手簡(1)といふは吉川・福原の兩人が毛利家の大事を慮り我等兩人まで申入るゝところあつたので我等はそれを家康に取次いだところ家康は輝元に對しては少しも介意してをらぬ、輝元がも

し忠節を盡すにおいてはこの後とも従前の如く國政を協議すると申入れよと、我等兩人に命令があつた。委細は廣俊に申合せてあるといふのである。

輝元は正則等の使に接して右の手簡を披見し、なほ廣俊の口上をも聽いて大に喜むだ、封土舊に仍るとある直政等の誓書を見て特に悦むたのであつた。この時秀元は既に大阪に歸着してゐたので直政等の誓書は信を措くに足らない、もしもそれを履行させやうとするには秀頼を擁して大阪に籠り、そしてそれを強要する外はない、と主張して輝元を諫めたが、輝元はそれには耳を假さず、さういふ答書(2)を認めて使を歸した。答書の意にいふ、今度廣家・廣俊等が兩所の世話で内府と別懇になつたのは忝けない。殊に領地舊に仍るの誓書を得て安堵した。増田長盛・徳善院玄以の兩人と談合したから取成し肝要であると。書中長盛・玄以の兩人と申し談じたとあるが、輝元は正則等に返答するに當り長盛・玄以の兩人に一應相談するところあつたものと見える。

けだし家康が佐和山のなほ抜けざるに當つて早くも輝元誘降に着手したは、輝元にしてもし大阪城に據り、更に抗拒するあらば戦亂再び始まり且つ大阪は海内第一の名城であるから容易に攻落することできないと見て取つたからである。心計の妙、測り知るべからざるものがある。

(1) 態申入候、今度奉行共逆心之相構付而、内府公濃州表御出馬付而、吉川殿、福原殿、輝元御家御大切に被存付、兩人迄御内存、則内府公え申上候處、對輝元、少茂無御如在之儀候間、於御忠節は、彌是以後茂可

被仰談之旨、從兩人可申入之御意候、委曲福原口上に申合候間、可被申上候、恐々謹言
九月十七日

羽柴左衛門大夫正則

黒田甲斐守長政

輝元 様

(2) 御札拜見候、於今度先手、吉川・福原以下得御意候處、以御肝煎、内府公別而御懇意之段、忝候、殊分國中不可有相違之通、預御誓紙、安堵此事故候、増右徳善申談候條、一具御取成、肝要候、猶兩人可得御意候
九月十九日

羽柴左衛門大夫殿

黒田甲斐守 殿

輝元

一五七 輝元降る (下)

一步退けば二歩が促迫する。是れ争ひにおける常である。輝元は正則・長政の言に聞いて一步を退いた。ために二歩するの必要が迫つて来た。

輝元は今まで占據してゐた西丸を明け渡さなければならぬ形勢になつて来たのである。廿二日に彼れは直政・忠勝及び正則・長政へ西丸明け渡しの手書(1)(2)を入れた。文句は前後と多少の相違はあれど、二誓書の骨子は西丸明け渡しの一條に在る。

家康は直政・正則等から前記の二誓の事を聞き、大に喜びで正則・輝政・幸長・長政・高虎の五人に西丸受取の事を命じた。これより先正則等は葛葉に至つてゐたが家康から西丸受取を命ぜられたので五人協議し、連署で以て輝元に一通の手書(3)を遣り、さきに直政・忠勝の兩人から入れた誓書(九月十四日のもの)にはウソ偽りはなく家康も輝元に對しては敢て介意するところないといつた。

正則等が西丸受取の時に際しなほかやうな誓書を入れるといふは何の故であるか、これには仔細がある。それは輝元においては西丸明渡を誓つてはをるものゝ、渡して退去した後果して家康が領土舊に仍るの誓言を履行するであらうか、且つやその誓書なるものは家康の署名あるものではなく、直政・忠勝の兩人が代つて署名してをるのであるから、他日家康において俺れは知らぬといへばそれきりになる」と心配してゐた。現に輝元は廿五日廣家まで講和周旋の勞を謝するの書を與へた時には、「羽左太(正則)黒田(長政)兩人衆の手前、愈々以て親疎なき段、申され候由、尤も專要に候、此方においても其見懸に候、然しながらそれは其身其身忠義に成り候所をこそ存ぜらるべく候條、頼みには成り難く候歟、いまだ井兵少(直政)へ御直面にて御たのみ入り相調はず候段、此の儀笑止迄に候」といつて正則・長政の周旋のこと、直政よりの誓書のことを左まで信を措くに足るものでないやうにいつてをる、輝元が西丸明渡後の誓書を入れたのに對して正則等もまた誓書を入るゝに至つたのは、實に右の事情に基くものである。

輝元は正則等の誓書を見て、いさゝか安心したと見え、その日西丸より木津の邸に引移つた。この

時も秀元はこれに反対したといふことである。輝元の西丸明渡しと同時に増田長盛もまた高野山に籠居した。正則等はその日大阪に入つて西丸を受取り、秀頼に謁見した。かくして大阪もまた何等の抵抗なく逆軍の手に歸したのである。

(1) 敬白靈社上巻起請文前書之事

- 一於今度先手、我等心底之通古川侍従、福原式部少輔得御意候處に、以御取成被遂御分別、忝存候事
- 一我等分國、無相違被思召分に通、誠令安堵候事
- 一於此上者、西丸之儀、渡可申候、以來奉對内府様、聊不存如在、表裏別心不可有之候事

右於偽者(神文略)

九月廿二日

輝元

井伊侍従殿
本多中務殿

(2) 敬白靈社上巻起請文前書之事

- 一今度之儀、以御取成、被思召分之段、忝候事
- 一吾等分國、無相違安堵可仕之通、誠大慶存候事
- 一於此上は、西丸之儀、渡可申候、以來之儀、彌可然之様、憑存候、對御兩所向後聊表裏別心不可有之事(神文略)

慶長五年九月廿二日

安藝中納言輝元

羽柴左衛門大夫殿
黒田甲斐守殿

(3) 起請文前書之事

- 一井伊兵部少輔、本多中務大輔誓紙、聊偽無之事
- 一對内府様、輝元於無別條者、表裏ヌキ公事無之、御馳走可申上事
- 一對輝元、内府様少も御如在有間敷事(罰文略之)

九月廿五日

藤堂佐渡守
淺野左京大夫
黒田甲斐守
羽柴左衛門大夫
羽柴三右衛門尉

輝元様

一五八 家康大阪に入る

石田三成を中心に

輝元・長盛が大阪城を退去したので、大阪城は一兵に塗らずして逆軍の手に歸したわけである。この
において家康は廿七日大阪に入城した。

これより先家康は十八日八幡に、十九日草津に、一宿し、廿日大津に來つてそこに廿六日朝まで滞
留した、その間十九日には草津で御慰問の勅使の下向に會した。

「今度天下の兵革起り、叡慮頻りに安からず、しかるに内府上方の亂を治むるため、關東の強敵を
捨て、馳上り、たちまち雌雄を決せしこと、古今稀なる大功である。いよく國土豊かなるやう沙
汰せられよ」

といふが綸言であつた、家康は詔に答へて曰つた、

「上にも知らし召さるゝ如く、秀頼幼少なれば逆臣、天下の亂を起すとも、味方の諸將戦功を勵み
兇徒を退けたる上は、諸國の殘黨は旗を卷き四海波穩かならむこと疑ひ候はず、この旨宜しく奏聞
あつてたまはるべし」

勅使を下さるといふことは家康に取つては、非常な勢威である。彼れは石田を以て逆賊と稱し、これ
を征討するといつて戦つたのであるが、その實は自分から石田をして戦を起させたのであつて、繰り
返して謂ふまでもなく、彼れこそ逆賊である。故に彼れの胸中には常に平らかならぬものがあつたに
違ひない。然るにそれが一朝戦捷の人となるや勅使が下つたのであるから謂はゞ靖國公として朝廷の
承認を得たやうなものである。されば此時の彼れの悦びは如何ばかりであつたか知れない。但し光秀

が大逆を企てた時にも勅使は下つたとかいふことであるから西郷南洲ではないが勝てば何時でも官軍
さ。

廿日には秀忠が中山道から上つて來た。家康は秀忠が信州で一眞田に阻止されて關ヶ原の決戦にも
後れたのを腑甲斐なく思つてをる矢先であつたので、秀忠の來着を見ても面謁をも許さず、そのまゝ
大津に發足した（此の事は後章に説く）が、しかし秀忠の來着は勅使の下向と共に家康の勢威をしてま
た一層ならしめた。そこで公卿縉紳農工商估に至るまで、陸續として賀を献じ、門前市を爲した。

なほ廿日大津に着いてからであつたが、家康は大野修理亮治長を招いて、

「この度の兵亂は三成惠瓊等の方寸に出で、秀頼公は幼少といひ、淀君は婦人といひ、いづれも關
知なきところ、されば母子に對しては更に恨みなし、其方一足先だつて大阪に行き、この旨を申入
れよ」

と命じた。また同日人を伏見に遣はして同地に在る義軍諸將の邸宅を焼かせた。さて治長は仰せ畏ま
るとして直に大阪に到り、秀頼の近臣に面對してその旨を傳達したが秀頼母子は此後いかなることにな
るやと大に煩悶してゐたので、この傳達に接して大に悦び、大野に使者柘植某を副へて家康の陣營に
答禮させた。この時も家康は、

「太閤の御遺言といひ、秀頼公御幼年の御事なれば更に疏略はない」

といつて使者を遣へした。家康が寡婦孤兒を欺くことは既にこの時から始めてをる。

これより先家康は廿二日正則等を葛葉に至らしめ、翌日大阪城を収む可きを命じ、なほ當日に至つて秀忠に對面を容るし、その夜、伏見に先發を命じた。かくして家康は廿六日大津を立ちその日淀に着いて同所で一泊し、翌廿七日大阪に乗込む。當日秀頼に謁見して直に御輿を西丸に下ろし、秀忠を二ノ丸に置いた。なほ當日大久保長安等に命じて近畿各地の寺院その他につき、義軍の將士の財物藏匿の檢擧を命じた。その手厳しいことには酷史も三舍を避けたらう。

一五九 白石城落つ

關ヶ原の決戦は以上の叙述に由つて終りを告げたが、この決戦に前後して海内各地に小戦が行はれたことを記さねばならぬ。それは無論決戦に關係のある戦争であるからであつて、其早きものは決戦前に片付き、遅きは翌春に及むでをる。

決戦が終つた以上、次に叙述すべきは賞罰であるが、賞罰を叙述するには各地の小戦の結果がわからねばならない。先づ各地の小戦の始末から叙述して、そして賞罰に及び、以てこの物語の終りを告げたい。各地の小戦を叙述するに當つて、一言して置きたいのは、叙述の順序である。小戦は各地とも殆ど同時に起つてをるので、これから先にすべきか。一番最初に兵を擧げたものから始め、その地方に關係して起れるものは他と比較して後に起れるものと雖も、これを先にするといふことにしなければなるまいと思はれる。そこで先づ筆を染めたいのは、會津地方の戦争である。之はさきに家康が三成の擧兵を聞いて西上するに至つて中止したのであるから、これからその當時に立戻ることにするるのである。

上杉景勝は、さきに長沼に出勤してゐたが、三成が兵を擧げたので東下した。逆軍の諸將は大方西上するといふを聞き、その由を米澤に歸つてゐた直江兼續に報知した。兼續はその内にまた奉行等が家康の罪を數へた書と檄文とを手にしたので、これを將士に披露し、それから米澤を立つて長沼に來た。これ八月五日である。兼續は景勝に謁していつた。

「秀頼公、兵を擧げ畿内中國四國の諸大名これに應じ、先づ伏見を圍むので、内府は小山から江戸に退くといふことであるが、内府に附ける諸將の妻子はみな大阪に在ること故、きつと迷惑して義軍に歸ることをごさう。この好機に乗じて内府を追撃せば、必勝期すべきでござる」

座に連れる、諸將士もまた大方これに賛同し、こもく、その決行を勧めたが景勝は肯かず、
「輕々しく追撃せば、政宗・義光等きつと背後を窺ふであらう。それよりは先づ彼等を打ち果し然る後兵を出すも晚くはない」

といつて八月十日長沼の陣營を撤去し、白河に入り、蘆野に出で、敵情を視察して居城の若松に歸つた。そこで兼續も已むを得ず、米澤に歸つた。

これより先、政宗は逸早く歸國して、居城の岩手澤にも歸らず、直に北目城に入つて上杉領の侵略を企畫し、七月廿五日白石城を攻落した。

白石は陸奥の刈田郡に在つて信夫口を扼してをるもので、上杉に在つてはこれを東北の要衝となしその城主にも特に人を選び、上杉にその人ありと聞えた甘糟景繼を以てした。白石城の所在地方は嘗

て政宗の領地であつたので、人民の多くはなほ政宗を徳とし、政宗も信夫口よりの進路でもあるところから何かの機会においてこの白石城を奪回しやうとしてゐた。景繼もまた來つてその城に入るや早くも右の情勢を看破し、爲めに急ぎ城壘を修築して竊に政宗に備へてゐた。三月十三日景勝が諸將を若松に召集した時の如き、景繼は留守を案じ使を政宗の家老の石崎昭光に遣はし、双方相侵さぬやう誓ひを立てやうではないか、と談じて質を交換して然る後若松に往つたぐらゐである。以てその如何に用心してゐたかが知れる。兼續の如きも政宗が上方から歸つたと聞くや、急ぎ景繼の歸城を命じ、自分はなほ二三日滯留して隣國の情況など視察して歸る、もしもその間に政宗が進撃して來たら、直に出馬するから注意をおこたるといつた。景繼も憂ひは同じである。七月十五日若松を立つて白石に歸つた。

白石城については上杉ではかやうに用心してゐたが、その後間もなく徳川軍が江戸を發したとの牒報があつたので、それに對抗する必要上、景勝は大に軍を白河に會した。そこで景繼も弟の登阪勝乃同新左衛門に兵千人を附して白石の留守を命じ、直に白河に出發した。政宗の方ではかねて白石城に間者を入れてあつたが、間者は景繼が白河に出發するや否や、急ぎ北目に歸つて政宗に報告した。政宗は先づ白河から攻略を始めやうと計畫を立て、機會を待つてゐたから、好機逸すべからず、とかねて家康から勝手な進撃を止められてゐるにも拘らず、二十一日北目を發し二日四保で攻城の隊を部署し、廿四日拂曉兵を城に迫らせ一方城下の民家を焼かせた。城兵は不意に驚いて、たちまち三ノ丸を奪はれ、南の丸二ノ丸を破られ將士七十餘人枕を並べて討死した。勝乃大に戰つたが如何ともすべからず、廿五日降を請ひ午後に至つて城を授けた。この時西方から攻めたものはさきに景繼と誓書を交換して不侵を誓つた石川昭光であつた。

白石城を落した政宗はそれを取つて平生の願を達したが、家康からその西上に際して領内に引揚げが命ぜられたので、燃ゆる野心を押へて北目に歸つた。けれども取つた白石城は容易に放すことではない。彼はその後片倉景綱に命じて修築させた。

一六〇 川俣と福島

政宗が白石城攻撃の當日に於て川俣城の争奪戦が行はれた。これより先政宗の家臣櫻田元親は嘗て川俣が政宗領たりし時その城主であつたので、その邊の地理に明らかであるところから不意に襲ふてこれを取つた。且つ大館・大波・小手内等に駐屯してその附近を放火し劫掠した。川俣城は岩代の伊達郡に在つて福島・二本松・梁川の通衢である。福島城を守備してゐた上杉の家臣上泉泰綱並に目附本村親盛・青柳隼人佐及二本松在城、石栗將監等は敵が川俣城を取つたと聞いて大に憤り進み出で、大波の敵を追ひ散らし、その勢ひで川俣城を攻めた。元親は地理に明かなりといふだけで奇襲して取つたわけであるから、逆襲に備ふる兵力も充實してをらぬ。たちまち脱走して何の苦もなく城は落ちた。この時親盛は別隊となつて大館・小手内に向ひ、同地に屯せる敵を撃破し、これまたたちまちその地を

占領した。これ實に七月廿四日のことで、政宗が白石攻城最中の出来事である。

福島城は今の福島市に在つた。白石を距る九里の西南に位置してをる政宗は白石を落すや直に福島に攻めかゝらむとし、陽に梁川攻撃を聲言して陰に福島進撃の準備に着手したが、あいにく三日續きの大雨があつて阿武隈川増水して渡渉するを得ず、憾めしさうに減水を待つた。をりから家康の使が小山から來て速かに兵を收めよとのことである。そこでスゴく北國に引揚げたが、さういふ行きがかりがあるので、政宗は殘念で堪まらぬと見え、九月の末に仙道の兵が多く米澤に向つたその虚に乘じ、一舉福島及梁川の兩城を抜かうともくろみ、これを宇都宮なる結城秀康に謀つたが、秀康は同意しない。欲しいものが得られない時は、どうしてでも取りたいのは人の情である、政宗は秀康が同意せぬのでいよく意を決して己れ一手で攻め取らうと十月五日兵二萬を率ゐて北目を發し白石に入城してそこで兵を部署し、途々上杉の出で、邀撃せると戰つてこれを破り、以て福島城に迫つた。

一方上杉では初め上泉泰綱・岡野左内、齋道二等をして福島城を守らせてあつたが、七月に至つて小田切安藝・車丹波・本村親盛・青柳隼人佐等を送り城修繕の目附とした。川俣の爭奪戦は此等の人々の手でしたのであるが、右の内車丹波はその後築地資豊と共に梁川城を援ふべく同城に移つた。これ政宗が梁川攻撃を聲言した時のことである。梁川は須田長義が守つてゐたが、丹波等の應援を得たのでその後政宗の兵が福島に進撃した時、丹波を前田・桑折の間に出して輜重を奪はせ、以て敵の福島攻撃に不自由な與へた。

これより先直江兼續は使を親盛等に遣はして政宗の舉動に注意すべきを命じ、また政宗が白石にや出馬してこれを伐たむとし、その準備を命じたが、政宗が北國に退いたと聞いて中止した。その後八月廿五日に至つて景勝は福島之の守備を本莊繁長に命じ泰綱等を山形攻撃のため米澤に轉じた。なほ景勝は政宗の兵が山形に赴援し、米澤にも來襲するといふを聞いて仙道の諸將を米澤に移した。政宗が秀康に福島・梁川の挾撃を謀つたは、この時のことである。かつその謀は行はれなかつたが、その結果として政宗は福島に出動したのである。

しかも伊達軍は福島城の外廓を攻めてこれを破り、敵に少からぬ損害を與へたけれども、繁長克く守り、容易に抜くべくもない。且つ外廓を破つた片倉景綱は強ひて攻めば抜けぬことはないが、その代りに多くの士卒を損ねばならぬので、むしろ兵を收むるに如くはないと獻言し、さうかうする間に梁川城兵に輜重を奪はれたといふ注進もあつたから、政宗は終に退却に決し、一齊射撃して引揚げた。その夜齋藤兵部といふ者城中より使を政宗に遣はして内應を約するから攻撃せよとあつたが、政宗これを將士に問ひ、石川昭光の反對に聽いて見合せ、依然退却を續行し、十月七日北目に歸つた。これより先梁川城には須田長義と共に本丸を守る者に横田大學といふがあつた。彼れはもとく家康の間諜で、初め家康と他日を約して上杉に仕へたものであるが、ために上杉が兵を擧ぐるや窺かに内應の機を待ち、政宗が福島・梁川を攻めるを聞いて、欺を景綱に送つた。故に政宗は福島攻撃の前後において梁川を攻撃するはずであつたが、間もなく大學の内通が發覺したので、これもそのまゝにな

つた。

政宗が北目に歸るや、その月廿四日家康から書を以て明春上杉を討伐するから、一先づ本城岩手澤に歸れとの命があつた。政宗はそれを見てまたスゴく居城に引揚げた。あくまで野心家の政宗の跋扈を許さぬ家康の態度、以て見るべしである。

一六一 兼續の出羽攻 (一)

米澤から山形に通ずる道路に本道と間道とがある。その本道に當つて上之山城といふがあり、間道の方には長谷堂、畑谷の兩城がある。いづれも最上の領内に在るものであるが、上杉領に接壤してを。直江兼續は九月十二日先づその畑谷に攻め寄せた。

最上義光といふは、至つて陰險な性質の男で、關白秀次が誅せられた時殆く連坐せむとし、辛うじて家康に救出されたやうな仕合に在るものである。そこで日頃家康と親しくしてゐたが、景勝が兵を擧ぐるに及んで、家康からその討伐を命ぜられて國に歸り、その戦備に着手した。そして景勝から義學に賛成を求むるや、表面同意して使を遣へし、それを家康に報告してまずく戦備を整へ、更に景勝から當座の軍資にとて黄金二萬兩の贈り物あるや、それをも忝けないと受領して士卒に分配した、かつ秋田實季・六郷政乗等を山形に會して米澤進撃を凝議した。

上杉の方では義光に懇志を送つておけば味方に引入れることはできないまでも、中立位はさせられ

ることゝ考へてゐたらうが、八月に入つて米澤方面から最上勢が伊達・南部の兩勢と謀つて攻め寄するといふことが傳はつた。そこで兼續は義光奴が攻め寄するなら、この方から先廻りして攻めてくれやうとその準備に取りかゝつた。然るに義光は兼續の準備を聞くや兼續に一書(一)を裁し、急ぎ使を遣はして、決して敵對の心はない、さやうに思はれることは甚だ迷惑の次第である、その證據に悴の義康を人質に出し、なほ足らずば家中の者を二重にも三重にも差出す、また自分も兵一萬を引率してどこまでも用を勤める、と申入れた。こは敵の戦備を緩めむためのウツ八百である。

ウツは政治家の常だと山縣有朋はいつたさうだが、いかに戦時でも少しく國際道徳を思ふ者は、義光の如き白々しいことはいへたものでない。兼續は一代の智者である、義光輩に欺かれるものでない。果してその來書には信を措かなかつた。しかし敵の様子を視るためとあつて陽にそれを容れて、しばし出兵を見合せてゐたが、その間に伏見は陥る、田邊は抜ける、實季等も領地に歸つたといふ、都合のいい報知ばかりがあつたので兼續グツと反身にならざるを得ない。機や到ると雀躍し、義光を攻めて出羽一圓を領略し、以て根本を固むるに如かずと景勝に献言し、景勝の許容を得て水原親憲と共に米澤に歸り、上泉泰綱・本村親盛等も福島方面から來會したので、いよく出羽進撃となつた。畑谷城攻撃はこゝにおいてか開始されたのである。

*

*

*

(一) 今度當地へ御發向可被成與承付而、書狀申上候、從跡々御家中之者同前御馳走仕候事

石田三成を中心に

一先年以御差圖、家康伏見城へ移被申後、御前様若松へ御下向之時、拙者儀者山科大燒原迄罷出、御門送仕、御主同前拜仕候事

一、拙者儀國本へ飛脚差下、嫡子修理大夫、若松へ着、翌日出仕爲仕、御主同前仕申事

一其後家康伏見に而五日致評定候、我等も其列罷成日々罷出申候、直江承引無之上者、御靜謐之外無之相算付而、毎日の評談御留守居千坂對馬守迄爲知申候、會津へ可申入旨、爲御知仕候、定而御覺可有御座候事

一御評定相濟、若松御下向之時分、正宗と拙者儀者隣國付而、早々夜續日罷下、境々の道橋拵白川表へ先手著候者、早々御領分へ出武色候得と被申付而、急度爰許へ罷下候事

一正宗儀者國本へ罷下、則御領分一口にも二口にも打破、慮外申上候得共、無御構被差置、拙者儀者右申上通

是非御脚抱入可申覺悟付而、到今日迄御領分へ足輕一人も出不申候、慮外仕候正宗事者被差置、是非可頼人と存候、拙者へ御手向之儀迷惑存候事

右條々被開召分被下候者、總領修理大夫證人差上、其外家中證人者二重も三重も御差圖次第差上可申候、拙者儀者人數一萬召連、何方迄も御用相立可申候間、可然様被仰上可被下候恐々謹言

八月十八日

最上出羽守義光

直江山城守殿

一六二 兼續の出羽攻 (二)

初め兼續は出羽進撃に際して將士を會し、その向ふ方面を擬議した。親憲は曰つた、

「先づ上之山を攻めてこれを抜き、その勢ひを以て急遽山形の本城を陥るゝに如くはない、最上の

根本が抜けなば、その枝葉は自ら凋落するわけである」

こは道理ある言である、されど兼續は別に思ふところあつたので同意しない。彼れは曰つた。

「山形は勿論、上之山にも十分戦備のあることならむ、備へあるを避けて取り易きを取るは、戦の

常法である。故に間道なる畑谷を先にするに如くはない」

かくて兵を部署したが、第一軍は直江兼續・色部光長・春日元忠・上泉泰綱・水原親憲・溝口左馬之助で

第二軍は本村親盛・松本善右衛門・横田旨俊・篠井春信であつた。九月八日第一軍の元忠・泰綱先發し兼

續は翌日光長・親憲・左馬之助と共に第一軍の兵全部を率ゐて米澤を打ち立つた。この日兼續の扮装は

唐草包の鎧を着て、馬蘭の兜を被り、山鳥の母衣かけ、黒栗毛の逞しき馬に、梨地の鞍置いて打ち乗

つた。その他の將士もみな思ひ思ひに出立つたので、沿道の者これを見むとて群がり來て宛然市の如

くであつた、第一軍全部は斯くして十二日畑谷に迫つたのである。

一方畑谷城では、江口道連といふがかねてより城主としてこゝに在る。彼れは沈毅果敢な將であつ

たので、僅に手兵百餘人で守備してゐるに拘らず、義光が上杉勢攻め寄すると聞いて、

「其方小身なれば、大敵の防ぎ覺束なし、速かに城を捨て、山形に歸來せよ」

と言ひ遣るや慨然として謂つて曰く、

石田三成を中心に

「君の仰せとはいひながら、敵の旗先をも見ずして退くにおいては、日頃の志を失ひ、かつは味方の後れともなり申すべし、所詮こゝで防ぎ戦ひ、敵しがたくば御加勢をも請ふべし。」かくて使を還して子息の小吉、甥の忠作と共に手兵を指麾して谷川の水を城外に引來つて氾濫させ壘や壕をも修築して上杉勢を待ち受けた。

上杉勢城に逼るや、城外に湖水があつたので、光長兵に命じてこれが深淺を試ませたところ、城兵出で來つてこれを妨げ、光長は兵を發してそれと水中に戦はせ、こゝに双方の戦闘は開始されたが、をりから城兵續々出で、戦はむとする氣勢が見えたので兼續は泰綱に命じて一先づ兵を收めさせた。この時上杉勢は城兵の追撃に遭つて脆くも敗北し、負傷三十餘人を出した。

その夜半であつた、親憲士卒を下知して、堰堤を決壊させて、かねて氾濫させてあつた水を悉く引き去らせた。こゝにおいて黎明、光長等呐喊して城に薄つた。城兵はこれを見ても應ずる氣色を見せぬ。上杉勢は圖に乗つて先を争ひ壁を上つた。城兵はその機を待つてゐたものと見え、一齊に射撃しかつ誇り、かつ辱しめむとして城頭高く建てた。上杉勢はそれを見て辱かしめらるゝとは知らず、自軍の先登が建てたものと解し、それ進めよと死傷を踏み踰え、進撃した。城兵はまたそれを見て門を開いて出でて防戦した。この時城主道連も小吉・忠作等と共に城を出で、奮戦激闘大に敵を惱ましたので、上杉勢は楯を棄て、退却するなど餘り結構な體裁ではなかつた。

兼續は最前より戦況いかにと見てあつたが、自軍が退却するに及むで大に腑甲斐なく思ひ、弓鐵砲の者三百を城後の山上に登らせ、そこから城中を瞰射した。これにはさすがの勇敢なる城兵も防ぎかね、傷つけるは仆れ、傷つかざるは扉を越えて城外に脱走した。上杉勢はこれを見て再び盛り返し、雪崩を打つて城中に乗り入つた。道連等こゝに至つて最早奈何ともする能はず、遂に腹を屠つて死し城は二時間の攻撃に由つて全く陥落した。

これより先義光は畑谷に後詰として兵百餘人を矢桐相摸・飯田播摩に附して遣はしたが、矢桐等の到着した時、城は既に落つたので城外に小戦して引揚げた。しかも播摩はそれに討死した。また畑谷の落ちたのを聞いて築澤その他の寨を守れる者はみな遁走した。

一六三 兼續の出羽攻 (三)

兼續は畑谷を光長に守らせ、民家に放火して野陣し、一夜をそこに明かして、人馬を休ませた。その夜泰綱は兼續に曰ふ、

「内府既に西上したれば上方軍必ずこれを邀撃することござらう。關東の軍勢敗北せば最上の如きはみな來降することござる。後日のことを思案せず、區々たる城攻めに心勞するは得策にあらず、幸ひ一城を抜きたること故これにて兵を收めてはいかゞござる」

兼續は反對である。彼れは曰つた、

「たとへ上方の軍、捷利を博するとも、關東の軍はまた大敵である。一時に掃蕩し得べきものではない。この際義光・政宗等を攻め降し、以て他日關東軍を攻むる時の先鋒としたし。且つ敵地に入りながら、僅に一城を抜いて歸つたとあつては後人の笑ひ草である。今は是非とも進撃しなければならぬ」

かくて十四日谷粕に駐屯して山形の進路を遮断し、兵を上之山・長谷堂の二城に遣はし、兩城を一時に攻むることに決した。

上之山は城主を里見越後といふ。當時越後は山形に在り、城には子の民部及び最上からの援兵として草川志摩等が守つてゐた。

上之山に向つた上杉勢は第二軍の方で、凡そ四千餘人であつた。親盛がその第一隊長となり、泰信が第二隊長となり、第三隊長には旨俊がなつた。彼等は先づ旨俊の居城たる中山城に會合し、十七日そこより進發して刈田を焼き拂ひつゝ上之山に逼つた。

これより先、上之山では上杉勢が攻め寄すると聞いて、民部等俄に軍議を開いた、民部は幸ひに地の利を得た城である故、なまなかに出戦せむよりは嬰守する方が上策であると曰つたが、弟の主人がこれに反對で敵は險路を踰えて來たこと故、その疲労知るべきである。これを撃たば必ず捷利を得るであらうと主張するので、それに同意し、志摩に一隊を授けて物見山に登らせ、戦ひ酣なる時、吶喊し、敵が後方の連路を断たるゝを恐れて退却することあらば、その時急に追撃して谷合に追ひ落すやうに命じた。

城兵は上杉勢の逼り来るや夜に乗じて吶喊して出で、敵中に荒れ廻つた。親盛等は疲労の兵を率ゐる來つてこの不意打に遭ひ、驚いて後方の隊に合せむと退却を命じたが、その時は最早城兵に駈け破られて隊伍整はず、一時に崩潰してあはれ敵のをるとは知らず、吾れ先にと物見山に駈け登つた。そこで志摩は大石を轉がせ、巨木を投げ下し、こゝでもまた甚しく敵を惱ました。上杉勢は續ける不意打に散々な目に遭ひ、滅茶滅茶になつて潰走したがこの時親盛は味方の潰滅を見て大に憤り馬を回して敵中に躍入り奮戦敢闘遂に死した。そこで泰信・旨俊の兩人ばかりが辛うじて殘兵を収め中山城まで背進した。是れより先泰綱は味方の敗北と聞き、手兵を提けて來り援うたがこれもまた志摩等の側面射撃に遭ふて大に惱まされ、さうかうする間に正面からも敵の攻め來るあり、惱まされた上にまた惱まされて潰散した、泰綱はこれを見て二十餘人と共に返り戦ひ、これまた一同討死した。けだし泰綱は兼續に諫めの容れられなかつたを憤つてゐたので死處をこゝに選むたのであるともいふ。

一六四 兼續の出羽攻 (四)

長谷堂は城主を志村高治といふ義光の援兵小國大膳等と共に守つてゐたが、義光はなほ兼續が來り攻むると聞いて弟の光直等に兵三千を授けて出援させた。兼續は兵を長谷堂に向はすと同時に己れも十六日菅澤山に來つてそこに陣した。長谷堂に向つた兵は兼續の第一軍で元忠・泰綱が先鋒であつた。

元忠等は先づ菅澤山の麓に陣し、親憲は戸上山の東方に營し、敵の動靜を窺つたが、この時光直等の長谷堂應援隊が來たので親憲はこれを撃退し、首級三百を得た、その激戦であつたことはこの首級に由つて想像ができる。

城中ではまた城主高治、守備を嚴にし濫りに戦はぬ方針であるが、その夜風雨大に至つて四面暗黒となり夜襲にはこの上もない結構な夜であつたので、大風右衛門横尾勘解由に命じ精兵二百を以て山下の敵營を襲はせた。敵中では不意の夜襲に喫驚し、死傷算なく、雪崩を打つて菅澤山に退走した。これに反して城兵は僅に八人の死者を出したのみで大成功を以て引揚げた。

翌日兼續は城に薄まり、元忠の如きは翌日もまた前夜の恥を雪がむと奮進したが、城兵櫓上より射撃するので抜くことは勿論、戦ふこともならず終つた。一方城中では前夜、夜襲に捷ち、かつ上之山では敵兵を撃退して大捷を博したとの吉報を得たので士氣大に昂り、城主に出撃を迫るの有様であつたが、高治はこれを容さなかつた、けだし前日義光から出撃を誠告されたからである。これより先十七日伊達政宗からの援兵伊達政景が砂金に來り、旗を笹谷嶺に樹て、已にして山形に赴いた義光と凝議し、二十四日沼木に進み、酢川の右岸に出で、士卒に川を越えさせ、敵と水田に戦はせた。これに向つた上杉勢は元忠の兵であつたが、戦鬪しばらくにして交綏した。翌日は義光が稻荷塚に來つて長谷堂に應援したので政景はまた川傳へに進出した。

兼續は長谷堂を攻圍すること十餘日に及むだが、容易に抜けさうもないので、城を裸にする外なし

としその附近を焚燒し、稻を刈取つて城の衰滅を計つた。

既にして關ヶ原の敗報晦日に會津より至り、同時に景勝から直に兵を收めて還るを命じたので、兼續は元忠・泰綱を先驅とし、親憲・左馬助を殿後として十月朔日味爽兵を收めて畑谷城に引揚げた。これより先義光もまた關ヶ原の捷報に接して兼續の退却を豫期し、これを追撃すべく待つてゐたので、イザ退却と聞くやこれを追撃して大に激戦し、左馬助は、ために重傷を負ふてその夜死した。兼續の畑谷城入りは右の如くでナカナカ困難であつたが、辛うじて入城し得たので、三日荒砥に退き四日米澤に歸つた。

一六五 酒田の開城

兼續の出羽攻めは畑谷に成功したばかりでその他は失敗であつた。殊に兼續に不似合な失策があつた。それは味方の將士においてけほりを食はして引揚げたことである。即ちさきに兼續が出羽に入るや仙南仙北の將士に山形攻撃を命じ酒田の城主志田義秀・大浦の城主下吉忠の兩人は、命に應じて出動し、先づ共進して谷地城を攻めて守將の齋藤伊豫を追ひ、義秀は更に進むで寒河江と白岩の寨を攻めまたく二寨の守將を追うた。そこで兼續は二寨を義秀に谷地を吉忠に守らせて置いたが、兼續はいよいよ引揚といふ時に至つて告ぐる追のなかつた爲めではあつたらうが、右の兩人等には告げずして引揚げた。義秀はそれを傳聞して急遽酒田へ歸つたけれども、吉忠は自然傳聞の遅かつた事情もあつ

て谷地に孤立無援となつた。

義光は吉忠の谷地に孤立したことを聞いて大に悦び、吉村高治に命ずるに吉忠は隠れなき者であるからこれを誘降して酒田攻撃の先鋒にしたい、汝はよろしくその心して取計らへといふを以てした。高治は早速兵を率ゐて谷地を圍み吉忠と舊誼ある最上の大野田内匠といふ者を城中に遣はして降参を説いた。吉忠は兼續の仕打に恨みはないが上杉には重恩があるから降るよりはむしろ死なむといつて承引しない。手兵もまたそれを聞いて主人獨り殺すに忍びず、みな共に死なむと謂つて挺でも動かぬ決心である。義光はそれを聞いて吉忠を山形に留め手兵はみな庄内に歸せと命じたが、吉忠は遂にそれに同意したけれども兵はみな不同意である、自分達二三十人山形に人質となるから主人を居城に歸して貰ひたいといつた。義光はまたそれを聞いて然らば大浦城代松木信濃の首を斬つて來たらその要求に應じやうといふ。士卒は大浦に歸り、信濃を説き、信濃の聽かざるを見て攻めてこれを殺し、以てその首級を義光に獻じた。陰險な義光もこの主思ひの行動に感じ、前約を履むで吉忠を宥免し、臣屬となして舊領安堵を約した。

かくして翌年四月雪の消ゆるを待つて酒田城攻撃と出かけた。その兵凡そ五千で長満・克直これが將となり、吉忠はその先鋒となつた。

酒田の城主義秀は最上勢の押し寄すると聞いて最上川のこなたに出で、川を隔て、對峙した。最初吉忠の兵が漁船に乗つて渡河せむとするや、義秀はこれを銃撃してその過半を河中に溺らせたが、續いて吉忠の兵の吶喊に遭ひ、長満の兵もまたこれに續いたので、義秀は支へかねて遂に城中に引揚げた。吉忠・長満等はこれを追撃して城に迫り、城下の民家をも焼いた。義秀は力を竭くして拒守したけれども敵勢強大にして對抗しかね、退却また退却、遂に本丸に退いたが、こゝでも、長くは支梧しかねて、遂に會津に退くの條件を以て降を請ふた。長満は鑿殺を主張したが、高治は反對し義光に報告してその裁許を仰いだ。義光は報告に接して義秀の條件を容れ義秀および川村兵藏を會津に放還し城は高治に收めさせた。かうして酒田城は最上の有となり義光は三萬石を與へて高治をこれに入れ、吉忠には一萬二千石を與へて大浦城に置き、また大寶寺城を修理し、鶴ヶ岡と改名しこれを新關因幡に守らせた。顧みれば上杉は僅に畑谷の小城を取つたばかりでしかもそれを數日の後には拋棄し、却つて最上には仙南仙北を奪はれた。直江の智を以てしてこの結果を見るに至れるは千慮の一失といふべき歟。

一六六 越後騒動 (上)

慶長三年四月堀秀治が越前から春日山城に移封されて越後は堀の領地となつた。それはその年の正月に景勝が會津に移封されたからである。しかも越後は上杉に取つては祖宗の國で、その民は上杉を慕ふ者多く、上杉の士にして景勝が移封された後も越後に留まれる者少くはなかつた。中にも謙信以來故あつて浪人して土着してをる者の内、宇佐美勝行・萬貫寺源藏・齋藤利實・柿崎景則・丸田清益・安

田定治・加治資綱・矢尾阪光政・朝日采女・竹俣壹岐・七寸五分監物・長尾景延・庄瀬新藏・神保刑部・遠藤讃岐等は當時名ある者であつたが、石田三成は時局の切迫するや先づ兼續に勸告するに、右等の舊臣を煽動して越後に一揆を起させることを以てした。兼續はさやうなことは心得たもので、かねて早くもその積りで右等の舊臣に音和を續けてゐた、そこで三成の勸告あるや、直に景勝に申告し、景勝は窃に勝行等を會津に招いて説いた。なほ景勝は齋藤三郎左衛門・長尾庄左衛門・多田浦傳藏・朝日藏人等の家臣に越後の浮浪煽動を命じた。齋藤は命を受けて兼續の下に至り同人の指圖をも受けて津川口から越後に入つた。これ七月二十日である。

齋藤等は越後に入るや、各地を煽動して廻り、たちまちにして赤田・下濱・妻有・田川・下倉・新發田・本莊・出雲崎・分陀川・水戸・橋本・椽尾・三條等の浪人・百姓が蜂起した。

越後には當時秀治が春日山城に在る外、三條城には堀直次、坂戸城には同直寄、柏崎城には同直政藏王城には堀親良、本莊城には村上義明、新發田城には溝口宣勝、下倉城には小倉政熙、椽尾城には神子田基昌がゐた。その内義明・宣勝・親良の三人は秀治の組下で他はみな秀治の家臣である。

右の諸城は一揆蜂起と聞いて、それ〴〵防戦準備をしたが、一揆は早くも二千餘人で下倉城を攻撃した。これ八月朔日である。その隊長には上杉の士の松本伊豆といふがゐた。

城主政熙は連山寺の僧徒と共に六百餘人で斬つて出でたが、たちまち撃退されて城内に退いた。これより先坂戸城の直寄は、番兵が下倉方面に火煙颯々と報じたので斥候を放つてこれを確め、兵千八百餘人を率ゐて下倉に赴援した。しかるに政熙は直寄ととき乳臭兒の應援を受けて敵を退けたとあつては一代の恥辱であるとして、直寄の來らざる前に突出して奮戦した。それがために寡兵克く支持する能はず、遂に政熙等みな敵中に戦死し、翌二日の拂曉には城全く陥つた。

一六七 越後騒動 (中)

下倉陥落の報は二日の早天に坂戸へ達した。坂戸では下倉赴援の準備最中であつたが、士卒みなその報を聞いて俄に懼れをなした。家老の輩は諫めていつた。

「下倉の寄手は一揆のこと故、御領内の民も心を通じ、御出馬の後を窺ひ、こゝにも攻め寄するやも知れず、余人に弓鐵砲騎兵を添へて下倉を救はせ、君の御出馬は止めらるべし」

直寄は血氣旺盛な青年でもあり、自信力の強い男でもある。家老の諫めを聞かばこそ、
「近年此處を知行すれども、土民を勞はり、一事も民の煩ひをなしたことはない。されば領内の土民に限り何の恨みあつて一揆に與すべき、もしもこの恩徳を知らぬ奴原あらば直に下倉より馳せ歸つて撫で斬りになし、残りは搦め捕つて磔に懸くべし」

と曰つて發足した。直寄が下倉に着するや、時に松本伊豆は城外の丘下に陣取り、土民は丘上に陣取つてゐた。直寄はこれを望見して、

「伊豆の兵は寡少なれども物慣れたる兵士である。これに反して土民は多けれども烏合の衆である。

先づ伊豆等を撃ち破らば土民は自ら潰ゆるであらう」

といひ、速見織部に命じて伊豆等の陣を攻撃した。伊豆の陣はいはゆる物慣れたるものであるから、頑強に抵抗し、織部の方が反つて苦戦に陥つた、そこを直寄は部下の士卒を下知して突進奮闘、三百餘人を殲した、こゝにおいて伊豆等は敗走し、土民もまた潰走した。

勝ち誇つた直寄は士卒を憩はすため、下倉城に入らむとしにが、敗走したる伊豆等は田川・妻有・小千谷において敗兵を收拾しつゝあると聞き、敵の準備のできぬ間にとて急馳して森林に屯し、織部の一隊に殊更馬標を授けて堂々進ませた。伊豆等馬標を見て直寄來ると逆撃したが、戦鬪酣なる時、直寄林中より不意に出で、奇正の術を以てたちまち撃破して了つた。伊豆等またく敗れて走り、直寄は追撃里餘の後、兵を收めて翌朝坂戸に歸つた。直寄の戦ひ振に辟易してか、その後土寇は遂に坂戸へは來なかつた。

この直寄といふは堀監物の悴で當時僅に二十四で、政熙から乳臭兒と嘲られたほどの青年であつたが、太閤の命で坂戸の城主となつたものである、一たびこの戦ひあつて、比類なき功を立つるや、人みな太閤の御眼力の程畏れ入つたと太閤にまで頌辭を奉つた。けだし彼れは確に常人と違つてゐたところがあつた、一日小姓某勤番に倦むで小蝶を追ひ廻してゐたが、その言草に「丹後守が者、などかその方を遁して濟むべき」と繰返してゐた。直寄はそれを聞いて小姓を召し寄せ、

「戲言なれども、思ふより出づるといふことあれば、我等を常に頼母しく思ひ、武勇を勵む心なく

では、いかで假りにもこの戲言の言はるべき、こゝは確に賞すべきところである。かねての願ひ通り元服させ、少知なれども二百石を得さする」

といつた。かやうな青年なればこの大亂にも、最初は極力、義舉に與すべきを主張して止まなかつたといふことである。

一六八 越後騒動 (下)

藏王城を距る二里半ばかりのところに、加津保澤といふ村落がある。一揆はこゝにも蜂起して沼澤に據つて屯した。藏王城主親良これを見て兵を遣はして撃破し、捕虜十餘人を磔にした。それと前後して椽尾の一揆は城主基昌を攻圍した。親良はまた兵を派して基昌を援ひ、たちまち撃退した。

加津保澤や、椽尾の一揆は苦もなく撃退し得たが、三條城の一揆はいさゝか難物であつた。當時三條の城主直次は春日山に往いて不在であつたが、その不在に乗じて一揆は城を包圍したのである。家老の小川半右衛門は使を本莊・新發田に馳せて來援を請うたが、一揆は道にその使を捕へて殺した。半右衛門は使者の殺されたのを聞いて更に山中兵右衛門といふを遣はした。一揆はこれをも捕へむとしたが、兵右衛門は豪の者で、却つてアベコベに敵手を殺してその場を切り抜け新發田にと馳せつた。

新發田の城主宣勝は使者の口上を聞いて取り敢へず使者三人を三條に遣はし、承諾の旨を述べさせた

が、三人中の一人は途中渡河に際して一揆に與せる船子に殺さるゝといふ騒ぎ、そこで宣勝は管内の士民の妻子を質に取つて一揆に與するを防ぎ、かくして兵七百を率ゐて出援し、途から本莊城の義明にも赴援を促したが、義明は既に兵一千餘を率ゐて安田町まで來てゐたので、直に行進して宣勝の兵と合し、共に三條を指した。

一揆中八千餘の勢で五泉に屯してゐたのがあつたが、この勢は宣勝等の兵を見てこれを邀撃し、利あらずして退いて橋本の古城に據つたが、こゝでも勝利の見込なく、終に法華山に駆け登つた。

宣勝等は一揆が橋本の古城を退くや直に兵をそれに登らせ、狼煙を擧げて三條城に來援を報じた。城兵はこれを見て大に元氣づき、城を出で、一揆と戦ひ、たちまちにして撃退した。これ八月八日の拂曉である。これより先城主直次は居城の急を聞いて春日山から馳せ歸つたが一揆に阻止されて入城することできず、手を空しうして城邊を望見してをり、城兵の突如一揆を撃退するに及んで入城するを得た。をりから、基昌も兵三百を率ゐて入城する、宣勝・義明の兵も續々至る、直次の父直政も急を聞いて兵三千を率ゐて松崎まで來たので、一揆は更に城を圍むだけども到底抜くべからずと見て取り遂に津川に退いた。そこで援兵はみな即日居城に引揚げた。

この時に當り、景勝、兵三萬を率ゐて越後に攻め入らむとするとの流言あり、諸城主はみな對抗準備をした。景勝の來襲は眞に流言に過ぎず、但だ越後口の援助として上杉の士奈良澤主殿、上倉庄兵衛等が津川城に出張したので、これに氣を得て清益・利實・景則等は藏王城を攻めむとした。そこで城

主親良は逆襲し、直次・直寄・基昌等も來つて親良を援けたので、利實等は奮闘の効もなく、撃破され津川を指して敗走し、利實・景則等は追撃に遭つて殺されてしまつた。その後清益等は二千餘人を催して新發田を攻めたが利あらず、また壹岐等も二千餘人を以て本莊を攻めたけれども失敗に終り、壹岐はそこで殺された。かくする間に關ヶ原の本戦が義軍の大敗に終り、それが越後に聞えたので、上杉の士は引揚げ、土寇は、全く終息した。

一六九 北陸方面 (一)

前田利長は去年の秋家康と和して老母を江戸に送つてから全然家康方となつてしまつた。家康が會津攻伐の爲め東下した時、利長は家康の命に聽いて北陸の諸將を統督して東下することゝなつた、それ故使を丹羽長重に遣はして共に出兵すべしと催促した。

しかるに長重の方では當時はまだ家康から何とも命令に接してをらぬので、利長の催促に疑ひを起し、病氣と稱して成るべく出發を延引するやう工夫して使を歸らせた。利長は出發を急いでをる。再び使を遣はして、

「貴殿病氣とあらば將士を出發せしめられよ」

といつた。長重は依然曖昧な返答して使を還へした。利長は更に病を力めて出軍せよと督促した。しかもこの督促は數回に及むだ。長重は督促されて好い心地をせぬ。その内に家康から北陸の事は宜し

くたのむとの書状があつたのでいよく利長と共に東下することを欲しなくなつた。そこでいさゝか難題を附した答言を與へていつた。

「某、太閤に越前の舊封を禱はれ、こゝに新封を受けてより僅に三年に過ぎず、されば豊家の高恩を蒙れりといふわけではなく、また内府には別懇もなければ、疎意もあらず、貴殿の周旋に由つて舊封を恢復することを得るならば、内府の爲に盡力いたすも苦しからず」

こは利長としては引受ける筋合のものでない。彼れは巧妙なる辭令を以ていつた。

「舊封恢復のことは内府の了簡に存することで、拙者のかれこれいふべきことではない。しかし貴殿にして天晴戦功を立てられむか、希望を遂ぐることに決して至難のことにあらず、拙者もまた及ばずながら微力をいたして貴殿の希望に副ひ申さむ」

この巧妙なる辭令には、長重もいさゝか閉口の體であつたと見え、終にそれでは双方より家臣を出して凝議させてはいかにと申込み、長重からは江口正吉・坂井直勝を利長は篠原一孝・岡島一吉を出し四人を田中村に會合させた。四人は種々協議したが、質を出せ、出さぬといふ一點に至つて談判は破裂した。それは前田側で長重の弟の長次といふを質に出して證とせよと主張したるに對し、丹羽側でこれを拒絶したからである。双方の言分果していかにといふに、織田氏以來前田と丹羽とは兄弟の國ではないか、兄弟の間柄である以上、何も他人らしく質を交換するにも及ばぬではないか、といふが丹羽側での言分でこれを駁した前田側のは、去年利長に謀叛の風説を立てられた時長重は、これを見て雪

冤の勞を執るところか却つて敵對の急先鋒を請はれたではないか、これでも兄弟の國といはるゝや、今日質を受けずして共同、事に當らば中途にして戈を逆にされるも知れないといふに在つた。けれど丹羽氏は、どこまでも前田と共にするを好まず、だゞを捏てるたのであつた。

一七〇 北陸方面 (二)

利長が長重と交渉中のことであつた、大阪より討徳の檄が金澤に至つた。利長は弟の利政を七尾から招致してその去就について意見を聞いた。利長は先づ問ふた。

「去年、内府と我等、既に矛盾に及ばむとした時、當家の方人すべき老中、奉行等身構して、此方兄弟を餌に飼ひたる恨あるに、今度もまた大事を企てながら一應の内談もなし、この上は一向に内府の味方となつて、是非の勝負を決すべし、其方の意はいかに」

利政は條理を重んずる男である、不條理なる兄の意見には賛成し難い。言下に答へていつた、

「もし御幼君の御爲を計つてこの事を起すとあつては、内府に隨ふはいかゞなものであらう。先づ大阪へ使を上げ、老中・奉行の料簡を聞き、その上にて去就を決すべし」

利長は初めより徳川方と決意してをるのである。利政に諮るは諮る爲に諮るのではなく、むしろ説伏するにあつたのである。利長は自説を固持して曰つた。

「近年、大阪・伏見に在つて人々の心を察するに、秀頼公の御爲を思ふ者一人もなし、たとひ天下の

御爲にこの企てをなすと觸るゝとも必定私の謀である。故に長重を首め、近國の諸將一旦は敵に與するとも、やがては内府に歸屬するであらう。所詮このたびの事は我等に任すべし」

利政は心には服し難かつたが、強いても反對しかねたと見えて、兄の意見に従ひ、一先づ七尾に歸城した。

既にして利長と長重とは交渉不調に終つて、斷交の姿となつた。利長は家康の命があるから直ぐにも兵を出して東下したい。しかも長重が後を窺ふの恐れがある。かつ大阪で事を起した以上長重は自然これに與するであらう。それこれを思ふと容易に東下はなり難い。こゝにおいて利長は先づ小松を攻めて後顧の憂ひを絶つに如かずとて、小松攻撃を決意し、利政に旨を言ひ遣り、兵を率ゐて金澤に來り會するやう命じた。

利政は直に來會した。利長は居城の金澤及び富山・松尾にそれ〴〵留守の將士を置き利政の兵と共に合せて三萬五千を帥ゐる、七月廿六日松任に至りそこより更に小松に使ひを遣はして長重を威嚇的に家康に屬せやうと謀つた。

しかも長重は應じなかつた。彼れはこの時大阪よりの檣に接し、右せむか左せむかと大に躊躇してゐたのであつたが、利長とは既に斷交してをるのに、さらでも兵を率ゐて來り嚇されたので、俄に固くなつてしまひ、斷乎として大阪に應じ、利長の使ひを卻けて籠城することゝなつたのである。

一七一 北陸方面 (三)

利長は松任に駐留すること二日に及むだが、その間に小松に遣はした使は卻けられて歸る、老臣の面々はまた小松の攻め難きを説いてむしろ大聖寺を抜き、由つて以て小松をして自然に降らしめるの策を採るに如かずと主張するのでそれに従つて大聖寺に向ふことにした。

利長は先づ寺井村の三道山と千代とに寨を設け、また木場湯附近に兵を置いて小松に備へ、そして湯之山越に大聖寺に向ひ、松山の古城址に至つてこれに據り、使を大聖寺に遣はして速かに來つて我が先鋒となれ、然らざれば攻撃すべしと諭させた、これ八月二日のことである。

大聖寺の城主は山口宗永といふ。これより先宗永は丸岡の城主青山宗勝と共に小松に至つて長重に請ふにその小松に入つて共に守らむ事を以てし、長重より入城のことは拒絶されたれども一旦の急には必ず小松より兵を出して赴援するとの約を得て歸城した。利長の使の來つた時宗永は心にこれに従ふの意はない。さりながら、しばしその攻撃を避け、吉繼・長重等と謀つて海路より金澤を襲はんと企らみ、いさゝか曖昧なる返答をして曰ふ。奉行等に與みするは本意ではないが、一子右京が若氣の至りに一戦もせずして降るは武門の恥辱であるといつて肯かぬから、今一度説諭し、父子共に參候して謝することにした、と。

利長は宗永の返詞を聞いて將士に諮つたが、將士は何だかその言曖昧であるとして疑ひ、むしろ速に

攻撃すべしと勸進した。利長も諮問する位であるから多少は疑つてゐたと見え、さらば攻撃すべしとて鯉橋口・福田口・荻生口及鐘ヶ丸の四方より攻寄せた。

大聖寺城は頗る要害の好き城で難攻の稱あるものであつたが、いかに難攻でも地の利は人の和に如かず、しかるに宗永は平生吝嗇で士を愛せず、それ位だから、征税は厳しく民を撫せず、ために肝腎の和が缺けてゐたので、一朝敵の襲來あるや、案外脆く落城した。即ち二日の午後に攻寄せられて三日の午後には陥落したのである。それでも宗永は前後七回の突撃をなし、子の右京と共に大に奮闘した。但し宗永は突撃効なく城に退くや、兵士の内には主人を嘲り、金銀を引き出してそれに敵を防がせては如何に、などいふものもあつた。以て宗永に對する城兵の心が推せらるゝ。本丸に退いて防戦四時間にして山崎長徳の兵が本丸に押し入るや、右京先づこれに首を授け、宗永も次いで館に入つて切腹した。この時宗永の家臣の死する者五百人あつた。吝嗇の大將に殉じた者としては、意外に多数なりとの感なきを得ない。

これより先、越前北莊なる青木一矩は宗永より急を告げられ、自身はあいにく病むでをるので行くことできないが、せめては將士を遣はして前田の陣營を襲はせやうと計畫したけれども、間もなく落城と聞いて見合せた。また長重は前約を履むで兵二千を率ゐて出張したが、大聖寺の附近に行つた時城は最早落城に間がないと聞いたので、動橋に至つて旌旗を樹て單だ來援したことだけを示して引揚けた。

一七二 北陸方面 (四)

利長は大聖寺城を抜いて、將士をこれに置き、進むで北莊を攻むべく細呂木に至り、更に金津に進むで、そこより使を北莊に遣はし、一矩に家康に屬するやう諭した。これより先一矩は大阪に與みしたため大阪よりは奉行等は利長が小松攻撃に向つたと聞かや、自然越前にも攻め入るであらうと慮り、若狭高濱の城主木下利房及その兄木下勝俊に命するに北莊赴援のことを以てした。しかして高濱の兵のいまだ至らざるに當つて大聖寺の急を聞いた一矩は、俄に將士を集めて敦賀より援兵を請ふの可否を問ふた。將士はみなこれに同意した。そこで使を敦賀に馳せた。敦賀の城主は大谷吉繼であるが、彼れは當時早くも脇坂父子、朽木元綱・赤座直保・平塚爲廣・戸田重政等を會し、兵二萬を擁してゐた。吉繼は一矩の使に接して、敦賀を發し途中にして直保・爲廣が府中攻め抜き主張のあつたを、兵は神速を貴ぶとてそれをも排けて、北莊に馳せた。かくて八月四日の午前二時北莊に到着して一矩の歓迎を受けて入城し、一矩が防戦の策を問ふや答へて曰つた。

「利長攻め來るとも、戦はずして時を移し、若狭の援兵の來着を待つて、これと内外相應じ、一舉にして利長を攻め滅ぼすべし。若しもその前に攻めかゝらば、機に乗じて撃ち破らむ、萬事は我等に任せよ」

利長の使が金津から來たのはこの翌五日のことである。かゝれば一矩は陽に利長の來諭に同意を表し

て使を還へした。既にしてたちまち起つたは奉行等大軍を發して海路より金澤を攻めむとすとの流言である。こは吉繼が計畫である、戸田重政もまた書を以て、伏見城の陥落したこと、利長獨り西上するも何等功をなすなきことなどを利長に言ひ遣つた。利長は計らるゝとは和らず流言に驚いて將士を會し、

「金澤には留守せる兵多からず、敵もし海路より來らば防ぎ戦ひ難し、一先づ金澤に歸り、またの日を期すること、すべし」

といひ、六日俄に大聖寺まで引揚げた。或はいふ、この流言は吉繼が計らひではあるが、これを以て利長を動かすには、吉繼は別に利家の婿中川宗伴といふ者を以てしたと、即ち宗伴が金澤の安否を憂ひて上方より金澤に行ける途中、越前今庄で吉繼に押へられ、さてこそ吉繼に大兵海路より金澤に押し寄せむとすと書して利長に遣るべく命ぜられた、已むなく右の趣意を一書に認めて利長に遣つたといふことである。重政の一書が利長の下に至れることは確かなやうである。或は宗伴の書なるものは重政の書の訛傳ではなからう歟。いづれにしても吉繼が右の流言を布かせたことは疑ふべくもない、僅に流言を以て大敵を走らすは、孔明のいはゆる心を以て戦ふといふものである。吉繼、智なりといふべし。

○一七三 北陸方面 (五)

大聖寺まで引揚げた利長はその夜、山崎長徳・高山南坊等に令するに、明日本道を経て御幸塚に至り自分と利政とが三道山に着する頃を見計らひ、兵を動橋に回して、間道より來會せよ、といふを以てした。こは長重が退路を要するを慮りて御幸塚に長重の兵に備ふるためであつた。

翌朝長徳等前夜の命令に従つて兵五百を率ゐて大聖寺を發し御幸塚に至つた。利長も後より豫定の行路を取つて三道山に着した。しかも長徳は御幸塚において小松を避けて退くは小敵を懼るゝやうである。直に大領の一ツ屋を過ぎ浅井に向つて退かうと主張し、松平康定が浅井は捷路ではあるが地理に暗いから、もしこの路を取つて敵に要せられては勝利のほど覺束ない。それよりは君公の命令通り間道より退くに如くはないと反對するや小敵何ぞ畏るゝに足らむとばかり、康定の言を嘲笑して強めて間道より退かずして浅井に向つて退いた爲め、長徳等は無事に退くを得たけれども後衛はこれがため非常な苦戦を見るに至つた。

初め長重は利長が大聖寺に向ふと聞き、兵を御幸塚に出し、木場湯附近においてその輜重隊を銃撃し、大にこれを悩ましたけれども格別の捷利はなく兵を收めたが、今度こそはと利長が越前より退却すると聞いて、これを要撃せむと身構へ、一隊が浅井を經て退かうとするを幸ひ、老臣江口正吉に兵七百を授けて、大領方面に出し、續いて古田五郎兵衛、佐々木太右衛門等を龍ヶ馬場に出し敵の後衛を銃撃した。この後衛は長連韻父子であつたが、不意に討たれて隊伍亂れ、すこぶる多數の死傷を出し、果ては連龍父子僅に二十人の殘兵を提げて苦闘すること三回にして退いた。長重は戦ひ如何

にと先刻より高處に在つて望見してゐるが、自軍の捷利に氣を勇まし、この機に乗じて隊長を斬るべしとて阪井直政・大谷元勝を加勢に出した。敵の方でも太田但馬は連龍の敗を聞いて淺井に引返した。こゝにおいて直政は進む。但馬の土も挑む。遂に山代橋際において兩軍の奮戦を見るに至つたが、勝敗決せざる間に双方共に疲労し、自ら交綏した。

利長は三道山に在つて淺井賤の戦ひを聞き、馬を本江に馳せ、利政と長徳・南坊もまた鎌谷まで兵を返へしたが、この時長重の兵は既に小松に引揚げた後であつたそこで利長もまた兵を引いて三道山に歸り、それより利長は兵を三道山において金澤に、利政は七尾に何れも歸還した。これ八月十日である。この日利長は使を家康に發して戦捷と歸城とを報告した。

一七四 北陸方面 (六)

利長が金澤に歸つてからであつた。家康が特使として小山から派遣した土方雄久が金澤に來着した。用件は家康が近く西上するから利長は東下を見合せ、越前における義軍に與する者を攻めて美濃に來會せよといふにあつた。利長は家康の訓諭に聽いて再び越前に向はむとて弟の利政に會津に來會を命じた。利政は最初より兄の態度に賛成しない。さきには共に出陣したけれども、それは已むを得ずしたことで、心からしたものではなかつた。そこで今度の重ねての命令には應じなかつた。彼れはいつた。

「先日は一旦、仰せに従つたけれども、利家・輝元の書を見るに、正しく天下の御爲とある故、この上は幾度仰せ聞かるゝとも御下知には従ひ難し、故太閤薨去したまふ時、亡父を御座所に召し、天下の事を計り置かれ、この旨肥前・孫四郎にも聞かせよと宣はれ、それをば亡父は我等兄弟に物語り、亡父が今はの際に遺志を繼いで御幼君に奉公せよと仰せられたことその聲今なほ我等の耳に在り、何とて幼君に背かるべきや」

利政は正直一圖の男であつた。この態度は前田家に一人の義を唱ふる者なしとの後世の嘲を防ぐに足るものである。但し利長はこれには弱つた。何とかしてその意を翻へさせようと雄久に頼むで、諭して貰つた。けれども利政は斷乎として雄久の言に耳を假さない。

「若しも貴殿、内府の下知として軍勢を催促せらるゝにおいては、愛宕、金山も照覽あれ、鎧を肩にかけまじ」

と聲あらゝけて雄久を追返した。

この時に當つて一方長重は使ひを江戸に遣はし、家康に敵對の意は毫もない。利長と講和をしたいと思つてをると本多正信・西尾吉次等まで分疏した。けだしこれより先雄久は長重に利長との講和を勧めた。今江戸にその意を告ぐるは雄久が勧誘の結果である。右につき利長は長重と講和することとなり、質を交換し、以て九月十三日小松の掛橋で長重と會見した。

かくて利長は長重とは講和したが越前入りはこれからの事業として残つてゐる。彼れは利政がきか

ないので、自軍のみ率ゐて大聖寺に至り、使を北莊に遣はして一矩の違約を責めた。これより先、吉繼は府中の堀尾吉晴の留守が降を請うたのでこれを一矩に告げ、かつ利長が金澤に引揚けると聞いて馳せて鑿殺せむと欲すれども、遠路如何ともすべからず、と歎じ、その間に若狭の兵の來り集まるを見て一矩と謀り、大聖寺を修理してこれに木下利房及蜂須賀の家來高木法齋といふを入れ、寺西信乘・奥山正之・上田重安を小松に遣はして長重に應援させた。(吉繼の美濃に出たのはこの後である) 利長が再度使を遣はして一矩を責めた時は右の形勢であつたので一矩はこれに返答して、敢て約を違へたわけではない、君が兵を進めるならば先鋒とならうと思ひ、その旨を家康にも言ひ遣つた。しかるに不幸病に罹つて意の如くなりかねた。二心なきを證するため質を致さうといつた。利長はそれを聞いて信を措き難しとなし、兵を進めて北莊に向つたが時しも關ヶ原における義軍の敗報は北莊に聞えたので、一矩は大に驚いた。急遽一子を利長に送致して、この子を質として内府に致したし、切に貴殿の周旋を煩はす、と哀願した。こゝにおいて利長はその子を携へて近江に出た。北陸方面のことはザツト叙上の通りである。

一七五 田邊開城

細川忠興と三成とは寇讎の如き間柄であつたから、三成は一たび事を起すや、大阪における諸將の妻子を城中に收むるに當つて、先づ忠興の妻より始め、兵を派して攻むることもまた忠興の父の幽齋

より始めた。即ち七月十八日早くも小野木公・谷衛友・川勝秀氏・藤掛永勝・生駒正俊・前田茂勝・齋村廣道・小出吉政・山崎家盛・杉原長房・別所吉治・毛利高政・高治忠その他石川貞清の兵士及び大阪の使番等を幽齋の居城たる田邊(舞鶴)に遣はしてこれを攻させた。その兵は實に一萬五千であつた。

幽齋は大阪における忠興の妻の變を知り、續いて小野木等諸將が攻寄するとの報に接して大に驚き、急使を宮津・峰山・久美等に遣はしてその地の兵士を田邊に召集し、京都吉田山に隱棲せる三刀谷孝和の來援を得て専ら之と議して防禦の方略を定めた。この時細川では、兵士は忠興が大概引率して東下し、老臣松井康之等數百人も豊後杵築に至りるといふ次第で幽齋が遽かに各地より召集した兵士雜卒を合して五百餘人に過ぎなかつた。五百を以て一萬五千の敵を防がむとするは隨分大膽な所業と謂はざるを得ない。しかし、そこには底があつた。敵の數は一萬五千でも、本氣で攻めむとしたものは、小野木の外にはなかつたのである。茂勝・衛友・永勝・秀氏の如きは幽齋より歌學を授かつた關係もあつて、窃に幽齋に歎を通じた。吉政・家盛の如きもまた疾くの昔に家康に通信してをると云つたわけである。故に數は一萬五千でも力は小野木一人に過ぎない。小野木は眞面目に攻圍軍の總大將となり、挂林寺に本營を置いて、城の附近に戦ひ、終には數回城に迫つたが、餘の者が眞面目に戦はないので、抄々しき進展を見ず、攻圍徒らに四十餘日を費した。

時に權大納言烏丸光宣が、中院前權大納言富小路左衛門佐を従へて田邊に來り、勅旨を義軍に下した。幽齋は古今集の蘊奥を極め、帝王の師範であり、また歌道の國師である。斯人もし死せば世にそ

の傳を失ふ、誠に國家の損失であるから、速かに圍みを解くべしといふが勅旨の大要である。勅旨と聞くとこれを奉ずるが古來日本國民の美點である。小野木も即ちこれには否みかね、直に命を奉じて圍みを解いた。勅旨は茂勝を先に立て、城中に入り、幽齋にもまた勅命を傳へた。それは城を開けて義軍に致せといふのであつた。これより先、八條知仁親王は幽齋に歌學を受けたる關係上、その攻圍されたのを憐れみ、前田玄以に幽齋との講和を諭し、双方の間に使を立て、斡旋されたが、幽齋が頑張つたので事成らず、親王は終にこれを奏請した。これこの勅使ある所以であつた。幽齋も勅命には背きかね、城を茂勝に致して京師に上つた。これ九月十三日である。茂勝は城を受くるや、兵を置いてこれを守つた。

一七六 九鬼嘉隆

九鬼嘉隆は永祿以來居城を鳥羽に有つてゐたが二三年前隱居してそれを嫡子の守隆に譲つてゐた。守隆は家康が會津に下向したのでこれに従ふこととなり、家老の越賀隼太等を率ゐて東下し、その留守を父嘉隆に依頼した。嘉隆は鳥羽に入城したが、間もなく三成から誘はれた。これより先嘉隆は漕税のことで伊勢の岩出の城主稻葉道通と争ひ、それを家康に訴へたが、家康は稻葉に有利の判決を下して嘉隆を屈伏させたので、嘉隆はこれを含むでゐた。三成はそれを知つてゐるので、誘ふたのであつた。嘉隆は家康を怨むではゐるものゝ嫡子が既に東下してゐるので、三成の誘引に對しては、いささか躊躇の體であつた。だが稻葉惡しの憤りはまた格別であつたので終に意を決して義軍に應じた。彼れは一たび決意するや、紀伊の熊野新宮の城主堀田氏善を招き、淡路の岩屋の城主菅平左衛門も兵船を率ゐて來援したので、七月廿一日、嘉隆自ら兵を率ゐて岩出を攻めた。

岩出城では道通・嘉隆が來り攻むると聞いて、兵を率ゐて迎撃した、其勢がまた意外に猛烈なので、嘉隆は之れを攻落することできずして退却し、岩出城に對して砦を築き、これを姪夫の堤庄藏といふに守らせた。しかるに道通は今一色の九鬼の米倉を焼かむとて兵を出したので、こゝに庄藏と衝突した。嘉隆はその報を聞いて鳥羽を出で、また松阪の城主古田重勝は稻葉を援はむとて齋宮まで行つたが、その時はもう兩兵交綏してゐたので、双方とも空しく引揚けた。

その後嘉隆は平左衛門と共に兵船を率ゐて尾張・三河の海岸を放火掠奪し、兵糧を大垣に輸送して義軍を援けたが、松平家信・小笠原康勝等の至るに及むで撃退され、鳥羽に引揚けた。

一方守隆は家康から領邑守備の命を受け、兄圖書を質として上つたが、岡崎まで來て、父が義軍に應じてゐると聞き、大に驚いてそれを家康に報告した。家康は報に接して、南伊勢五郡を遣はすから手段を講じて伊勢志摩を取れとの命を下した。守隆は命をきいて直に志摩に歸り、使を嘉隆に遣はして曰つた。

「某、先日關東へ下り、諸將と共に誓紙を捧けて上方退治として馳せ上りたり、この表へ直ぐに馳せ向ふたは、更に父上を討奉る覺悟にはあらず、返すべく先非を改めて、關東へ御歸服ある様勧め

申さむと存じてござる、御同心あるにおいては悦び限りなし」
嘉隆はこれを聞いて曰つた。

「其方既に誓約したる以上は、兎角の理非をいふべき様なし、されど秀頼公に對して弓を引く上は正しく敵なり、私の愛にひかれて戦ひの時節を失ふべからず、其方もし城に向はゞ我は房州(氏善)と共に撃退すべし」後日の恩賞を貪り、危難に陥らむよりは、暫くその表へ陣をかけて時節を待て」

守隆は如何に力むでも敵手は父である。これに對して弓を引くはナカナカにでき難い、かつその父の言ふところには感謝すべき訓戒も含まれてるので、詮方なく畔名の古城を修理し、砦を國府村に築いて、船舶の往來を検し、以て日を消した。けれども家康西上の報に接するや、守隆は、その嫌疑を受くるを恐れ、兵を率ゐて鳥羽に向つた。しかも氏善克く戦ひ、守隆は爲めに撃退された。これ九月十二日である。嘉隆もまた兵を率ゐて舟津に出で、守隆と戦ひ、終にこれを撃破した。

既にして三日の後には關ヶ原の大敗が嘉隆の耳に入つた。こゝにおいて嘉隆は氏善その他をそれづゝの居城に還へし、自身は豊田五郎右衛門を召具して鳥羽を落ち伊勢の登志島に籠居した。守隆は父の行末を哀しみ、家康にその宥免を請うた。家康は初めはこれを聽かなかつたが、守隆が再三、請うに由つてこれを許した。然るに嘉隆はこれより先登志島に入るや、豊田より死を勧められて遂に自害した。守隆はこれを知らなかつたので、家康の許を得るや、使を登志島に馳せたが、最早及ばなかつた。それ故守隆は豊田の不忠を怒り、亡父の墓前で、彼れを斬殺したといふ。

一七七 上田城 (上)

さきに幸村を携へて居城上田に歸つた眞田昌幸は、歸來中山道より西上する敵を扼するため、それぞれ兵を配して待ち構へた。

中山道を迂廻して西上することゝなつた徳川秀忠は八月廿四日、榊原康政を先鋒とし、大久保忠隣その子忠常・本田正信・本多忠政・酒井忠重・酒井家次・奥平家昌・菅沼忠政・牧野康成その子忠成・戸田一西・眞田信幸・森忠政・小笠原忠政・仙石秀久・石川康長・日根野吉明・諏訪頼水等凡そ三萬八千人を率ゐて信濃に向つた。

秀忠は九月二日小諸に着し、秀久の居城に入つて、對上田の軍議を凝らし、先づ使を上田に遣はして、昌幸を諭すことゝなつた。使は上田に行つて曰つた。

「この度、石田邪謀を廻らし諸將を語ひ入るといへども、内府に屬する大身・小身、みな志しを堅うして、既に石田が頼みきつた岐阜城を攻め破つた注進あり、殘黨大垣の城を守れる故悉く退治の爲め、内府は東海道を進發せられ、我等もこの口より進軍中なり、衆を下知して寡弱の敵を虜にすることは時日に移すべきにあれざれども、時勢を計つて内府に歸服せむことこそ望まし」
昌幸は寸時の躊躇もなく返答して曰く、

「今度大老・奉行より秀頼公の御身を守せよと申聞けらるゝに由り、その下知に従つた以上はたとへ味方の危きを聞くと今更驚くことではない、所詮一城に楯籠り時節を待つべき所存故仰には従ひ難し、もしも御憤りあるにおいては路次のお序に人数を向けられ、手始めに某父子を誅伐せらるべし」

秀忠はこの思ひ切つた返答に接して更に信幸をして諭させた。信幸は秀忠の命を畏まつて直に人を派し。

「父上、關東に着かれなば、戦後増封の恩賞あるべし、返す返す御思案ありたし」

と曰せた。昌幸はたび／＼の使者なれば、むしろ之を利用すべしとて、今度はいづれ諸將士と協議の上何分の返答をなすべしと曰つて信幸の使を追ひ返し、そして荏苒日を延てその間に城砦などの修理を急いだ。秀忠はこれを見て斷然攻め落すべしと主張したが、例の用心家の正信は、マアマアとばかりで昌幸の返答を待たせた。秀忠は正信の言に聞いて更に二日滞在したけれども、昌幸の返答がないので、またもや使者を遣はして、

「御邊は太閤の時、させる御恩を蒙つた人でもなければ、たとへ大事を企つる輩が、真心より出でたる謀たりとも、恨みなき内府を敵にして、彼等に與せらるべき道理はない。強くて籠城せらるゝにおいては、嫡子伊豆守に腹切らせ、その後、諸軍を差し向けて一時に城を攻め落すべし、返す返す無益の義理立は斟酌あれよ」

といはせた。昌幸はこれに對して如何なる返答をしたかといふに今度はまた打つてかはり、斷乎として曰つた。

「太閤の御一族を始め御恩を受けたる諸大名が、内府に心を寄するは人心の氣象變れる故である。

伊豆守に腹切らすとも、そは御勝手なり、兎も角も御心に任せらるべし」

かくて城外の人家を焼いて、秀忠の攻め來るを待ち、且つ幸村及び根津幸直・池田市左衛門を派して伊勢守・砥石冠者嶺の諸砦を守らせた。

一七八 上出城 (下)

秀忠は昌幸の傲岸なる返答に接して、五日小諸を發し染屋の高地に本營を据へ、信幸に火を放つて伊勢崎に向はせ、忠政に砥石の砦を攻めさせた。

幸村は兄の旗旗を見て伊勢崎の砦を棄て、上田に引揚げ、幸直も戦はずして砥石の砦より去つた。

秀忠はこれを見て伊勢崎に至り忠房に命じて丸子寨を壓し、また康長に冠者嶺の砦を攻めさせたが、冠者嶺の砦の守將池田市左衛門は善戰、康長を撃破し、康長は爲に敗退した。

秀忠は上田の本城を攻むるため先づ十八人の刈田奉行を設け、これに諸卒を督させ、城外の稻を刈らせた。この時昌幸及び幸村は従士を率ゐて、外廓を巡見してゐたが、十八人の奉行等昌幸父子を見て、それ逃がすなとばかり、急に攻め寄せた。昌幸父子は直に城に入り、銃砲を發つて防戦した。奉

行等は勢ひに乗じて城門に肉薄したが、康成これを見て馳せて奉行を援け、本多忠政も駆け來つて共に城に入らむとし、家昌はまた管沼忠政と共に搦手に向ひ、其處で小廓を奪取した。しかるにこの事本營の知るところとなるや、正信・忠隣は命を待たずして戦つたとて大に怒り、急ぎ攻撃を中止して引揚げさせた。秀忠は兵を上田・伊勢崎より小諸に回へしたが、こゝにおいて正信に請ひ、康成に命じて奉行の命を待たずして戦ふなど軍法を犯せる者を處刑しやうとした。さア大變一同は骨折り損のくたぶれ儲けどころの話ではない。大に驚いて如何に成行かと蒼くなつた。康成は奉行を庇護し、

「實は奉行の致せしことではなし、みな某が命ぜしところでござる。某一人その罪に服したく存する」

と曰つて奉行を殺さなかつた。それを聞いた奉行の一人杉浦久勝といふは感激の餘り自害した。かういふ騒ぎが持ち上つたので、秀忠は大に面喰らつたが、兎も角康成父子及び奉行中の八人を處罰してこれを上野吾妻に禁錮した。これ九月九日のことである。この日であつた、江戸より家康の使者が來着し明日出發西上するから急ぎ美濃に來會せよと傳命した。この使者は八月廿九日に江戸を出發したもので、明日とあるは九月朔日のことであつたが、それが小諸に到着するに當り、時日を要すること十日にも及むでをる。こはけだし秋雨大に降つて道路を阻ばむだためであつたといふ。秀忠は上田を攻むるよりは速かに美濃に出たいと希望してをる。この事先にも議させたことあり、その時戸田一西の如きは極力西上の急を主張したが、正信が頑としてきかなかつたのでツイ今日に至つたのである。

そこで今使者に接して斷然西上に一決し、森忠政・仙石秀久・石川康長・日根野吉明・諏訪頼水等を上田に備へ、本多康重を殿として十日小諸を出發し、行軍十日、即ち二十日を以て草津に到着した。これより先出發に際し、正信は城兵の要撃を恐れて迂路を取つたが、本多康政獨りこれを恐るゝに足らずとなし、部下の士卒千餘人を率ゐて堂々本道を通過し、十三日諏訪において秀忠に合したといふことである。

秀忠が精兵を率ゐて上りながら一眞田に阻止せられて、關ヶ原の本戦に閱に合はなかつたについては、家康の憤り尋常ならず、秀忠が草津に着して伺候するや、家康は持病の寸白が起つたからとて對面を拒絶した、秀忠は幕の外でそれを聞き、さては西上遅延のため憤りありと見ゆとて落涙して引下つた。秀忠に對してさへ、右の如くであるから榊原・本多・酒井の面々に對して何うして對面すべき。直に侍臣をして、

「下陣へ罷り歸るべし」

と曰はせ、その日大津に出發してしまつた。

かやうな次第で秀忠及び家臣一同は大に身の前途を憂へてゐたがその後康政・正純が極力分疏したのでやうやく怒りを解き、廿三日大津で秀忠に對面し、秀忠にその日直に伏見に出立すべく命じた。

一七九 大津開城 (上)

大津は京極高次の居城である。彼が大津に居城したのは、太閤が彼に東海道の咽喉を扼させるため特に其處に置いたのであつた。恩義の二字を知る者だつたら、忠實に遺命を果すべきである。況してや彼は豊臣の外戚ではないか。しかるに彼は利に立ち廻ることを知つて恩義の大切なることを忘れ、大奸の家康に與したのである。

最初高次は家康の東下の際し、これを響應して瀬田まで見送つた。大老・奉行等は兵を擧ぐるに及んで彼の心中を覺束なく思ひ、秀頼母子の命をも含めて朽木元綱を彼の許に遣はした。

「貴殿は正しく秀頼公の御外戚といひ、太閤の御懇情を請けたる人ゆゑ、定めて二心はなきことと信する。されど江戸中納言(秀忠)の内室は貴殿の奥方の妹なれば關東へも由緒あり、自然此方と隔心なきにしもあらず、熊若鷹殿(高次の子)を人質にお出しあつて別心なき證據を表はしたまへ」高次は俄に敵意を見せかねた。

「某何の恨みあつて秀頼公に叛き申すべき、逆意あるやうに人質を出せと仰せらるゝは、近頃曲もなきことなれども、左右申すも無禮なれば、御下知に従はむ」

と曰つて熊若鷹を差出した。その後、間もなく利長・利政が越前に兵を出したので、大阪よりまた高次に命ずるに、元綱と共に越前に向ふべきを以てした。これより先高次は家老の山田良利を質として江戸に送り大老・奉行の陰謀を耳にするやまた直にそれを江戸に報じた。その結果家康は良利に密旨を授けて大津に還へした。かゝれば江戸と大津とは絶えず連絡を取つてゐたが、高次は更に大阪より

の命を受けた時なほ敵意を表はすべき時期でないと見たか、尋常に命を奉じ、黒田伊豫・赤尾伊豆等に千人を授けて留守をさせ、己れは二千人を率ゐて越前を指した。

然るに高次はその未だ越前に入らざるに先だつて、利長は已に退却したといひ、東の方面では岐阜合戦で義軍が敗戦したといふ。なほこれより先大阪から大津に成兵を入れむとして、伊豫等の拒むところとなつたので、それこれの報を耳にした高次は時節到来と胸中密に喜悅したが、時しも大谷吉繼が美濃に行かむとし、吉繼より行を偕にすべしと言はれて吉繼と一日後れて南進し、東野に出で、一宿し、そこから吉繼を欺いて美濃に先發させ己れは背走して大津に歸つた。これ九月三日である。

高次は大阪に歸るや、直に書を直政及高知に送り、いよく義軍と手を切つた、これより大津で義軍の東下を扼すると告げ、城外の民家を焼くやら柵を栗津・逢坂に結ぶやら、京町口・尾花川筋園城寺口に兵を配するやらそれら守城の準備をした。

一八〇 津開城 (下)

こゝに柳川の城主立花宗茂は、最初大阪よりの檄に接し、兵を率ゐて大阪に上り、それより輝元の命を受けて近江の瀬田に出張し、その地の松本山といふに駐屯した。こはけだし高次の心中測り兼ねるより陰に大津を監視するためであつた。然るに高次は果して裏切つた。宗茂は逸早くそれを聞いた。急ぎこれを大阪に報じ、同時に大津に向つた。

大阪では高次の裏切りはかねて疑ひをかけてゐたので別に驚いた様子もなかつたやうだが、兎も角も今一度諭してみやうと輝元・長盛は淀君に請うて、淀君から使者として尼の孝藏主及老女阿茶局を大津に派し、高次の姉なる松ノ丸まで説いて貰つたが、音に聞えた孝藏主の辯舌でも、この時ばかりは効果がなかつた。高次は姉より孝藏主等の言ふところを聞いたが、一向それを問題にせず、いよいよますます守備を厳にし、いつにても攻めかゝれといった調子である。

孝藏主等は右の次第で空しく歸阪しその由を復命したが、輝元等は斷然討伐すべしとて、毛利元康を輝元の代理司令に、毛利秀包を副司令にして、片桐且元・増田作左衛門・片桐貞隆・杉浦久信・石河頼明・伊藤長孝・小出秀政（以上いはゆる大阪の七手組）桑山一晴・多賀秀家・杉谷傳三（以上大和の諸將）及筑紫廣門・伊藤祐兵・宗義智の兵を派遣した。この勢宗茂の手兵と合せて一萬五千といふ。

義軍は十二日大津に着したが、元康は本營を園城寺に置き、秀包を京町口に向け、瀬田より來會せる宗茂を濱町口に廻し、議して急攻と決し、その日直に外壕を埋め、翌日昧爽諸方より攻め寄せた。城兵は衆寡敵せず、たちまち三ノ丸を去て、二ノ丸に引揚げ、二ノ丸もまた夕に至つて陥落した。當日義軍は砲を長等山上に置いて、城中を砲撃したが一弾、天守閣の二層に命中し、ために侍女二人は震死する、松ノ丸も一時は氣絶するの騒ぎを見た。

義軍は十三日二ノ丸を攻め落したが、間もなく夜に入たので攻撃を中止し、翌十四日朝から再び本丸を攻撃したが、城兵ナカ／＼頑強に抵抗をするので、元康は正午に至つて高野の木食上人を城中に

遣はし、

「正しく天下のお爲めとあつて軍勢を催促せらるゝ中に、貴殿は御下知に背きたまふて籠城あるに
おいてはその罪謀叛に等しかるべし、急ぎ寄手と御和談あつて、御老母、その外女達、または人質
として出されたる熊若殿の御命を救ひたまへ」

と曰はせた。高次は上人の諭旨を聞いて、

「今更城の危きを見ておめ／＼と城を明け渡さむこと、武門の恥叶はずば腹切るべし、この由輝元
長盛にも物語つてたまはれ」

と曰ふ。上人は重ねて懇々説いてみたが容易に應ずる氣色もない。然るにこゝに家老の伊豫は最早如何に闘ふとも所詮何の得るところもなしと看取し、闘ふ氣力も失せたので、切りに高次を諫め、

「この上籠城いたすとも、關東よりはいつ上り來るとも定かに判じもつかず、孤立無援の姿なる上
に、士卒の間にも如何はしき者あれば、この度は一先づ城を開いて去り、關東の軍に會する手段こ
そ然るべからむ」

といひその間にまた淀君からの使者として、孝藏主が再び乗り込み來り、是非々々和談然るべしと説いたので、高次は力なく講和と決意し、質を交換して城を出で、園城寺に退いた。これ九月十五日である。高次は直に薙髮して高野山に入り城は宗茂が受取つて守つた。

一八一 大垣城降る

三成が家康を要撃すべく大垣より關ヶ原に出でた時その留守に女婿の福原長堯を置いてこれに熊谷直盛・垣見一直・木村勝正その子豊統・相良頼房・高橋元種を附屬した。長堯は留守の備へを定め、己れと直盛とは本丸を守り、二ノ丸には一直・勝正父子・頼房を配し、三の丸には種長・元種を廻した。その兵數七千五百といふ。

水野勝成は西尾光教と共に曾根の砦を守つてゐたが、九月十四日夜半義軍が大垣を去つたと聞くと光教と協議し、曾根と赤坂の間にある松平康長と共に急遽樂田なる島津の陣營を攻めた。ところが陣營には單だ火あるのみで一兵だもゐない。そこで進むで大垣城に逼つた。

大垣では城兵堅く門を鎖し、一向相手にしない。勝成は弟の市正と共に門を破り、光教の兵と合して三ノ丸を攻めた。こゝにおいて城兵は力を極めて防戦したが、康長が追手門に向つて、攻撃し來つたので、終に敵しかねて二ノ丸に退却した。その間に夜は明けたので勝成は城北に退いた。こは一時に抜くべからざるを知つて、士卒を休養させるためであつた。その時勝成は捷利の次第を家康に報じたが、關ヶ原でなほ未だ戦はざる以前にその捷報が到達したので家康は大に喜んで使者に黄金を與へた。とかうする間に午後には關ヶ原の大捷が勝成の許に達した。勝成は考へた、急に攻めて士卒を損せずとも、關ヶ原で大勢決した以上、この城は自然に落つるにきまつてをると。かくて勝成は兵を率

ゐて曾根に還つた。

勝成の豫想は中つた、意外に早く中つた。翌十六日の夜のことである、頼房・種長・元種連署の一書が彼の手に落ちた。罪を宥され、領邑を全うすることができるなら、城將數名を殺して歸順する、この意中を井伊直政に取次いで貰ひたいといふのである。頼房はかねてより心中で家康に歸屬してをる。さきに大阪に到着した時、早くも直政に書を遣り奉行等に要せられて已むを得ず義軍に屬してをるけれども、それは本心でないと言ひ遣つてゐた。かゝれば今日、彼れが、種長・元種を誘ふて逆軍に投降しやうとしたとて毫も不思議はない。勝成は頼房等の書を見てそれを本營に報じ、それより返書を密送してその請を容れた。頼房はそれを見て悦び、早速、人を一直・直盛及勝正親子の許に遣はし三ノ丸の竹林が防戦の害となるのでこれを伐りたいから來て監督をして貰ひたいと言はせた。方を以て欺けば君子も欺かるで、一直は暗打に逢ふとは夢にも知らず、請はるゝまゝに竹林に出張した。これより先頼房は屈強の兵士數名を竹林の中に潜ませたが、一直等が來るや否や、躍り出で、滅多斬りに斬り殺した。頼房は一直等の首を擧げてこれを證として勝成に交附して直政に届けて貰つた。

頼房は勝成と一手になり、康長の兵を先に立て、本丸を攻撃した。長堯は敵の攻め來るを見て樓櫓より應戦し、勝成・康長の兵に大損害を與へ、これを撃退した、頼房の兵が代り寄するや、これまた裏斬り者として小氣味よく撃退した。僅に本丸に對して難攻かくの如きはまた稀である。勝成は二夜三日を費したが、なほ抜くことができない。その間に家康からの命があつた。それは諭して降せよとい

ふのである。勝成は一禪僧を本丸に遣はし、開城の利害を説かせた、長堯はこれに對して曰つた。

「我等は石田と縁者のこと故、一命を助かるべきやうなし、さりながら身命を限りに働きたる士卒を討たせむも不便である。いやしくも彼等の死を宥さるゝならば、謹むで城を致すであらう」

禪僧は一旦退出してその旨を復命した。勝成は光教と協議して長堯の申出を許容した。長堯は早速城を出で剃髪して道濫と號し、伊勢の朝熊山に退いて罪を待つた。これ廿三日である。勝成等は城を受取つてそれを家康に報じ且つ長堯の赦免を請うた。然るに家康は之れを免さない。

「福原たとへ法體して罪を謝するとも重罪なれば免し難し、急ぎ切腹を申付けよ。」

といふ。こゝにおいて勝成等はそれを長堯に告げた。長堯は別に驚く様子もない。

「かくもあるべきことである」

といつて、雄々しく切腹した。これ廿八日である。時の人それがためにその勇を惜むだといふ。さてまた城は家康これを康長に成らせ、勝成、光教等は西上した。

一八二 三津浦の小戦

伊豫の伊豫郡の松前城といふがある。加藤嘉明の居城である。その外伊豫には大洲城があつた。これは藤堂高虎の城である。嘉明・高虎の兩人は會津陣のことあるや、家康に屬して東向し、居城には何れも留守番がをるばかりであつた。輝元はそれを見てその兩城を收めむものと、兵戸元眞・會禰景房・村上武吉とその子元吉を伊豫に出張させた。

元眞等は命を奉じ兵三百を率ゐて海を渡り、興居島に至つて使者を松前に遣はし、致城を諭した。これ九月六日である。當時松前の留守は嘉明の弟忠明であつたが、忠明はナカノの頑強者であつたので、城を致すどころか却つて使を斬つて斷交の意を明かにし、兵備を修して、毛利兵の至るを待つた。使者の斬らるゝなど、此上の恥辱はない、しかも元眞等は兵を進めて三津浦に至るやそこより、またノ再三使者を出して誘降した。頑強の忠明何で聞き入れやう。九月十六日の夜、忠明は三津浦夜襲を命令した。命ぜられて行くものは佃十成・黒田九兵衛で兩人はすなはち二百八十の士卒を率ゐて三津浦に至り、元眞の營を襲撃した、十成といふは元大阪に浪人してゐたが平野長康の取持に因つて嘉明の家臣となつたものである、小田原や朝鮮陣で少からぬ成功あるもので、太閤から感すべき奴懇ろに扶助せよと嘉明に命じだ程のものであるが、従つて夜襲のことなどは能く心得てをる、彼れ即ち先づ合言葉を作り、敵の首は取るな、切捨にして切り廻れよ、敵と斬結むでても貝の音を聞かば引取れよと申渡し、三津浦に至つて不意討をくれた、元眞悔恨して兵を勵まし、自ら槍を揮ひ、城兵荒川甚左衛門を突伏せた。また他の者は十成にも手傷を負はせたが、毛利方では景房、元吉以下十餘人討死したので、毛利兵の敗戦とはなつた。九兵衛は小氣味よき勝利を得たとて三津に火を放つて引揚けた。

この時に當つて伊豫の舊主河野通直の浪士平岡善兵衛なる者、舊主の恩を思ふ百姓を煽動して土寇

を起し、毛利兵を誘引して宅原の故城に據つた。例の忠明はこれを聞いてまたく十成・九兵衛の兩人に命じて宅原を襲撃させた。毛利兵は前の襲撃に懲りてをるので今度は十分注意してゐたと見え、敵の襲撃と見るや、直に出で、久米八幡の下如來寺に據つて戦つた。そして九兵衛を殺し十成には重傷を負はせた。城兵は前日とは正反對の大敗で十成が辛うじて残兵を收拾して引揚ぐるの仕合せとはなつた。これ九月十九日である。越えて廿三日宅原に據りたる土寇と毛利兵は三津に退いた。例の忠明はこれを聞くや、なほも懲りずに老臣五人に鐵砲の者百人を附してこれを追はせ、己れもまた兵を率ゐて三津に回つてそれを襲撃したが、双方死傷を出し、城兵においては格別勝目とは無かつた。その間に日は暮れ、また日は出で、廿四日となつた。この日元眞は俄に兵を率ゐて歸航した。これ他なし關ヶ原の敗報が彼の許に到つたからである。

一八三 黒田如水 (一)

當時家康を外にして最も横着であつたのは、東の伊達政宗・西の黒田如水であつた。この兩人は東西横着者の一對で、家康も兩人には心を許さなかつた。中にも如水は太閤さへ持てあましてゐたものであるから、家康として殊にその一舉一動に注意したことであつたらう。

如水は慶長四年七月家康から歸休を命ぜられて豊前中津に歸つたが、この時から天下大に亂ると看取し、悠々自適、水の如きを装へども密に白眼以て京阪の天を見てあつた。果して翌年、景勝は兵を

擧げ、續いて三成も蹶起した。そこで如水は時節到來とばかり浮浪を召集して隣境を攻伐した。

これより先、如水は家康が景勝攻のため東下するや、子の長政をこれに従はせ、己は中津の城に留守し、世外隱居と見せかけてゐたが、一日東國東郡高田の城主竹中伊豆守隆重を伴ふて城下の町人伊豫屋彌右衛門の宅に出かけ、主客歡談、やがて隆重は一足先に辭し、如水はなほ語りつゞけてゐたところ、家來の野間源兵衛といふが大坂より馳せ歸り、石田の擧兵、如水の父子の夫人の護送等を報じた。如水は直に城に歸り、隆重を道より引戻して風雲の急を隆重に聞けて曰つた。

「暗愚の輩、三成に同意して一時に勝負を争ふとも、螻蛄が龍車を襲ふにひとし、貴方、我等に同意して内府に味方せらるゝならば、疎意なく申し承はるべし」

隆重は異存ない、

「某も仰せに従ひ、内府の味方に參り申さむ」

と言明して歸城した。これ七月十七日である。

如水はそれより老臣に命じ、修繕中の城隍の工事を差止めた。老臣は怪訝に堪へず、當今要害を堅固にするこそ當然なるにこれを無用とは如何なる御思慮にやと問へば、彼は昂然として曰く、

「面々の申すところ、さることなれども、若し今度の合戦に、内府が打負けば、我等堅城に籠るとも運を開くことではない。籠城の用意をやめて敵地へ働き軍功を立てむことこそ肝要なれ」

けだし如水の眞目的は火事場泥棒をなすに在つたのである。政宗は家康からその意中を見透かされて

然りと自白したが、如水もまたその通りで彼はこの機に乗じて隣境を掠め領土を擴張し、家康勝たば功としてその領略の地を請求し、もし敗すれば、九州の兵を誘ふて上方に攻め上り、三成等と雌雄を決せむ所存であつた。さればこそ彼は會てより肥後の清正と連絡を取つてゐたのである、敵地へ働き軍功を立てむことこそ肝要なれなどと軽く言つて退けてをるけれども、底には底あり、またその底に底あつて、終に底の知れざりしは如水の行動であつた。太閤か彼を諱み、家康がまた油斷をしなかつた所以は實にこゝに在つたのである。

一八四 黒田如水 (二)

中津では長政が東下してをるので、手兵は大方これに従ひ行き、如水はまた隱居の身なれば手兵を有たぬ。手兵を有たぬ如水は如何にしてその大謀を成就せむとするか。さすがは彼である。老臣に命じて曰ふには、

「甲斐守關東へ出陣せし故、此方人數不足である。領内その外近國へ人を遣はし、諸浪人を抱へよ」

老臣は命に従つて直にその旨を近國まで觸れ立てた。凡そ天下に浪人ほど厄介な者はない。これを用ふるには非常の才能を要する、それを如水は用ゐるむとするのである。けだし彼ならざれば到底用ふることはできない藝當であらう。浪士連中は如水ならば一番仕へてみても可いといふが少くなかつた。

そこで一度近國に觸れが廻るや、浪士は陸續中津に聚つた。貝原市兵衛・杉原一茶の兩人は如水の下知に従つて寄り來る浪人を着到帳に載せ、それ／＼身仕度の金銀を與へた。如水は平素吝嗇家といはれてゐたものであつた。従つて大分溜め込むたが、今度浪士を招集するや、平生貯はふるところの金銀全部を投げ出し、それを廣間に積み上げて馳來る浪士に分與した。時人にして平生彼を吝嗇家と嘲つてゐたものはこゝに至つて感謝した。金銀の分與にはまた面白い話がある。馳せ來る浪士中、混雜に乗じて二度來て二重に金銀を受取つたものがあつたので、貝原はこれを發見し、大に怒つてそれを如水に上申すると如水は何といつたかといふに、

「當家の先手として槍を突かむと思ふものが何とてさもしき振舞のあるべき。惟ふにその浪人は出陣の用意調ひかねて、心ならずも紛れ來つたもので有らう。極めてその家貧しくば、たまたまかやうなこともするものである、年來費を省き、金銀を蓄へ置きたるは、武事の用に備へむ爲めであつた。二重に金子を得させたとして強ちそれが費とはなるまじ、手廣く事を捌いて一人たりとも人を多く集むる様、覺悟せよ。總じてかやうの時節には、一人たりとも多く人數の聞えあるこそよけれ、幾度にも着到帳につけよ、役に立つ立たぬの吟味は沙汰の限りである」

如水は浪士を招徠して兵備を整へた。一日海邊の要害を見るべしとて中津川より船に搭し、海に出でて富來・安岐の沿岸に赴き、密に兩城の形勢を察し、それより杵築に至つて忠興の老臣松井康之に對面し、彼の案内で城の内外を見廻り、

「敵の寄せ来ることもあらば、堅固に持ち抱へ、我等が後詰を待たれよ」と言ひ含め、また船にて中津に歸城した。

一八五 黒田如水 (三)

如水が戦備に汲々たる間に、黒田家に取つて何よりも目出度きことが一ツ生れた。それは如水父子の夫人が大阪より脱れ歸つたことである。

初め如水父子の夫人は大阪に在つて奉行よりその館に監視人を附され、監禁同様の身となつた。それを當時兩夫人に附いてゐた老臣栗山四郎右衛門・毛利多兵衛の兩人が盗み出したのであつた。その盗み出したことについては一條の惨めな物語がある。栗山と毛利とは兩夫人盗み出しについて先づ一計を案じた。それは監視人を欺くことであつた。如何なる方法を探つたかといふに、先づ毛利が虚病人となつて醫者の許に通ふと稱し、毎日々々乗物で町に出ることであつた。監視人は最初それを見て乗物の戸を開けて出よと命じた。毛利は命ぜらるゝまゝ毎日戸を開けて通ふた。數日の後には監視人は餘り注意しなくなつた。そこで今度は戸を半分ほど開けて毎日通ふた監視人は乗物の中に在るのはいつも毛利であるから、戸を半分開けてあつてもそれを別に咎めはしなかつた。かくすることまた數日の後、時分は善しと、毛利は先づ如水の夫人を自分の膝の前に乗せ、寝巻で掩ふて素知らぬ體で館を出た。戸は半分開いてある。中には毛利がゐる。監視人はマサカにその餘に人が乗つてをらうとは

氣がつかぬ。いつもの通り無事に通過をさせたので天の祐けと日頃出入の町宿に至つて、如水の夫人を預けて歸り、翌日また前の通りの方で長政の夫人を盗み出して町宿に運むだ。

運むだまではよかつたが、これをその夜船まで運ぶことについてまた一苦勞しなければならぬこととなつた。毛利はいろいろ考へたが、好い方法がない。漸く案出したのは俵に入れて、糧米に紛らすことであつた。兩夫人にしばらくの辛抱を請うて俵に入れた。しかるに當時は暑さの時分である。只さへ暑きに俵に入れられたのであるから暑い何のといつてそれは話にならぬ。兩夫人は遂に辛抱し切れず、

「息が切れる。いつそ刺殺してたもれ」

と聲をあけて泣き出した。毛利はそれを聞いて俵を解いた、果ては、思案に餘つてこのまゝ露顯せば残念である、むしろ兩夫人を刺殺して自分も腹を割かうかと考へた。がそれも短氣の仕業である。てまた考へ直して今度は宿の主人と談合して櫃に入れることにした。俵よりは少しは勝しであつたが兩夫人は早速それに忍び込むだ。そこで夫をば茶船で運むで本船に移し、水船の底を破つてその内に忍ばせた。

船は翌朝出帆した。一難去つてまた一難、川口の番船の大將菅右衛門八に見とがめられた。菅は、「あの船よく改め見よ」と下役に命じた。二三十人ばらばらと早や乗り移らむとした。サア大變である。毛利は如何の智恵を

か搾れる。彼はかねてより菅とは知り合ひの間であつたから、

「いかに右衛門八殿、大事の儀なり、自分で見給へかし、人次第になし給ひぞ、何たる物を船底に隠し置きたるも知り給ふまじ、大様成ること今に直らぬよ」

といつてカラ／＼と笑つた。菅はそれと覺つたか、

「多兵衛は徒者、取り分け念を入れ候、各々はそれに居られよ我等直に見るべきぞ」と下役を止めて菅自ら移乗して船底まで探し廻つた上、

「何者も居らぬぞ、この水船は……」

と曰つて二ツ三ツした、かに突き、

「これにも水がだぶ／＼いふは」

と呼はつて引揚げた。毛利はこれを見てヤツと息をつき、船頭を急がせて海に出で、かくして豊前に歸着したのである。如水はこれを見て非常に悦び、兩夫人を慰むるため、踊りを興行して見せたいふ。その後清正の夫人もまた大阪を脱れ出で、豊前を経て肥後に歸つたが、如水はこれをも手厚く迎送したといふことである。

一八六 黒田如水 (四)

豊後には當時城が十個所に在つた。その高田城には竹中隆重・富來城には垣見一直・安岐城には熊谷

直盛・杵築城には細川忠興の城代としてその老臣松井康之・有吉立行の兩人・府内城には早川長政、白杵城には太田一吉、佐伯城には毛利高政、竹田城には中川秀成がゐた。なほこの外に角牟禮、日隈の二城があつたが、これはいづれも高政の所管であつた。

右の内、康之、立行は逆軍に屬したが、直盛・一直・高政は義軍に屬して大垣に出張し、長政は田邊の攻城に加はり、一吉も在城して義軍であつた。隆重・秀成の兩人のみ態度曖昧であつたが、如水の説き且つ脅すに及むで兩人とも逆軍となつた。

かくて七月二十三日、大谷吉繼より康之の許に義軍に應ずべく勧誘の書の至るや、康之はそれを如水と清正とに轉送、示見した。越えて四日即ち廿七日、清正から義軍の田邊城攻撃を報じ、速かにこれに赴援すべく康之・立行に勸むるところあつた。兩人は勧めに聽いて早速田邊に馳せ行かむと後事を托すべく中津に如水を往訪した。その時丁度如水父子の夫人が大阪より歸來し、海上の通路既に義軍の制するところとなつてをることを告げられた。それがため康之等は迂路を取つて北海より田邊に入らむと計畫したがこれにはまた水夫等の應ずる者が無い。康之・立行は遂に杵築城においてその嬰守を議決し、それを幽齋と忠興とに報告した。

その後間もなく太田一吉の子の一成が大阪より歸り、その使が杵築城に來つて城を收めむとした。これは一成が輝元・秀家及奉行等の命令に従つたのである。ところが康之はこれに應じない、彼は怒つて使者を追ひ返した。一成の使者は歸つて委曲復命したが、一成もモウ斯うなつては力づくでも收

めねばならぬ、父一吉と共に出兵して夜半深江に至り、翌朝、舊城を修理し、以て杵築城を収めむとしたが、康之はそれと覺つて、舊城を毀つてしまつたので如何ともするなく、空しく引揚けた。その後續いて大阪より奉行等書を康之に送つて誘降したけれども、康之遂に應ぜず、それを如水と清正とに報告した。こゝにおいて如水は砲三門を清正は糧食火薬若干を杵築に送つて康之の籠城準備を援けた。

一八七 黒田如水 (五)

朝鮮で、明軍大擧して來ると聞いて、旗を卷いて逃げて天下一の卑怯者と名を取つた大友義統はそれが爲め太閤の怒りに觸れて領地を召し放され、輝元の許に預けられてゐたが、今度の亂で輝元から秀頼の命と稱して、舊領を復し、兵器、軍資を給されて、豊後に歸來すること、なつた。

如水はかねてより大阪と鞆・上ノ關の三個所に哨船を置いて、大阪以西の方面のことを三日以内に知るの便をとつてゐたので、爲に義統が豊後に入らむとするの報は早くも如水の許に達した。如水はそれを聞いて義統を我が手に屬せしめむものと先づ大友の舊臣二人を上ノ關に遣はし、復封を賀し、是非々々歸路中津に立寄られたしと言はせた。義統はそれと覺つたか中津に立寄ることを承引せず、直に豊後に入つて大島といふところに着船し、安岐の城代熊谷外記に對面して戰略を協議し同時に臼杵へ牒報した。この時大友譜代の家老吉弘鎮信の嫡子統幸といふが柳川から駈つけて、

「秀吉公、させることなきに、累代の大友家を滅ほし給ひ、終に御有免なかりし事、近頃、情なき御下知でござる。然らば何の御報恩に秀頼公を守り立て給ふや、輝元卿・近年の御懇情は、さることながら、御嫡子義延公には、内府もまた數年の御懇志あり、かたぐ一方に御心を寄せらるべきやうもなし、その上今度の企ては、秀頼公の御爲めとも申し難し、また戦ひの勝負を計ること、智謀といひ、老功といひ、内府の勝利、掌を指すが如し、この上ながら先約を御翻しあつて然るべからむ」

と諫めた。義統は肯かす、

「太閤、我を罪に行はれし故、いよく、幼君に疎略なり難し」

といひ、翌日、速見郡に上陸して立石に據つた。

立石とは今の南立石のことで、鶴見嶽の東麓に當り、北には石垣原の廣野を控へ、ナカノの要害である。義統はさすがに豊後の名族であつたから、その歸來と聞くや、百姓町人に至るまで、相悦むで迎へたが、そのくらゐであつたから舊臣の驅けつくる者はおびたしく、竹田城に寄寓してゐた宗像鎮次・田原親堅の如き名ある者は眞先に來會した。統幸もまた一旦は諫めたが、聽くところとならず、さりとて振棄て、去りもならず、そのまゝ従ふこと、なつた。その軍勢は總數九百餘人に上つた。これが九月九日のことである。

一八八 黒田如水 (六)

如水は前々から九月九日を期して出動することとし、その準備に怠りなかつたが、いよくその日が来て辰ノ刻に兵凡そ八千餘を率ゐて中津を發足し、翌十日高田城の附近に至つて隆重に來會を促した。然るに隆重は當時病むでゐたので即刻返詞しかねていさゝか遅延し、終に、

「この程病氣なれば、御後より出馬すべし」

と返答した。如水はそれを聞いて大に怒り、

「敵とも味方とも知れぬ男を後に置いて、いかで先へは通らるべき、いよく伊豆守出馬せずば、手始めに攻め取るべし」

と早や旗奉行を城に向けた。隆重の家老の不破藏人、これを見て大に懼れ、如水の旗本に馳せつけて

「御不審擧ろなき御事でござる。この上は伊豆守の名代に幼息采女正(重義)を差出し申さむ」

と詫ぶるが如く、言ひ入れた。如水はそれを承諾した。藏人は早速馳せ歸つて采女正に二百人を召連れさせて如水に従はせた。

如水は進むで富來の上なる赤根山に陣を取り、富來を攻落せんとして十二日には先鋒既に富來を包圍した。この時杵築の康之から援兵を請うの使者に接し兵一千人を杵築に赴かせた。これより先義統は杵築を略取せむと統幸に兵百餘人を附して同地に向はせた。しかるに義統の舊臣中康之と親しき者があつて、それがあらかじめ康之に密告したので康之は早くも守備を嚴にし、統幸の間道より來つて住民の質の城中に在る者を奪はむとしたのを極力拒み戦つた。その間に黒田の援兵來が統幸の耳に入つたので、統幸は逸早く立石に引揚げた。

黒田の援兵は右の次第で、杵築城に到着した時に統幸は既に引揚げて居たので康之と會見し、明日は北方より進むで戦ふことに協議一決した、如水においても援兵を遣はしたものと、なほ杵築が氣にかゝるので、富來の攻落を後に廻し、先づ杵築を濟くはむものと兵を進めて安岐の城下を通過した、安岐では敵の如水が城下を過ぎるので、見てをるわけにもゆかず、兵を出してこれを支へたが、如水は全軍に令して一切城兵を構ひつけずそのまゝ安岐の附近に宿營して、翌拂曉、伏兵を置いて杵築に向つた。城兵はそれとは知らず追撃して伏兵のために三十餘人を失ひ、はうく城に引揚げた。

一八九 黒田如水 (七)

杵築の黒田兵は康之と共に立石に向つて進發した、義統はこれを聞いて九百人を三段に備へて敵の來るのを待つた。黒田・細川の兵は進んで實相寺山に至つたが、この時義統は先づ輕兵を出して敵に挑戦した。實相寺と立石とは一里を隔て、をるが、その間は砂礫交錯の曠野で、稱して石垣原といふところである、挑戦された黒田・細川の兵はこれに應じて銃撃して戦ひ、激戦三たびの後、大友の兵を撃破した。

この日、黒田の士久野治郎左衛門は黒糸の鎧に、天衡の背旗を指し、栗毛の馬に乗つて、宗像掃部の陣に向つた。彼は、當年十九の少年であつたが、鋭氣颯爽、凜々乎として、正に小英雄の概があつた。彼が馬を走らするや、後見の曾我五郎衛門を乗寄せて、

「後陣を待つて戦ひを始めたまゝ、敵、いらつて懸り來らば、引つけて突き崩すべし」と注意したが、一向承引せず、

「後陣を待つてば、人に先んぜらるべし、戦ひは進に利あつて猶豫に害あり」と曰て馳せ去つた。かくて治郎左衛門は槍を取つて溢れ來る敵と闘ひ、敵兵三人まで手の下に突き伏せた。が如何に奮闘しても少年の身である。遂に宗像の士岡部半助と稱する者に討たれてしまつた。

曾我は久野が討死と聞き、彼を討たせては主君に謁する面目なしとて、面も振らず闘つて、遂に掃部と組むで落ち、双方刺違へて相果てた。

大友の方でも吉弘統幸は義統の大概にして引揚を命じたを、その下知に従はず、朱柄の槍を揮つて數刻闘ひ、遂に二十人ばかりを突き伏せて井上之房が控えしところに馳せ向ひ、かねて知れる間なれば、

「あな珍らしや、一槍參らむ」

と曰ふ。之房は統幸と數語、言葉を交はした上、月劍の槍を取り直して突き合ふこと數次に及むだ。

統幸は得意の槍先を井上が胸板に當ること二度に及むだが、之房の鎧堅くして裏をかゝなかつた。そ

のうちに之房の槍先は統幸の内兜を突き、忍びの緒をからみ切つた。これが爲め統幸は兜が傾いて眼を覆うたが、之房はその隙に乗じて更に統幸の脇腹へ突込むだ。如何に統幸勇將でも、脇腹を突かれては殊へられない。その場に堂と打ち倒れた。統幸の郎等はこれを見て、素早く主人を肩にかけ、一目散に逃げ去つたが、之房はそれを見て味方の兵士に、

「吉弘を討ち洩らすな。」

と下知した、兵士は下知に應じて後追つかけ、遂に突き伏せて統幸の首を取つた。

大友の軍は一戦毎に不利に陥つてゐたが、統幸の討死と聞いていよく亂れ終に總敗軍となつたのである。

如水は前日杵築の急を聞いてこれに向つたが、十三日薄暮鶴見村に到着し、そこに康之を招見して石垣原の勝戦を聞き、明日は協力、立石を攻撃せむと種々協議したがその夜大に風雨至り、議は決定に至らなかつた。その間に義統の姻戚にして如水の家老である毛利多兵衛が義統誘降のことを申出た如水はそれを容るし、多兵衛を立石に遣はして誘降させた。反對者も多少はあつたが、田原親堅の如きも降を勧めたので義統はそれに従つて剃髮染衣、以て如水の轅門に降つた。たゞし親堅のみは再び走つて竹田城に入つた。これ實に九月十五日のことである。

一九〇 黒田如水 (八)

如水は十六日康之と共に一日杵築に引揚げた。名族の旗擧げであるから相應に手ごたへあるものと思つてゐた義統が、案外早く敗れて降つたので、如水の得意は思ふべしである。果して如水は一書(1)を裁して義統撃破の景況を報ずると共にその略定の地を自分に授與さるゝやうその周旋方をば藤堂高虎に依囑した。けだし彼が本音を吐いたものである。その書意に曰く(一)拙者は九日、中津を出動して、十二日に富來の城を包圍したが、義統は九日に別府、濱脇といふところに取上られ、立石に城を構へ、これに加はり十一日杵築城攻撃にかゝつた旨、富來まで注進があつたので、富來攻略を見合せて一騎がけに駆つけたところ、早引揚げて立石に籠城した。そこで十三日に杵築の軍勢と我手のものが立石に押し寄せ、二三度戦つた後、宗像掃部・吉弘加兵衛その他の名ある者數十人を打ち取つた。その日は夜に入つたので、十四日に立石を攻落することにしたところ生憎の大雨で延ばせてをると十五日の未明に義統・紹忍の兩人が味方の軍門に下つたので、一命を助けて、義統は中津に護送し、紹忍は立石の軍勢を召連れ拙者の陣營に來ると約束して歸つたが、その夜、中川修理の處に逃げ込む。修理は家康には別儀はないから、義統等に參加はしなかつた、修理は結局において立石の軍勢をも相添えて紹忍を拙者に送り越すであらうが、修理が家康へ使者など立てることがあつても、それは取り合はぬやうに、貴殿から内々申言しておいてもらひたい、(二)富來の城は五三日の中に攻落しやうが、それがすむなら、小倉に出動し、その方面が片附いたら加藤清正と協議し、關門を渡つて廣島に押し寄せ、そこを攻落するつもりである。(三)井伊直政に懇談されて拙者忤の長政を、宇喜多

秀家の領國たる備前に新封あるやうに家康までの取成しを頼み入る。(四)清正と拙者には、今度攻め取つた領地を、家康の斡旋で、秀頼から拜領のできるやう、井伊直政に話され、取持を頼む、多年お互になほざりならぬ間柄であるのは、この時あるがためである。(五)長政には兎に角關西において知行を與へられ、拙者とは別家して家康に奉公のできるやう工夫を頼み入る、と。

この度切取つた分を家康の取濟して秀頼から下賜さるゝやう、藤堂の肝煎を頼むといふところは前叙の通り、確に彼が本音である。その蹶然、起つて四方攻略に取かつた所以のものは、實にその領土擴張に在つたのである。即ち火事場泥棒に在つたのである、長政には秀家の領地なる備前を與へるゝやう周旋を頼むといふに至つては隨分思ひ切つた虫のよい注文ではある。

*

*

*

*

(1) 急度 申候

一清須に而懸御目候使者、去五日に罷着候間、内々加主計(清正)申談候、急手切之働を被仕候へと申遣候
 一拙者事、去九日に仲津を出勢して、十二日にかけひ城取巻候處に、九日に吉統(義統)豊後之内、ひやう(別府)はまわき(濱脇)と申所に被取上、立石と申所に城を拵紹忍(田原)むなな(宗像掃部)せは參、同十一日に木付(杵築)取懸候處かけひ城へ注進有之に付而、彼城を打捨、一騎かけに懸付申候へば、早引退、立石へ取籠候、同十三日に、木付衆、拙者先手之者、立石表へかけ付、兩三度合戦仕、むながた掃部、吉弘加兵衛其外歴々之者數十人打取候、其日は夜に入候之間、十四日に立石之城可責崩に相究候處、殊外大雨降相延候

石田三成を中心に

然處に十五日未明に、吉統紹忍、母里多兵衛陣所へかけ入候條、不及是非、一命を助、吉統は仲津へ遣置候
 紹忍儀は立石に有之人數召連、拙者陣所へ可參と約束仕罷歸、其夜中川修理所へにけ入候、中修、内府様へ
 無別儀候へは、紹忍むなな、吉統陣所へ不出處に候、結句人數を相添指出候由に候、自然内府様へ中修理方
 より使者など上げ候共、御取相無之様に、内々可被仰上候
 一熊谷かけひ城五三日之内に可相澄候、筑前小倉表へ罷出隙を明、加主計申談關戸越に而、廣島を取可申と存
 候

一江戸(合渡)之川、無理に御越候而、貴殿、田中兵太(吉政)甲斐守(長政)具々御手柄之通承、大慶此事に候
 一井兵少(直政)被仰談、甲斐守に備前中(秀家)跡を被遣候様に御取成頼申候
 一加主計拙者事は、今度切取候分、内府様以御取成を、秀頼様より拜領仕候様に、井兵被仰談御肝煎、頼存候
 數年無御等閑は、此節に候

一甲斐守には、兎角上方にて御知行被遣拙者と別家に、内府様へ御奉公申様に御才覺頼申候
 一御在所之儀、切々申談候、御氣遣被成ましく候、互に吉事、追々可申承候、恐々謹言

九月十六日

圓 清

尙々此書狀、御おんみつ被成候て可被下候以上

如 水

藤 佐 様

一九一 黒田如水 (九)

如水は十八日を以て康之と共に安岐城を圍むだ。

安岐では城主直盛の留守としてその叔父熊谷外記といふがるたが寡兵なれど克くそれを用ひて堅
 守した。

如水は朝鮮陣の時清正が晋州城攻撃に際して發明した龜甲車と稱するものを用ひて城壁に薄まり、
 また火箭大筒を打ちかけて城中を惱ました。それでも城兵は克く耐へてゐた。その間に城兵中、森孫
 左衛門、同孫右衛門といふ日頃外記と不和の間柄なる兩名があつてそれが毛利多兵衛のところまで内
 應を申込むで來た。

「某等内々、熊谷外記と不和なれば強ゐて籠城の意もなし、急ぎ降參仕るか、または城中に火をか
 くるか、何れなりとも御返答に任せ申さむ」

といふのがその口上である、多兵衛は早速その趣を如水に報じた。かういふ場合、不義を容るさぬ
 が、如水の如水たるところである。

「彼等兩人、たとへ外記に遺恨ありとも、主人に、讐をすべき道理なければ、不義の降參は、用に
 立難し、その上、城を焼き立つるにおいては、敵味方の手負死人多かるべし、所詮、返答は無用で
 ある」

と曰ひ、さすがに智者であるからその事件を利用して敵を降さむとかねて外記と知り合なる、馬形喜右衛門といふを呼び、

「其方、外記方へ書を送り近國に後詰すべき味方もなく、その上、城中に内通する者あれば籠城かなひ難かるべし、急ぎ城を明渡すにおいては外記を始め、城兵一人も殺害せじ、これ如水の下知である、と具に利害を告げ知らせよ」

と命じた。喜右衛門は早速その趣を書狀に認め且つ誓紙をも添へて城中に送つた。外記は書狀を見て城兵を召寄せ、

「主君の下知もなきに、城を渡さむも無念なり、さればとて後卷のため頼みもなく、大軍に攻め圍まれては、城中の男女、一人も残らず死亡すべし、この上は我等一人切腹して諸卒の命を助くべし」と告げた。しかも城兵は之を聞いて承引せず、みなく異口同音に、

「貴方一人を切腹させておめおめと城を出づべきやう更になし、ことごとく討死せむ」と曰つて、勇み立つた。この時平野勘右衛門といふが進み出で、

「双方の所存はさる事なり、我等如水の陣所に至り、この趣きを申すにおいては如水は情ある將なれば、宜しくその沙汰せられるであらう。暫く待たれよ」

と曰ひ、直に城を出で、如水の本陣に來つて、外記及城兵の態度を話した。如水はそれを聞いて甚く感動して曰つた。

「外記を始め、城中の輩、城を渡すこと、卑怯にあらず、然る上は我等を主人とすべき望みあらばみな召置いて家人とすべし、若しまた他國に赴くべき志ある者は、家財ことごとく取まとめ、心任せに立ち去るべし」

勘右衛門は自分の思つた通りになつたので大に喜び、城に馳せ歸つてその旨を傳へた。茲において外記等みな城を明渡すこととなり、廿二日みな城を出た。これ廿二日である、如水は城を收めて之れに番兵を置いた。この時城兵中、如水の手に附いて富來城攻撃に参加したものもあつたが外記に至つては、如水へ助命の禮を述べ、それより上方に赴き、途中直盛が大垣城で死むだことを聞いてしばらく京都に逗留し、その後筑前に下つたが、如水はまたそれを賓客として黒田圖書に預け置いたといふ事である。

一九二 黒田如水 (十)

安岐を收めた如水は、その翌廿三日富來の城を再攻し、使者を城中に遣はして降を諭した。城中には當時一直の留守としてその兄垣見直延といふがをつたが如水の使者に接して、

「城主の下知なくては城を致し難し」

と曰つて斷然拒絶し、鐵砲を放つてその態度の強硬を見せた。こゝにおいて黒田の兵はその翌日城外に迫つて隍を埋め、井樓を架し大筒を置いて城樓を射撃した。城兵は二ノ丸に退いて防戦したが、如

水は急攻を好まず、令してこれを戒めた。それでも黒田の兵は城兵の寡少を侮つて外廓を攻め取つた。これを見た本丸の城兵は大に怒り、突出して戦ひ、遂に黒田の兵を小氣味よく撃退した。その間に日は経つて十月の二日となつた。この夜船一艘海上遙かに漕ぎ來つた。黒田の方ではかねてより松本吉右衛門を船奉行として晝夜の別なく海上を戒めてゐるが、前記の船が漕ぎ來つたので、直にこれを捕へた。ところが、船中の飛脚は一直より留守の者に遣る一書を携へてゐるので、これを檢むると、書中には自分は戦死して太閤の恩義に報ゆるから、城は敵に渡したがよからうとある。その上一直の祐筆仁良新右衛門といふが追つかけ大垣より歸來したので、如水はこれ等の者を城中に入れ速かに降らむことを諭した、直延等は一直の死を聞いて最早この上は籠城するも運の開くべきやうもなしとて「この上は城を渡し申さむ」

と返答した。毛利多兵衛はそれを聞いて如水の前に出で、

「城兵、黒田兵庫が陣へ夜討をかけたる罪科あれば、一人も残らず、討ち果し申さむ」と主張した。如水はカラ／＼と笑つて、

「敵は味方を苦しめ、味方は敵を惱ますが定法なれば、たとへ夜討をかけたりとも強ちに怒り憎むべきでない。その上敵味方に死傷なくして功を立つるが肝要である」

と曰ひ、遂に圍みを解くべく命令した。この寛大なる處置には城兵はみな満足したと見え、城を出でてから如水に附してその先鋒に加はつた。

この攻圍については如水の態度に面白き話がある。初め如水の家臣某城兵の突出を氣遣ひ、如水に向つて甲を着するやう注意した。ところが如水は一向それを取合はず、

「素肌にて槍はやられぬものか、これほどの小城を攻むるに、如水が具足を肩にかくべきや、その心遣ひは無用である」

と曰てのけた。この一事で如水は氣既に諸城を呑むでゐることが察せらる。

一九三 黒田如水 (十一)

萬事に抜目のない如水は、陸に活動すると同時に海上をも忘れず海戦に長じた者はもちろん、野島の海賊をも誘致して、番船二十餘艘で警戒してゐた。ところが丁度富來攻圍中のことであつた。島津惟新が關ヶ原で敗れ、大阪より人質を携へて海路歸國するに出會した。惟新の乗れる船は既に遠く去つたけれども、屬船三艘は夜に入つて方向を誤り、富來附近に漕ぎ來つて、番船の篝火を見、それをば惟新の乗れる船と思つて近づき、拂曉に至つてやうやく覺り、急ぎ海上に去らむとしたを發見したのである。

番船は島津の屬船の去らむとするを見るや、正しく敵船である、遁すなど數艘で追ひかけた。島津の船は、何れも多くは婦女を搭載してゐたので、戦ふ意はない。番船の漕ぎ寄するや、櫂の先に笠を附けて出した。これ降伏の意を表する記號である。しかるに番船はこれを解しなかつたと見えて、な

ほも漕ぎ寄する。島津の方ではこれを見て、さては降参の古實を知らぬものと見ゆとて更に空樽に降参と書いて流した。番船はこれにも目をくれず、ハヤ鐵砲を放つて攻めかゝつた。こゝにおいて島津の方でも最早遁るゝに由なしとて伊集院左京、寡兵を指揮して數艘の番船と戦つた、島津の兵は海戦に長じてゐるので、莖薦を水に濕し、それを以て楯となし、鐵砲を放つて寄せ來る番船を撃退した、番船は更に左右に分れて夾撃したが、これまたいづれも撃退された。この時右方の番船に庄林七兵衛といふが乗つてゐたが、舷に立つて味方を勵まし、

「黒田の御家に野島の輩あること、近國に隠れなし、もしこの船を乗損せば、主君の御家に瑾を附くるばかりかは、野島一黨の名折れである。」

と叫んで卒先奮闘した。島津の方では死力を盡して防戦したが、何分にも多勢に無勢である。且つや敵より烈風に乗じて船蓬に火を放つたので、船は見るゝ焼け出した。船中の婦女は泣き叫ぶ。宛然海上の焦熱地獄である。島津の兵は敵と戦ひ火と闘ひ、最後の一人まで戦ひ盡して、悉く戦死し、婦女はまたみな火に焼かれ、海に入り、最後に三艘の船は全部火と化して、やがて海底に沈み去つた。この時黒田の兵もまた百人餘の死傷を見た。この戦ひは九月二十七日のことであつたが、その黎明、姫島の海上に始まつて午後四時佐賀關の西方に終りを告げた。その長時間の戦闘は如何に島津の寡兵が奮闘したか、察せらる。

戦闘が終つてから番船の士は得意げにこれを如水に上申したが、如水は喜ぶと思ひきや、

「無用の戦ひをなし殊更女性を殺し甚だ不仁の計らひである」

とていさゝか機嫌斜であつた。しかし、

「能く働きたる者を捨て置くも如何」

とてそれには恩賞を與へた。如水の如水たるところはこの邊にも見らるゝであらう。

一九四 黒田如水 (十二)

如水は富來を降してから西を指して小倉に向つた。小倉の城主は毛利勝信といふ。その支城に香春城といふのがあつた。毛利吉之の居城で、吉之が伏見で負傷してからは、子の甚九郎といふが守つてゐた。如水は先づこの香春城を圍むだ。甚九郎は所詮敵しかね恨みを呑むで降つた。如水はそれに小倉城の先鋒を命じ、進むで足立山麓に屯し、小倉城を俯瞰して使者を該城に遣はし、以て勝信に降を諭した。

「關ヶ原の合戦に、宇喜多・石田等利を失ひて後は内府に敵する者、一人もなし、急ぎ城を明け渡すべし。しかる時は某内府に御宥免あるやう申直すべし」

といふが、如水が使者を通じての口上であつた。勝信は城に籠つて如水に抗せむとしてゐたが使者の口上を聞いてたちまち氣を挫き、即時承引して薙髮し、一齋と改名して城を出た。如水は城を收めてこれに人を容れた。これ十月十四日である。

如水はそれより更に兵を進めて筑前に入つたが、その當時なほ日隈城を略取せむと栗山利安を同城に遣はした。時に角牟禮城では利安日隈を攻むると聞いて早くも戦はずして降つた。風を聞いて降るとはこの事である。利安は角牟禮城を収めて、日隈に向つたが、日隈には多少骨のある者がゐると見え、角谷に放火して中津領を襲撃するやら、城池を修理して守備を厳しくして待つた。けれども、これとて敢て戦ふの意はなかつたか、利安が利害を諭すに及むで翻然として降つた。日隈・角牟禮は共に既に記した通り、佐伯の高政の管するところであつた。所管の兩城が降つても本城の佐伯が固守することできぬといふわけではないが、兩城が降ると同時に佐伯もまた如水と講和した。これは當時佐伯には高政の留守がゐる、高政が上方で高虎に由つて逆軍に属したといふことを聞いたからである。

記してこゝに至つて、如水の行り口に感歎を禁じ得ざるものがある。それは彼が兵を用ふる、必ずしも戦はず、常に諭降を以て先と爲すことのそれである。良將は戦はずと古人はいつてをるが、まことに天下に爲す有らむとする者は、人を殺害すべからず、孟軻のいはゆる人を殺さざる者、能く天下を一にするもので、如水の如きは確に天下を一にする器量のあつたものである。彼がこの筆法は多年太閤に従ひ、由つて以て會得したものであらう。

一九五 黒田如水 (十三)

如水一たび足をあぐるや、豊後はみなその手に歸した。竹田・臼杵の兩城の如きも、小倉に先だつて收むるを得たから、佐伯城の講和は豊後陣の最終であつた。

竹田・臼杵のことは記述の都合上、後になつたが、こゝに少しくその始末を記さう。初め竹田の城主中川秀成は家康が東下に際し、これに従軍を請うて許されず、一先づ居城に歸つて、中川長祐、吉田重利等に兵七百を授け、これを關東に行かせた。しかるに長祐等大阪に達するや、義軍既に起つて東下すること不可能となつた。そこでしばらく大阪に留まつてゐたが、その内に豊後には大友義統歸來して兵を擧げ、その舊臣にして竹田城に寄寓してあつた宗像・田原がこれに走り、しかのみならず田原等は中川の旗幟を大友の據りたる立石に樹て、なほ太田・中川の兩將大友氏を應援すると記した立札を處々に建て、大友の爲めに氣勢を張つた。秀成はこれを聞いて大に怒り、兵を出して大友を攻めむとしたが、長祐等歸來せざるが故に、兵乏しくして攻むる能はず、心ならずも形勢を觀望してあつた。如水はそれを見て秀成は敵に属したと家康に訴へた。秀成の縁者の池田輝政は密使を竹田に下し、急ぎ敵を伐つて義軍に属せざるを明かにせよと諭した。その間に長祐等も如水の訴への爲め、家康から諄められて歸國を請ひ、直さま兵を率ゐて還つた。秀成は輝政の使を受けて、直に使を上せ井伊直政に頼つて大友に與せざる旨を陳辯した。この時に當つて如水はまた書を加藤清正に遣つて秀成敵すと告げたので、清正から秀成に質問して寄越した。秀成は、いよく身の危急に迫れるを感じたが、甥の寺井小七郎といふを質として清正に遣り、兵を臼杵に遣はしてその意を表示した。これ九月廿八日である。

白杵の城主太田一吉は初めから義軍に屬し、子の一成を上せ己は病と稱して城に在つたが、秀成の兵の攻め寄ると聞いて小垣源内等及び下浦に備へし兵を合せて六百餘人を三毬打ヶ鼻及田中に出して戦はせた。中川の兵はその士柴山重成が招募した浮浪と、立石より走り歸つた田原親堅の若干の兵とであつた、親堅が翻然太田攻撃に加はつたことについては、一言を要する。親堅はさきに如水に降らず、竹田に走つて重成に頼り秀成に謝罪した。ところが重成は丁度白杵を攻めむとその仕度最中であつたから、共に白杵を攻めて罪を贖へと命じた。これ親堅が太田攻撃に加はつてをる所以である。しかも最初の衝突は十月三日で當日は双方死傷あつて勝敗決せず翌四日再び同所で戦つて中川の兵利を得ず、親堅等討死した。秀成はさきに重成等を派遣すると同時に一隊を白杵の支城たる川登の砦に送つてそれを攻撃させ、十月朔日には自ら出で、白杵を圍むだ。しかるに間もなく如水から使者があり、秀成に告げて曰ふ。

「太田は既に關東に屬されたから、速かに圍みを解かれよ」

これは如水と一吉とは平生懇意の間であつて、この役の起るや、兩人は東西の兩軍いづれが勝つともその時次第で救ひ合ひをしやうと密約をしてゐたからである。ところが秀成は一吉が義軍に應じてをること顯著なので、徳川氏のために攻撃してをるのであると曰つて如水の言に聽かうとしない。かつ彼れは使を城中に遣はし、速かに城を渡せと勸告した。この時一吉は數次秀成の兵を惱まし、戦闘は却つて有利であつたが、既に關ヶ原の大敗を聞いてゐるので、敢て固守の意もない。しかしながら城を秀成に渡したとあつては、秀成に降参したやうに聞えて外聞が悪い。使にその意を告げ、城は黒田の出馬を待ち、潔くこれに致すであらうと答へた。秀成はそれを如水に告げ、如水は甥の政成を派來して城を収めた。秀成はそれを見て竹田に還つた。これが十月四日である。

一九六 宇土開城 (一)

宇土城は小西行長の居城である。その支城には八代・矢部の兩城があつた。行長は事變前から大阪に居たので、留守として宇土には小西行景を、八代には小西行重をまた矢部には結城彌平次をおいてあつた。

加藤清正が三成と間のよくないことは、しばしば記したがその如く清正は行長とも大に感情の衝突を來たしてゐた。三成と間のよくなつたのも、實は三成が清正の好まざる行長を庇護し來つたからである。故に清正の行長を憎めることは三成を憎めるよりもより以上であらうとも以下ではなかつた。そこで事變一度發するや、清正は自ら兵を率ゐて宇土城を攻圍した。

初め清正は輝元から上阪を促されて應ぜず、如水と協議して家康に加擔し、たびたび使者を關東に送つて其の意を陳べた。家康も清正に對しては腫物に觸るやうにしてをるので、清正が加擔を申越すを幸ひ、ことさら機嫌を取る態度に出で、小山からは、近かく西上する故、味方の軍勢が尾張に到達したと聞くまでは、輕々しく動くなと曰つて清正の家來を還へし、次いでまた肥後・筑後の兩國を與

ふるから、その地を領略せよといふ一書(1)を持たせて清正の家來二人を還へした。二人がこの書を携へて熊本に歸着したのは九月十日であつたが、その時は既に逆軍岐阜を攻陥し、進むで赤阪に駐屯してゐたので、その報知もまた已に清正は手にしてゐた。清正は如水と協議して近國を領略するであらう、この旨家康に具申を頼むと書(2)を裁して本多正信・西尾吉次の兩人まで申送つた。その書意に曰ふ、奉行連は我等に協議することがあるとて、毛利壹岐守を差し下されたやうだが、その書狀は到着したけれど、壹岐守は小倉に滞在の由である。その後即ち八月の晦日に、大阪なる我等の邸の留守居のものに、互の誓書の案文を差し越して、秀頼に忠義を盡すことこの時である。されば家老の者どもは人質をも出し、罷上つて東行するやう申越された。しかし今に返答のできないやうな様子であるから、如水と談じて返答するであらう。かやうの儀がもしその方面で風聞されるとも、不審には思つてくださるな。重ね々、如水と申合せてあることであるから、安心されたい。再三使者を差し上げたが、今以て一人も歸着しない。小山から下されたそちらの使者は我等ところへは、一人着いた。そこでその後また一人差し上げたが、重ねてまた如水と協議して双方から一人宛差し上げた。何としてもこの方面は、隣國を斬り従へることに如水と申合せてを。輕卒のことはしないつもりであるから安心されたい。委曲は使者の口上に述べる、と。

書中、如水々々とあるところを見よ、如何に如水が清正を抱き込むでたか、想像されるではないか。清正の愚直がこの邊にも見られる。

* * *

(1) 今度、雖上方鋒楯候、御方之儀別條無之由、祝着之至候、然は肥後・筑後兩國進置候間、成次第可被申付候、此節に候條隨分無油斷様專一に候、猶津田小平次・佐々淡路守可申候間、令省略候、恐々謹言

八月十二日

家 康

加藤主計頭殿

進 之 候

(2) 態致言上候、何方迄被成御出馬候哉、承度存申上候

從奉行衆、我等方へ申談候半とて、毛利壹岐守を差下之由に候、書狀は相越候へ共、其身は小倉に在之由に候、其後去月晦日に、大坂我々留守居之者に互の誓紙の案文差越、秀頼様へ御忠節、此時に候間、家老之者共、人質をも出し、罷上り、御奉公申候様に、被申越候、今に不能返答候様子により、如水申談、返答可申遣候、斯様之儀、若し御耳に立申候共、被成御不審間敷候、重々如水と申合有之事に候間、御安心可被思召候、再三申上候へ共、今に一人も不罷戻候、小山より御下に、我等へは一人參著候、其後又一人進上申候、重而又、如水申談、一人宛進上候事、此面之儀、尾州清洲邊を被成御着候御一左右承り、いつれの道にも、此隣國可申付旨、如水申合候而罷有候、聊卒之儀、仕間敷候條、御心安可被思召候、委儀は、右如水相談に而進上申、使口上に申合候、此等之趣、御披露所仰候、恐々謹言

九月十一日

清 正

本多佐渡守殿

石田三成を中心に

一九七 宇土開城 (一)

かくて清正は諸士を召集し一場の訓諭をなして曰く、

「今度大老奉行の輩、天下の御爲めと號して亂を起し、さばかりの内府を敵となして、一時に勝負を決せむとすること、偏に滅亡を招くに似たり、たとひ彼の輩一圖に、實心より出でたる謀にもせよ、勝利なかるべき方に與力して此方共に亡びなば秀頼公の御行末を、何者かは計り奉るべき、その上・石田・小西等が心を察するに、事を左右によせて内府を始め手に立つ者をかく計らひ、我意に任せむとする邪謀であらう。されば内府の旗下に屬し、彼の輩を打果して亂を治むべし。この事は内府の殊更なる懇命であるから、みなく我が意を體し、忠勤を勵まれよ」

主命に反對する者は一人もなかつた。さらば手初めに小西の居城宇土を攻落すべしとて内々評議をしてゐるが、をりから杵築よりの使者が飛んで來て

「今度、大友義統、上方に屬し豊後へ馳せ下り、杵築の城を攻むべき聞えあり、無勢のことなれば御加勢あつて給はるべし」

といふ。清正は取り敢えず兵を送らむとて井上大九郎等に兵百五十人を授けて赴援させた。しかるに次での報告には義統入國し、既に立石に據つたとある。清正はそれを聞いて自ら兵を率ゐて立石に向ひ途中使を杵築に遣はし十八日昧爽には立石に到達すると曰はせた。しかも十七日豊後の引治村に至るに及むで、義統既に降参との報告に接した。そこで清正は兵を回へして宇土に向ひ、廿一日これを攻圍したのである。

これより先、宇土城においては行景は清正が攻め來ると聞いて領民の人質を城中に收容し、南條元琢・小西如安と共に防戦準備をした。清正は引治出發に際し、居城の熊本に使を遣はし、加藤百助・吉村吉左衛門等に宇土の追手に向ふべきを命じ、己れは廿日松橋に着したが、その先鋒は前日既に廻江村に達し、村民の抵抗する者を撃つて石ノ瀬口に進み、深更その口の守兵を撃退して遂に城門に逼り火を町家に放つたところが城兵は却つてその火を利用して敵を狙撃したので、百發百中、敵は大に惱まされて遂に町口に總退却をした。

清正は廿一日兵を部署して、石ノ瀬口・鹽田口・松橋口の三方より向はせることとし、各口に仕寄を附け、竹盾を進めて銃撃し、その日の中に外廓を破り、市街に放火し、本丸を裸にしてしまつた。清正はそれを見て最早落城あるのみと見する、敢て戦ふて士卒を損するを恐れ、攻撃を中止し、重圍して敵の態度を見てあつた。

一九八 宇土開城 (三)

城兵もさすがは小西の兵である。裸にされても容易に屈せず、かへつて、或夜の如きは風雨に乗じ

て百助の陣營を襲ふた。かゝれば肥前日野江の城主有馬晴信その子直純等千餘人を同じく大村の城主大村喜前その士大村種純等三百人を率ゐて清正に赴援した。城中ではそれを見て一夜風雨の烈しきをりを見計らつて一卒を八代に遣はし援兵を請はせた。しかるにこの使は不幸にして城を出づるや間もなく仕寄番に發見され、搦め捕れた。仕寄番はそれを本陣に送り、本陣では厳しく訊問したが、

「某は城下の町人でござる、城内に取入れられてゐたが、密かに城を落ち申した」と曰つて實を吐かない。清正はそれを聞いて不審晴れず、

「彼の者を搦めた場所に、何なりとも落してあるものはないか、たづね參れ」

と命じた。早速松明を持つて捜索に出かけたところ、竹の杖が一本落ちてあつた。持ち歸つて清正に提出すると清正はそれを割らせて見た。果して中より一封の書狀が出た。行景から行重に送るもので披見すれば幾日の何時に後詰を頼む、その時城中からも斬つて出でて手を合はすと書いてある。清正は好いものが手に入つたとて、やがて近邊の百姓を呼び寄せそれに人質を出させて置いて、

「其方字士の城中より出で來つたと稱して、八代に赴き、この書狀を若狭(行重)に見せよ」

と命じた。百姓は人質を取られたので、それが恐さに唯々諾々、八代に駈つけ、件の書狀を差出して清正が命ずるまゝを陳べた。行重は書狀を見れば紛るゝところなき行景の手跡であるから使者を疑ふこともせず、申越し通り後詰をするとの返書を認めて使者を還へした。使者の者は無事に使命を果すを得たので、飛んで歸つて返書を清正に差出した。清正は大に喜んで百姓に恩賞を與へ、伏兵を小川の

町口に置いて行重の來るを待つた。行重はそれとは知らず、約束の日を期して宇土に出兵した。そして小川の町口で前記の伏兵に遭ひ、不意を打たれて隊伍をみだし、相應に戦つたけれども遂に八代まで退却させられた。これ九月廿八日である。この時加藤の士に北川監物といふ若者があつたが、彼は未だ戰場に熟れざる者として過つて敵の方に紛れ込み、氣が附いて逃げ歸らむとしたが、容易に歸れさうにもない、何とかして歸らないではと思案の末、左右の者に向ひ。

「敵は一戦に討勝つて退きつゝあり、追詰めて討ちたむこそ勇士の心操なれ、イザ追討せむ」

と曰つて馬を回へした。敵はこれを見てそれと覺り、

「彼奴は正しく敵なるぞ、餘すな、洩らすな」

と犇めいて、馬を圍むだ。監物は必死となり、辛うじて圍みを斬り抜け大汗になつて歸陣したといふ

一九九 宇土開城 (四)

城兵は八代の援兵が清正に逆撃されたことを聞いて俄に士氣を沮喪したが、それでもなほ屈せず、今度は援を薩摩に求めた。島津龍伯は國に在つたが、行景の依頼に應じて、島津忠長・新納忠元・伊集院久治を肥後に遣はし、先づ佐敷城を攻めて加藤軍を牽制した。これ十月二日である、佐敷は加藤重次が守つてゐたが忠長の攻め來ると聞いて迎へ撃つて大に戦つたが日暮に至つて交綏した。然るに翌日は忠長退却して、水俣城を守つた。これけだし出動の本旨が佐敷攻落に在つたわけではなく、たゞ

加藤軍を牽制するに在つたからであらう。忠長は水俣城よりして小西の諸城砦に聲援した。

これより先、清正は八代兵を逆撃し終るや、城兵の漸く倦めるを察て、竹桶を進めて火箭大筒を打ち入れ、晝夜間斷なく攻撃した。そして關ヶ原の情報に接するや、矢文を射つて城兵に致城を勧告した。ところが城兵は倦ではるてもナカ／＼應ずる氣色はない。こはこの城には他に見るべからざるものがあつたからである。それは城兵の基督教信者たることであつた。初め城中には宣教師が籠城して傷者を看護する。死者を埋葬する、それは／＼ナカ／＼に努めたものであつたが、この宣教師等は兵士一同に懺悔させ、矢文などの來ることあらば直に火中に投ずるやう誓はせた。それ故兵士はその誓約を守つて矢文などを顧みなかつた。清正の矢文に應ずる氣色のなかつたのは實にこれが爲である。

清正は矢文を發したけれど何の應答もないので、をりから關ヶ原より脱れ歸つた行長の家人を搦め取り、これを城中に送り入れた。城中では行景を首めみな／＼この家人の口上によつて關ヶ原の大敗を知つた。行景は最早この上籠城して徒らに士卒を殺すも詮なきことであるとして使を清正の營に遣はし、宇土はもちろん八代・矢部の二城をも致し、自分は死を以て士卒に代るから士卒を宥して願はくはこれを扶助して貰ひたいと申入れた。これ十月廿日である。言ふところ如何にも殊勝であるから清正は行景の志を憐れむでその條件を皆容した。

行景は宇土を開城してこれを清正に引渡し、自分は熊本に赴いて自殺した。八代・矢部兩城では行重・彌平次共に薩摩に走つて島津に投じた。島津の兵も今までは聲援してゐたが宇土は開き、行重・彌平次も走り來つたので遂に水俣を引揚げて歸國した。清正は宇土八代の兩城を收め、これに人を入れて己れはそれより兵を率ゐて柳河に向つた。これ十月廿三日である。

二〇〇 日向方面 (一)

日向に聞えた者は伊東民部大輔祐兵であつた。彼は飢肥を居城とし、支城に清武を有つてゐた。當時日向には飢肥清武の外に高橋元種の縣城があり、その支城に宮崎城があり、秋月種長の財部城(今の高鍋)があり島津豊久の佐土原城があり、なほ都城・高岡・綾・本庄・八代、倉岡(糸原)穆佐(倉永)等にも城砦があつたが、これらはみな島津忠恒の管する處であつた。

家康が會津攻伐のため關東に下つた後であつた。祐兵は兵を率ゐて大阪に上り、そこより家康に書を遣り、一臂の力を致したいと申入れた。しかも七月十四日病に罹つて大阪において臥床した。奉行長盛等兵を擧ぐるや祐兵に伏見攻撃を逼つた。祐兵の病は腫物とのみ傳はつて如何なる病名のものであつたかはわからぬが、病は大分重かつた。そこで病氣なればとて伏見攻撃の参加を辭退した。長盛等はそれを聞いて信じられないと彼と懇意な豊久を以てその實否を視させた。ところがその頃病はいよいよ篤かつた。豊久の訪うたを幸、後事を託するやうな譯であつた。豊久はその次第を奉行等に具申した。奉行等は然らばとてその兵のみを伏見城に参加させた。

祐兵は強ゐられて己むを得ず、伏見攻城に出兵参加したが、本心はドコまでも奉行等の擧に賛成し

なかつた。むしろ家康に通じて置きたい考へ、終に飛脚を中津に立て、家康に自分を紹介してくれ
るやうと如水に依頼し且つ、

「病軀ながら、内府の下知に従つて戦功をあらはしたき所存である。たゞしこの上とも大阪に罷在
るべきか、または本國に罷下るべきか貴殿の計に任せまし」

といはせた。如水は依頼を快諾し、

「上方一圓に、内府の敵なる上は、大阪に逗留然るべからず、いそぎ領地に歸つて敵國を攻め取り
給へ」

と勸告した。然るにその後祐兵の病は日一日と重るばかりでとても歸國すべくもない。またく使を
如水に遣はして事情を告げ、

「この上は留守の者共に命じて敵を攻むべければ貴殿より檢使一人お遣はしありまし」

といはせた。如水はそれを聞いてこれ亦快諾し檢使として家人宮川半右衛門を飢肥に遣はし祐兵には
「貴方重病の上は力なし、さりとて父子共に大阪に在りては關東人の聞えよろしからず、御息、
祐慶殿を下したまへ」

といつて使を還へした。祐兵は如水の言に従ひ、さつそく家老の稻津掃部に命じて祐慶を日向に下し
た。祐慶は當時十一歳の少年であつたが、大阪を立つとき掃部の侍兒と稱して哨兵を欺いたといふ。

二〇一 日向方面 (二)

大阪を脱した祐慶は九月廿四日紫波洲崎に上陸して飢肥に歸着した。越えて廿八日如水よりの檢使
も亦清武に着到した。

これより先飢肥における留守の面々、上方の事變を聞いて、進戦を主張するものあり、守城を主張
するものあり、議容易に決せず、いたづらに日を送つてゐるが、祐慶歸國し、檢視來着するに及むで
進戦派勝を占め、その結果として先づ宮崎城攻撃と決した。

宮崎には當時權藤種盛といふがその子と共に兵六百七十餘を以て守つてゐた。種盛は飢肥兵が押寄
すると聞いて、使者を本城の縣に走らせ、速かに援兵を送られよと請うた。然るに縣では高橋元種は
大垣に出で、在らず、留守の家老どもは種盛と善くない間であつたので、種盛の請求をばウソだらう
の一言で撥ねつけてしまつた。種盛はこれを聞いて大に憤つたが遂に將士を會して曰つた。

「援けを縣に請ひしも、縣の家老ども應ずる氣色なし、さりとて島津に請うては我が君を辱かしむ
ること、なる、今はこれまでなり死を以て君恩に報ひむ」

と並をる將士はみな種盛の言に従ひ、死を誓つて籠城準備をした。

飢肥兵はその數三千、これを部署して、一は宮崎攻撃とし、一は稻津重政が率ゐる清武を守り、他
は田野に在つて薩摩勢の來襲に備へ、なほ借屋原甚右衛門も若干を率ゐる紫波洲崎に出張した。これ

は佐土原兵の宮崎來援を恐れ、それを食ひ止むるためであつた。

かくて九月晦日の夜に至つて飢肥兵は宮崎城に逼つた。此時借屋原の兵も來り加はつた。種盛はその子と共に死力を竭して防戦した。されど、も亦衆寡敵せずで種盛父子は勿論將士百餘人城を枕に討死した。主將が死するや多からぬ城兵は崩潰し城は拂曉陥落した。

宮崎陥落の報清武に達するや、重政は來つてこれに入り、兵を細江・浮田・起水・中村等に配して島津の來攻に備へ、種盛父子の首級を如水に送致した。この時飢肥兵には甚だ好からぬ行動があつた。彼等は宮崎城の陥落を見るや、近邊を掠奪し、宮崎領の人民を飢肥清武に送致し、亂暴狼籍、今の支那兵もしないやうなことをした。主將在らざるが故、軍律が嚴重に行はれなかつたためでもあらう。

この時島津に在つては、飢肥兵が宮崎城を攻むると聞くや、倉岡・穆佐・綾・八代・高岡等の諸砦の守備を嚴にし、更に木脇東長等の二ヶ所に新砦を構へた。龍伯は佐土原城の豊久が上方に上り、不在であるところから、その留守を氣遣ひ、樺山忠助を遣はした。忠助が、佐土原に着するや、丁度飢肥兵來襲の風説が盛むに起つてをる。忠助は一計を案じて龍伯忠恒等續々佐土原に來ると觸れさせ、その旅館まで新築させた。をりから惟新が財部に到着した。忠助は大に喜むで人を財部に遣はしてこれを佐土原に迎へ、惟新は佐土原に入つて衆を慰め、また使ひを倉岡に遣はして同地の防備に就いて注意を與へそして薩摩に歸つた。

二〇二 日向方面 (三)

宮崎に在城せる飢肥兵は本庄に出で、島津兵と戦つたが、利あらずして退却した、これ十月三日である。翌日重政の弟牛之助といふが穆佐に向ひ、そこで島津兵と戦つて翌五日夜は柳瀬・糸原・金崎に放火し九日更に木脇に於て島津兵と戦ひ東長寺砦の島津兵に不意打を食つてはうく宮崎に敗走した。

島津の方でも穆佐の兵五百ほどが的野に出で、田野に在る伊東の兵と戦ひ、撃退された。佐土原の兵も亦十月十一日宮崎附近に出でて火を縦ち、翌日は別府を襲ふた、これより先鹿兒島より桂太郎兵衛、島津彌太郎倉岡に來り、島津久元・鎌田政近穆佐に來り、島津以久・柏原周防等東長寺に來つて交代守衛した。尙ほ島津忠恒も亦帖佐に至つて惟新に對面し、それより兵を率ゐて穆佐に出で、飢肥兵と戦はむとしたが、間もなく惟新が龍伯の命として止めたので見合せとなつた。

伊東の兵は佐土原兵が重ねて出で來るを偵知し、新名爪に伏兵を置いて撃退した。これ十月十六日である。これより先重政は宮崎城を弟の牛之助に托して清武に歸つてゐるが、諸縣及び佐土原の兩兵が合して宮崎に來襲するとの報に接し、清武を矢野侃世に托して再び宮崎に入つた。そして倉岡・綾・八代・佐土原の兵が共に宮崎を攻撃せむとする由を偵知し、これを邀撃するに決し、十八日兵を瓜生野に伏せて島津兵の來るを伺はせ突出して撃退させた。佐土原の兵はそれとは知らず瓜生野に向つた兵

が狼煙を擧ぐるを待つて出でむとしたるに時刻過ぎても擧がらないので待ち呆けてゐたが、遂に進出に決し、行進して宮崎城に逼つた。然るに佐土原兵も手癖が悪いと見えて宮崎の城下を掠奪した。重政は本丸を牛之助は二之丸を守つてゐたが、牛之助は佐土原兵の掠奪するを見て鐵砲の者百餘人に命じ一齊に射撃させた、この時瓜生野において敵を撃退した宮崎兵も歸り來り、佐土原兵が宮崎に取りかけてゐるのを見て、後詰の態度で旗を奈古山に樹てた。佐土原兵はこれを見て敵に退路を斷たれては大變と急ぎ佐土原に退却した。宮崎兵は敵の退くを見て追撃して大に戦ひ首級百八十を獲た。追撃の將は牛之助であつたが、彼は退却兵を撃破したゞけで得心ができません、なほも進むで遂に佐土原城下まで追窮した。時に日は暮れる、疲労は非常である、士卒思ひ々民家に亂入し酒よ飯よと呑み放題食ひ放題で民家を荒した。その間に月は出で、宛も白晝の如し、城兵は敵が民家を荒せるを偵知しつゝあつたが、月の出づるを待つて時分はよしと襲撃した。宮崎兵はこれを見て大に驚き周章狼狽、疲れ切つて起たざる足を引ずり々々敗走した。されど中には氣骨のあるものもあつて拂曉漫々橋において追撃兵を食ひ止め辛うじてこれを卻けた。その勇士は川崎大膳亮・稻澤八郎兵衛尉・堤五左衛門・稻田孫兵衛尉・成合丹後・中村清左衛門の六人であつた。この六人はいづれも槍を揮つて戦つたが、僅に六人で追ひ來る敵を退けたので、漫々橋の六本槍として永く傳稱された。これに反して大將の牛之助はその夜の中に宮崎へ逃げ歸つたので、爾來牛之助と呼ばれず、牝之助々々と稱され目ひき鼻ひき晒笑されたといふことである。

二〇三 日向方面 (四)

家康は十月二日に至るもまだ宮崎のことを知らず、書を祐兵に與へて、在阪の兵を國に還へし、降將秋月種長・高橋元種・相良頼房等と協議して薩摩に入らむことを命じた。祐兵は命のまゝに従つて在阪の六百五十人を歸した。この歸還兵が故國に歸着したのは同月二十日であつたが、彼等は折生迫に上陸するや、土兵二百餘人を募つて共に宮崎城に入つた。この前日如水からも重政に來書あり柳河鎮定の後薩摩に向ふべしとのことであつた。

在阪の兵が歸國したからとて別に大勢にどうかあるわけではない。元來が邊鄙のことゝて大兵も居らねば大戦もない。時々小迫り合ばかりして、時日を遷延するのみである。漫々橋の戦ひ以來、十日餘も戦ひはなく、同月晦日穆佐・倉岡の兵か千町に出て、清武の兵と鬪ひ、翌月三日には宮崎の兵が佐土原附近に放火し、それより又十七日間は戦鬪なく、廿日に至つて例の牝之助が穆佐城を襲ひ、その外廓を奪取したけれども、所詮は牝之助のことゆゑ、放棄して退却した。これより先十一日祐兵は大阪において病革まり、終に死去したが、その報聞もなく日向に達した。戦時のことゝて士氣沮喪の恐れあれば喪を發するを止めた。

小迫合は、どこまでも小迫合である。牛之助が穆佐を攻めて以來翌年二月までは、また戦鬪なく、廿五日に及むで穆佐の兵が中村を焼いたまで、その月も過ぎた。三月に入つて高岡・綾・本庄・八代・倉

岡・穆佐の守將東長寺に會合して、宮崎・清武の兩城を同時に攻撃せむと議したが、川田國鏡が反對したのでその議行はれず、さりとて何時までこのまゝでもをられないので、諸將は國鏡の態度疑ふべしとなして別に會議を開き、宮崎攻撃を決議した。そして十六日諸將おのゝ宮崎を指して兵を出したが侃世等の知るところとなつて、瓜生野に迎へ戦はれそれがために大敗し、いづれも穆佐に退却した。一方國鏡に在つては諸將が自分を疑へると聞いてそれを釋くため、清武を攻むべしとて兵四百を出して先づ長峰に放火した。ところがこの時も宮崎・清武の兩兵、迎戦して、國鏡を佐奈田山に撃退した。これ三月廿九日である。

かくてまた五月までは戦闘なくその月七日穆佐の兵清武を攻撃せむとして出動したが細江の守兵に撃退された。小迫合はかくの如くいよゝ小迫合になつてしまつたが、八日遂に島津の方より僧侶を使者にして和議を提出した。これ大局既に定まり、島津は家康に對して陳辯、罪を謝しつゝある最中であつたからであらう。こゝにおいて重政は島津の使者と船引に會見して、和を締した。

島津との和談も右の如くにして成り、八月にはまた祐慶が宮崎城を高橋元種に還附したので、日向方面はこゝに全く落着をつけた。

二〇四 福知山開城 (上)

丹波の福知山城は小野木公郷の居城であつた。公郷は田邊に細川幽齋を攻撃したが、それがため子

の忠興の怨むところとなつた。家康はそれを見て田邊の消息がまだ判然せぬ九月十八日に近江の八幡で忠興に曰つた、

「幽齋殿、田邊を持ちこたへ、お手柄とも何ともいひやうなし、さりながらその後如何なりゆきしや、絶へて消息なし、心もとなければ急ぎ貴方後詰せられよ」

忠興はこれを聞いて大に喜び、ついでに福知山・龜山の兩城をも攻めたしと願つた。福知山は前記の通り公郷の居城であり、また龜山は公郷と共に田邊攻城に加はつてをる前田茂勝の父の玄以の居城であるからである。家康は願ひ尤もなりとてこれを許した、忠興は子の興秋及弟興元と共にその日兵を率ゐて發し、翌十九日近江、山城の境なる追分に至つた。然るにその夕田邊からの使者に出會した。

「老公は勅を奉じて敵と和睦仕つたが、前田茂勝の迎へに任せ龜山に退かれたり、今夜あたり龜山に入城せらるべし」

といふのが使者の口上であつた。忠興はこれを聞いて進むで堅木原に至つたが、その時茂勝は家老二人を途中に遣はし忠興に曰はせた。

「某已むを得ず、田邊攻撃に加はりたるも、素より志關東に在り、既に歎を通じ置きたれば尊大人を龜山に迎へて本丸にお入れ申し上げ某は二の丸に退いてござる、今後のことは一に貴殿のお指圖に任す」

忠興は翌早天、馬堀村に至つたが、この時幽齋は肩輿に乗つて、三刀谷孝和と共に來り、次いで茂勝

も来つて福知山攻撃の先鋒を請うた。そこで忠興はこれを家康に報じて家康の下知を待ち、福知山のこと一に汝に委すとの命を得て廿二日、龜山城を收め、それからいよく福知山に向つた。

忠興が生野に至つた時、京の町人に蓮池某といふがあつて、福知山から駈けつけ、かねて知れる忠興の家來荒木元則に面會して、

「小野木殿は田邊より直に大阪に赴かれたり、福知山のことは、某に考へあり、留守の將士と謀つて城を開かせては如何に」

元則はそれを忠興に告げた。忠興は言下に曰つた。

「それは可し、公郷不在とあるからは、それを攻むるは義においても如何や、姑くこゝに駐つて蓮池が爲すところを見む」

かくて蓮池を福知山に還したが、その日家康から三成を捕へたとの書狀(一)が着した。その書意に曰ふ、江州の北部越前境で石田治部少輔を生捕つた、と田中兵部大輔から昨日申告があつた。貴方も定めし満足であらう。今日はこの地に護送の筈、早々お目にかけたいものだ。家康が刻峭の氣分、この寸言の中にも見られるではない歟。忠興はこれを見て、直に茂勝を伴うて大津に赴いた。

*

*

*

*

(一) 急度申候、江州北部越前境にて、石田治部少輔生捕候由、田中兵部大輔所より、昨日申來候、定而可爲御満足候、今日は此地へ可來候、早々懸御目度迄に候、恐々謹言

九月廿三日

丹後宰相殿

家

康

二〇五 福知山開城 (下)

忠興か茂勝を伴ふて大津に赴き家康に謁するや、家康は茂勝及び谷衛友・藤掛永勝・川勝秀氏の罪を宥し、これ等の將に命するに忠興に従つて福知山攻撃を以てした。

忠興は廿五日生野に歸來したが翌日姫路の城代の木下延俊が兵五百を率ゐて生野に來り、忠興の軍に合した。延俊は城主家定の子でかねて心を家康に寄せてゐたから伏見落城の頃より病と稱して姫路に引籠り、形勢を觀望してゐたのであつた。さきに致城の策を約して福知山に歸つた蓮池某は、この日報告して曰く、

「公郷、昨夜、福知山に歸られたれば、かねて約せる致城の策は實行できがたし」

忠興はこれを聞いて然らば城を攻むべしとて直に兵を部署した。その追手門に向ふ者を第一(谷衛友・藤掛永勝・川勝秀氏)第二(木下延俊)の兩隊とし、搦手に向ふ者を第三隊(忠興・忠隆・興秋・興元・松井新太郎・有吉與太郎・米田與七郎)とし、外に西南方より進ませるものとして荒木元則の別働隊を設け、なほ後繼隊として前田茂勝を控へさせた。その總數二千八百人。

公郷は大阪より歸城して斷然守城するに決し、大に戰備を整へ、以て寄手の至るを待つた。

石田三成を中心に

忠興は廿七日生野を發して福知山の附近に至り其城を、伏瞰するに便利な地を撰むで陣取つた。その間に第一隊先づ追手より逼り、第二隊もまたこれに次いだ。第三隊の忠興はこれを見て搦手に進み茂勝はこれに次いだ。別働隊の荒木もまた豫定どほり西南方から城に逼つた。公郷は籠城を決して守つてをるので、防備はナカナカ完全にしてある。忠興は城外を巡つてその防備の有様を視、急に落つべくもないと認めて急攻をせず、その由を家康に報じた。かくて一日を隔て、廿九日試戦して城中の景況を見むとて諸隊に命じ一齊に攻撃させた。ところが城兵は思ひの外なる強敵である。彼等は門を開いて出撃し、寄手を尻とも思はぬ振舞で、奮戦數時間に及び、遂に交綏した。忠興は試戦して案外なる城兵の力を視ていよいよ急攻の不利を悟り、仕寄を附けて己は一先づ田邊に至り、母を候して翌月二日福知山に歸つたが、なほ攻撃せずして仕寄を更め、柵を結び、飽くまで長圍の態度を取り、然る後公郷が田邊攻撃の時使用した大筒の遺棄してあつたを取寄せて、それを以て城中に撃ち込むこと十日に及むだ。しかも公郷には些の屈する色はない。忠興はそれを見ていさゝか挺擦の體であつたが數日の後家康から山岡景友を下して諭すところあつた。こゝにおいて公郷は遂に開城することゝなつた。公郷は近臣二臣二人と共に城を出たが、忠興の指圖で龜山に送られた。忠興は公郷を龜山に送つて後城を收めて大阪に上り、家康に公郷の罪を宥されむことを請うた。しかも家康はその請ひを容れなかつた。直に公郷に切腹を命ずと言ひ渡した。

二〇六 鳥取開城

宮部長熙といふが鳥取城にゐた。彼は家康の會津攻伐を聞いて兵三千を率ゐて東下したが、三成の舉兵に由つて先發を命ぜられて高虎・吉政等と共に濱松まで引返へした。この時若櫻の城主にして長熙の與力たる木下重賢及び垣屋光成がそこから脱して義軍に走り、以て大津の攻城に加はつた。長熙もまた心を義軍に寄せてをる。矢矧に至つた時そこより脱走せむとしたが、終に能はず、イヤ／＼ながら吉政と共に關ヶ原の決戦に従ひ、佐和山の攻撃にも加はつた。ところが逆軍大捷、大勢は己に決したので、長熙はこの上義軍に加擔でもあるまい、むしろ重賢・光成を捕へて家康に忠勤の證とせむものと播州の安岐といふところまで下つた。

家康は重賢等が脱走した時から長熙の態度に疑ひを挾むでゐたが安岐に下るに當つて何等告ぐるところがなかつたので、さては長熙奴叛きをつたはと龜井茲矩に命ずるに、急に鳥取城を收むべきを以てした。茲矩は仰せ畏まるとばかり因幡の用瀬に至つて先づ使を若櫻に遣はし、直に城を致すべきを勧め、難なく受取り、それから上吉方に至つてそこに駐屯し、用瀬の城主磯部兵部大輔を鳥取に遣はして留守の將伊吹三左衛門を諭させた。然るに三左衛門は將士と議して致城の延期を請うた。こは主人長熙の態度が判明しなかつたためである。

茲矩は城代の回答を聞いて直に城を攻めむとした、兵力不足で、攻むることができないので、使を

竹田の城主齋村廣道に遣はして應援を請うた。廣道はもと義軍に屬し、田邊を攻めたものであるが、關ヶ原の敗戦を聞いて居城に歸つてゐたのである。故に大勢已に決した今日奈何にすべきかと思ひ煩つてゐたをりからとて直に茲矩の請求に應じて出兵した、こは前罪を償はむとしたものである。

城中では伊吹三左衛門・土肥一元が本丸を守り、津山與助十神口を守り宮部半左衛門・長島某中坂口を守り、多賢三郎兵衛下之丸を守つた。

茲矩は十月五日大日谷口より進み廣道は湯町口に向つた。城兵は兩方より進み來る敵をそれ／＼兵を出して防いだ終に利あらずして城中に退いた。ところが寄手は追撃して市中に亂入し、町家に放火し、掠奪し、亂暴狼藉を働いた下之丸の多賀はこれを見て大いに怒り長槍を揮つて突出し、從兵七八人と共に敵中を縦横無盡に荒れ廻つて奮戦敢闘、敵を撃退すること數回、遂に廣道の手のものを撃破した。伊吹もこれを見て本丸より下り來り、諸門を固めた。この時三左衛門の妻は健氣にも自ら糧食を頒つたので、異彩を放つたが婦女子までそれ位の働きをしたので、士氣大に振うたが、やがて日が暮たので交綏した。

茲矩は城兵の戰鬪振を見て攻陥容易ならずとなし、長熙の愛せる大呂村の田中彦左衛門といふものを呼び寄せ、これを城中に遣はして、長熙は既に死むだが、諸士は誰のためにも働くのであるか、武名のためならば茲矩誓つてこれを證明するから大概にして城を開いてはどうかと口はせた。長熙の死むだといふは茲矩の詭言であるが、城將はそれとは察せず、主人死したる上は何時まで籠城でもあるまい

いと衆議一決城を致して鹿野に退いた。

茲矩は一片の詭言を以て鳥取城を收め、それより大阪に上つて委曲復命し、廣道の罪をも宥さむことを請うた。家康は茲矩が町家を焚掠したといふことを聞いたので茲矩を譴めた。茲矩は驚いてそれは廣道のしたことであると曰つた。家康は大概のものは難癖をつけて片付けてしまはうと思つたところであるから、それを聞くや大に怒れる體を見せ、廣道を切腹させて城は山名豊國等に收めさせた。因に重賢・光成はそれ／＼潜伏してゐたが捜査が嚴しいので得たへず、重賢は天王寺に、光成は高野山においてそれ／＼切腹した。また長熙に至つては翌年九月盛岡の南部に責付した。

二〇七 立花宗茂 (一)

太閤が西では宗茂東では忠勝と褒めちぎつた程に宗茂は稀なる勇將であつた。彼は初め筑後柳川の居城に在つたが、大阪よりの飛檄を手にするや、これ確に義舉であると清正の留むるをも肯かず二千五百の兵を率ゐて大阪に上つた。途中において家康の來書に接し、その文句に柳川に留まつて兵を出さな、夷平の後肥前か筑後を賞賜するとあるを見るや、憤然としてその書を裂いて海に投じた。彼はかくして大阪着後瀬田に出で、大津に引返し、大津城を攻め取つてこれを守つたのであつたが、間もなく關ヶ原の敗を聞いて兵を收めて京都に入つた。これ九月十七日である。

宗茂が京都に入つたは木下家定を勸めて大阪に携行せむ爲めであつた。然るに家定は宗茂の入洛を

見て、宗茂が自分を攻むるため入浴したものと誤解し、弓よ鐵砲よ、馬よ人よと上を下へのゴツタ返しをなし、家定と共に在った北政所は喫驚仰天、徒歩跣足で禁中へ逃げ込む。かゝる次第で諺言はたちまち四方に擴がり京中は大騒動となつた。宗茂においては木下攻撃どころか家定と共に大阪へ行かむとの意中であつたので、早速その旨を以て使者を遣はしたが、上記の次第で家定等は狼狽、使者の往返はために遅延する、漸くにして使者の復命があつたが家定は勸告に應ぜぬとのことである、宗茂はそれを聞いて、

「さもあらむとかねて思ひ設けたり。手元ばかりを見て先の考なく、今更狼狽、恐るゝことの口惜さよ」

と叫び、それより大阪に到つて天満橋に兵を留め、使を狼中に遣はして輝元・長盛に、

「大津を引拂ひ、これまで歸陣仕つたり、御籠城においては、一方の持口承はらむ、御返答を待つて入城したし」

と曰はせた。ところがこゝでも狼狽の體、籠城どころの話でない。いづれも降參の用意最中、やがて使者に返答したのは、いづれ評議をした上で、これより申入るゝといふのであつた、宗茂はまたあざ笑ひ、

「さあらむとこそかねて思つた。輝元定めし思ひ當つたことであらう、今となりて評議せむとは殊の外なる遲智慧かな、どうも成るまじきことなれば、道の廣き間に歸城せむ、本國にて兎も角も成

るべし」

と曰つて、更に毛利秀包に、共に歸國して兩城合従して逆軍を拒ぎ一快戦をなさうではないかと誘うたがこれもまた聽かれなかつた。時に家老等は相議して曰つた。

「豊家の爲めに盡さるゝだけは盡したり、この上は家康と和睦して然るべし」
と宗茂は爲さむとするところ、みな成らず、その矢先に家老等の決議があつたので、それを容れ、家康に陳謝をさするため、丹親次を大阪に留め、老母を奉じて歸途に就いた。歸途は島津惟新と船を並べたが、惟新が共に薩摩に入つて一戦しやうではないかと勸むるや、

「左近が島津殿を頼つて薩摩まで逃げたなど、人の口の端に上りては口惜し」
と答へて應ぜず、日向泊りで惟新に別れ、豊後の府内に上陸し、山越しに十月九日柳川へ歸省した。

二〇八 立花宗茂 (二)

宗茂がまだ歸途に在るの時であつた。黒田如水は清正と共に宗茂の不在に乗じて柳川を攻陥せむと欲し、その旨を清正に言ひ遣つた。清正はその時丁度宇土城攻撃中であつたので、柳川攻城の儀は承知した、たとへ鍋島直茂が立花に加勢しやうとも、拙者が攻城するにおいては、さまでの苦心もいらざることである。宇土方面の戦ひがまだ終らぬから、終り次第、柳川に向ふであらうが、その時にはこの方から相談いたすから安心ありたい、と返書した。かくて廿九日に至つて清正は一書(一)を

佐賀の鍋島直茂に寄せ、關ヶ原決戦は、毛利輝元方の敗軍となつたので、輝元は降を請うて大阪城を退去したさうだと報告があつた。事態ここに至つて、貴方の分別は、いかがである。前々から言つてあるやうに分別次第でいかやうとも周旋するから、貴方の意中を打ち明けよ。立花宗茂が大阪表から逃げ歸りつゝあるとのこと、さすれば然るべきところまで、或は途中などへも、手勢を押し出すに依つては、それでも忠節は見られるであらうと告げた。

これより先、直茂は家康が東下の時、從軍を望むで許されず、家康に諭されて居城に歸つた。そして子の勝茂に龍造寺高房を添へて東行させたが、勝茂の東行した時は最早三成が兵を擧げた後であつたので、愛知川で石田正澄に扼止され、次いで輝元秀家及び奉行等の使者に接しそれに要せられて大阪に引返し、更に伏見・安濃津等の攻城に差し向けられた。勝茂はかくして兩軍に屬してゐたが、安濃津攻落の後なほ伊勢に在つて關ヶ原の大敗を聞き、急ぎ大阪に還つた。そして由來の情を具陳して井伊直政・黒田長政等を頼むで謝罪し九月廿五日には家康に伏見で謁見した。その時家康は勝茂に命ずるに直に歸國して宗茂を伐ち以て罪を償ふべきを以てした。こゝにおいて勝茂は大阪を發して西下した。これ九月晦日である。

清正が直茂に書を寄せたのは、まだ上方における勝茂が右の如き事情になつてゐることを知らないためであつた。直茂もまたなほ當時は忤が奉行等に要せられて、義軍に屬してゐること、關ヶ原において義軍が大敗したとだけしか知らなかつた。残に直茂は勝茂が關ヶ原で戦死をしたものと思ひ、且つ家康は必ず西下し來るに相違ないと考へ、今はこれまでなりとて鍋島茂里・中野神右衛門に命じて防戦の準備に取かゝつてゐた。然るに間もなく死むだと思つた勝茂が歸來したので柳川攻撃と決し十月十四日父子共に佐賀を發した。

(一) 態申入候、天下之様子、關ヶ原表之合戦、輝元方敗軍に付而、被成懇望、大坂下城之由、申來候、然は貴殿御分別如何様に候哉、從最前如申候、御分別に依而、如何様共、馳走可申候間、可示預候、柳川侍從落下之由、左様之所迄、路次等へも被出人數、被押においては可爲御忠節候哉、委くは權右衛門可申達候、恐

々謹言

九月廿四日

加主 清正

鍋 加 様

人々御中

二〇九 立花宗茂 (三)

直茂は筑後川の上流なる住吉を徒歩して大善寺原に至り、そこより使を久留米に遣はして致城を勸告した。この日如水も豊前よりこの方面に出動したので、致城の勸告は、直茂と共にしたのであつた。久留米は毛利秀包の居城で、秀包は義軍に屬して大阪に在つたので當時は桂入道快友等が留守してゐる

石田三成を中心に

たが、何等一言の異議もいはず即時開城した、こはけだしさきに秀包が上阪するに際し、義軍不利に陥り、當城もまた四方より敵の攻め来るあらば、吾妻子を殺し、汝等もまた城を枕に討死せよ、但しもしも如水が來らば、これに抵抗せず、慎むで、彼が指圖に従へと命じてあつたからである。直茂は如水と共に毛利の質子を取り、城を收め、直茂は更に進むで城島に至り大善寺附近及び犬塚原・早戸崎等に隊を出し、また瀬高附近に放火し、それより使を柳川に遣はし開戦を通じた。これ十月十七日であつたが、この前日清正と宗茂と書信(1)(2)の交換があつた。それは清正の好意に發したのである。清正は宗茂と朝鮮征伐以來懇親にしてをるところから何とかして宗茂を救はむものと思つてゐた故に先づ講和を勧告し、また大津における開城周旋のことなどを聞いてそれを以て家康に分疏せむとしたのである。双方交換の書信の文意は左の如くである。

今度上方の出軍から無事に歸城され芽出度いことである。貴方のことは朝鮮陣以來芳志にあづかつてをるので、少しも忘れずにをる。

今度の出勢は、もとより石田方に一味したことではなく、秀頼公の命令と申して毛利秀元から催促されたので、君命もだしがたく思はれて上洛されたのであらうが、それは尤も至極のことである。大津城を攻めて京極高次を下したのも、これまた出動の上は、さうされるのが當然である。大阪と關東との和議は大方とのうたさうで、今日しらせの飛脚があつた。この上は貴方においても、關東に對して異議を申し立つべきではない。

鍋島勝茂も上方へ出動したが、石田方が敗軍したので肥前に歸つたわけである。

貴方の歸城前から鍋島直茂が筑後表へ出勢する由、聞いてをる。黒田如水も、豊後方面の大友の一揆を討伐して、同地方が半穩になつたので、筑後方面へ、きつと出動するであらうが、その旨我等へも申し越し、出軍を促して來た。定めて直茂にもその由を告げて打合すことであらう。但し直茂が貴地方へ出動しても大したことはあるまい。

拙者は宇土方面に軍政を布いてをるので、急には行けないと如水にも返詞をしておいたが、たとへ拙者は貴地方へ出勢することあるとも神明も照覽あれ、貴方と戦ふ存意はない。今日の事態であるから關東へ和談の斡旋は熱意をこめて力の及ぶだけはするであらう。すなはち關東へ、貴方が石田方に一味の考へのなかつたこと、大津を攻め下したは已むを得ない行動であつたこと、京極と和議成立した上は關東に對して異心のないこと等を申し遣つたが、その結果、柳川表の處置を一任されたから、京極との和解の次第を言ひ越されたい。

黒田・鍋島などが貴方の領内に攻め入るとも、相手にならず放任しておくがよい。如水の出動は仔細のあること、又直茂はその罪所詮は遁れがたいので、貴地方へ出勢するのであるが、こは近頃以て卑怯の振舞である。言ふまでもないことだが、今度のことについては、拙者の存命するかぎり、身に代へて貴方のために取持するから、決して早まつたことをしないやうにされたい。

といふが、清正ので、

多忙の中を、細書に預かつて忝けない。久しきなじみの間がらとて、貴意は忘られない。懇意のほどは、禮を以て述べ盡しがたい。來諭のことは、少しもウソはないこと、信ずる。けれども我等に在つては今回のことは今日突如として起つたこと、は思はぬ。かねてからかうなること、思つてゐた。秀元に對しては極力諫言したことであつた。いつかの機會に同人から聞かれたい。言はるゝ如く大阪と關東とが平和になつた以上は、今更拙者において少しも異心はない。それは貴方の書信の通りである。意中は筆紙に盡しがたいから、近日に使者を遣はして委曲、申述ぶるであらう。といふが宗茂のである。

直茂に對して、柳川攻撃を促しながら、宗茂には直茂を卑怯呼ばりしてをるあたり、いかに外交手段とはいへ、清正もナカ／＼隅にはおけない。まんざら愚直一遍でもない。それに引きかへ、宗茂の書意の堂々たる、實に氣持のよいものである。快男兒の面目躍々如としてをるではない歟。

(1) 今度上方御出勢、無御恙、御歸陣目出度候、貴様御事、高麗以來預御芳志候儀、少しも失念不仕候、今度之御出勢、本より逆徒一味にては無之、只若君様御意と申、秀元之催促に付而之様に候間、難默止思召御上洛、尤に候、大津え被相働、京極下城之儀、是亦御出勢之上は、尤左様に可被成事に候、大阪と關東御和談、大方相調候段、今日飛脚到來仕候、此上は貴様御事も、關東に異儀可被想召所に無御座候、信濃守(勝茂)儀も、上方へ出勢仕候所に、逆徒敗軍に付、肥前え罷下候儀、又關東へ參陣も、誰を頼み可申様も無之

本願寺を頼、關東御味方候得は、其通りに相叶候に付、先達申越候、貴様御歸城前より加賀守(眞茂)儀、筑後表へ勢を出し申之由、及承候、黒田如水事も、大友一揆討果し候而、無事故、豊後國中靜謐申候付、其表え急度出勢可仕候間、我等えも其旨相心得、早々出陣可仕候由、申越候、定而加賀守へも、其段可申談と存候、加賀守其表へ罷出候共、爲替儀も有御座間敷候、拙者儀は宇土表之儀取締り候に付其表へ罷出候儀、急に成申間敷と申遣候、拙者事は其元え向ひ候共、矢弓八幡も照覽あれ、合戦仕覚悟に無御座候、此節之儀に候間、關東へ御無事之取扱ひ心之及丈け可仕候、則關東へ飛脚を以而貴様御事、逆徒に少しも御一味無之に、若君様(秀頼)御意をかり申遣候催促に任せ御上洛有之、大津を被敗候儀は、出陣之上とかく不及是非、被相働たるにて候、是非京極と扱と被成候上は、關東に至ても、御別心可有之所は無御座候、貴様御事、數年御入魂に申承り、御心底存分たる儀に候間、我等手前より申談候は、柳川表之取扱之儀、被仰付様にと申越候間、京極方と和談之子細、慥成儀、可被仰越候、黒田鍋島杯、御領内へ相働候共御かまひなく可被召置候如水事は、尤左様可有儀に候、加賀守儀、身之科之遁れ道なき故、其表へ出陣之望、近頃以て比興に存候、不及申候得共、今度之儀に於ては、拙者存命にさへ有之候は、身上を抛ち、隨分取持可申候間、少しも聊か成御分別等、御無用に可被成候、右之趣爲可申述、如斯御座候、恐惶謹言

(2) 御事多所、思召寄、預細書、忝存候、久敷き御なじみ込、思召不被忘、御懇意、殊以御禮難申述候、左様に被仰聞候段々、少しも御虚言可有之儀と不存候、然共、我等は只今出來之珍事と不存候、兼而か様に有御座べく存候、秀元えも心之及丈け、諫言申候、時宜を以、御聞可被成候如仰、大阪關東御別儀無御座候上

は、今更拙方、少しも別心無御座候、御紙面之通に候、近日自是以使者、委細可申述候心事難成細書候間、早々如此御座候、恐惶謹言

(此書二通とも月日署名なく、淺川聞書に掲ぐるものと立花遺香に載するものと其の用字等にも相違あり但し其の文意に於ては二者共に同じきが故に、今は淺川聞書より抜いた)

二一〇 立花宗茂 (四)

宗茂と清正との間には前記の如き文書の交換があつて和議の進行中であつたが、直茂の兵を率ゐて來り牒したはその翌日であつた。それ故宗茂は將士を召集して軍事會議を開催し、自ら出で、直茂と決戦せむと主張したけれども、家老の面々が敢てこれを止め、親次は大阪で謝罪中であり、此方でもまた清正と交渉中故しばらく戦ひを見合せて和議の妨碍とならぬやうせられたし、たゞし守備兵はそれぐ派遣し、もしも敵が來り襲はゞその時はこれを防禦する位の程度で忍ばれたまへ、と諫めたので宗茂は心ならずもそれに従つた。

然るに翌日は早くも鍋島勢と衝突した。それは立花吉右衛門が城島を氣遣つて兵を率ゐて歸つたところ、城兵は柳川に退却してあらず、鍋島勢は目の先にをるといふ有様であつたので、吉右衛門が足輕を差向けて挑戦したからであつた。もつともこの戦闘は鍋島勢が二十餘人ばかり瘡されたゞけで終つたから太した衝突ではなかつたが、こゝに江上村の合戦と稱する、比較的大戦闘がその翌廿日に開始された。立花にその人ありと知られた小野鎮幸はこの戦ひにおいて萬死に一生を得て退いたが、途中、人に會ふて、

「先手の輩、軍法を破り、卒爾の働きをなし、この有様となりたり、我等今年まで六十七個所の疵を負ひたれども、未だ曾てかゝる痛手を蒙りたることあらず」

と曰つた。この戦ひ、立花勢の死傷三百餘、鍋島勢のは二百餘であつたといふ、以てかなりの激戦であつたことが推想される。宗茂はこれを聞いて大いに怒り、その夜自ら出で、鍋島の營を襲はむとしたが、家老等の諫めに合うて中止した。江上の戦ひのあつた翌日も蒲池方面で小戦闘があつた、それは宗茂が十時但馬等を蒲池に出張させ、その地方を守らせたのを、鍋島勢が見て挑戦したからであつた。たゞしこの戦闘は立花の方の有利に終つた。

二一一 立花宗茂 (五)

江上の戦ひのあつてから六日目であつた。清正は兵を率ゐて瀬高に來た。そして如水・直茂の兩將と共に宗茂の諭降を議した。兩將固より異存のある筈はない。直に清正に同意し、先づ如水から立花の老臣立花堅賀を招くこととなり、家人の時枝平太夫といふ者を使者にして一書(1)を堅賀に與へた。その書意は今夕貴方一人清正の營に來られたし、といふのであつた。

堅賀は如水の書に接し、日の暮るゝを待つて瀬高に行き、清正の營を訪うた。座には清正と如水と

がをる。兩將は曰つた。

「立花殿、城を出で、我等と共に薩摩へ發向あるにおいては、内府公その舊罪を問はざるべし。御邊宜しく計らはれよ」

堅賀は旨を聞いて直に柳川に歸り宗茂及び老臣の面々に清正・如水兩將の内意を物語り、形勢事情を説いて和談の利なるを勧めた。この時大阪に遣して置いた丹親次も本多正信父子に依つて家康に降り家康はそれを許可したので喜むで歸國してゐたが、従つて頻りに和談の利を説いた。宗茂は自信の將、名譽を重むるの士である、ナカナカ人に頭を下けることなど出来る男ではないが、堅賀といひ、其次といひ、その他の老臣みな異口同音に諫むるので、それではとて大村善長を清正の營に遣はし、

「この上は城を渡し、薩州へ出馬申すべし、さりながら、我等を偽りて大友のやうに虜となし、耻辱を與へらるべき謀計なるにおいては、城を枕に一戦すべし」

と申入れた。清正はその名の如く正直な男である、宗茂を欺くなどの料簡は毫もない、直にその旨の誓書を認めて善長に與へた。善長は誓書を携へて急ぎ歸り、それを宗茂に提出する、宗茂は披見して大に悦び、さらばとて兵を率ゐて城を出た。こゝにおいて清正は城を受取り、加藤美作にこれを守らせ、始終の事は如水がこれを書狀に認めて家康に報告する、直成父子も最早用なき身となつたので佐賀に還つた。

城を出た宗茂は一先づ清正の營に至り、清正に對面してそれより清正に従つて肥後に入った。この

間において宗茂は親次を再び大阪に上せ江上村の戦ひに就いて分疏させた。

かれこれする間に月は經つて十一月に入つたが、清正はいよゝ島津を討伐せむとて如水・直茂・宗茂等を肥後に會し、一般方略を議した。然るに時しも家康よりの書狀(2)が如水宛に到着した。それは「柳川より質を取り、宗茂を従へて薩摩に攻め入るべく、清正・直茂の兩人と協議中とのことであるが時まさに寒中に及むでをるから、先づ年内は其方在國したがよからう。」といふのであつた。續いて直政からも忠勝からも如水宛の書があつた、何れも家康の旨を受けてのことであるから家康同様の書意が認めてある、一口にいへば、年内は寒いから薩摩入を見合せよといふのである。薩摩は南國である。寒氣に及ぶからおかしいが、そんなことを平氣でいつて如水の出勢を止むるところに古狸の妙智が働いてをるのである。けだし如水の火事泥を看破してをるからである、如水を首め直茂等は薩摩入の協議を中止しておのゝその邑に歸つた。宗茂もまたそれから肥後の高瀬に假寓することゝなつたが清正はそれに新第を造つて厚く遇した。

*

*

*

*

(1) 口上之覺

一 今夕彌々加主所へ、貴殿計御出可有事

一 今度御父子御働御心遣催感涙候、吉右手疵如何候哉、承度事

一 樽一、是は古酒にて候、疵にも能と申候間、進之事右之外、使時枝平大夫可申上事

石田三成を中心に

(此の文日付二十日とあり、如水の使者を發せるは二十五日なり、恐らくは後人筆寫の際五の字を脱したるものであらう)

(2) 度々注進旨候、得其意候、柳河儀質物請取立花召連、到薩摩表、加主計、鍋島加賀守相談、被相働候由及寒氣候間、先年内は其元被在付候様尤候、猶井伊兵部少輔可申候、恐々謹言

十一月十二日

家康

黒田如水軒

二二二 浦戸開城

長曾我部盛親は關ヶ原の決戦に味方の敗を聞く間もなく栗原山を下り、徳永・横井の兵に驅り立てられつゝ上野・堺を経て大阪に出たが、家人の立石助兵衛・横山新兵衛といふ者を近づけ、

「我等今度一向に内府の味方すべきを、大老奉行等、秀頼公の御爲なりとて據なく催促するにより心ならずも、内府の御敵となりたり、この旨を井伊兵部に申すべし」と曰つて、直政に就いて陳謝させるやう命じ、そのまゝ土佐の浦戸に歸つた。

立石・横山の兩人は主人の命を全うすべく、直政に就いて種々陳辯し、直政はそれを家康に言上したが、家康は直政の家人川手内記梶原源右衛門の兩人を土佐に遣はし、盛親に上阪して謝罪すべく諷させた。

せた。

盛親は川手等の言を聞いて慊らず思ひ、むしろ城に據つて家康の命を拒ばまむと決し、將士を會してその守備を議した。家老の面々はみな曰つた、

「兵糧には事缺がざれども、薪炭に乏しければ、立籠もる以上は佐川の要害に據るに越してのことなし」

盛親はこれを聞いた時、また考へ直して前の決心を翻し、

「上方勢、みな既に敗れた以上大軍を引受てこゝに立籠もるとも益なし、直政の言葉に任せて大阪に赴くべし」

かくて盛親は船を命じてまさに發せむとするに及び近臣の久武親直より

「津野孫次郎(親忠)殿は藤堂と無二の親友なれば、高虎の計らひにてこの際孫次郎殿が土佐の半國を知らたまふこと疑ひなし、御考慮あれかし」

と曰はれ、大に迷ふた結果、遂に親忠を自裁させた。親忠は盛親の實兄なれども、出でて津野の家を繼げるものであつた。

盛親は親忠を殺して後、十月初め、浦戸を發して、その月十二日大阪に着し、天満の學校寺に宿を取り、それより直政の慰諭に依つて伏見の邸に入つた。然るに親忠を殺した一件が高虎に依つて家康の耳に入つたので、家康は大に怒り、盛親の封を褫ひ、直政に浦戸を收むべしと命じた。そこで盛親

は已むなく、城を致すこととなり、直政の家人鈴木重好・松井武太夫等に己れの家人を添えて本國に遣はし、老臣等に城の明渡しを命じた。これ十月十七日である。

土佐においては主人の首尾や如何にと一日千秋の思ひで消息を待つてゐたので、盛親が封を褫はれ收城の使者が來るといふことの知れ渡るや、家中一黨大騒ぎとなり一領具足の小身者はみな議して盛親の弟の右近を後嗣として本領の安堵を願はむと決したが、老臣等は後難を恐れてこれを聽かず、これにおいて年寄方と家中方の二派に分れて相争ふに至つた。その間に土着の士が土寇を嘯集し、竹田惣左衛門といふを推して首領となし、重好等を海上に拒むだ、その人数は一萬餘で、船三百餘艘に取り乗つてゐた。重好等は力を盡して説諭し辛うじて上陸したが、土寇は重好等を雪溪寺に迎へ、武力を以てこれを包圍し、土佐半國を興ふればよし、然らざれば城は斷じて渡されぬと強要した。重好等固よりこれを獨斷すべき性質のものでない、一應大阪に問合すから姑く待たれよとて委細を大阪に具申した。その往復に五十餘日を費したが、その間に土寇は城に入つてこれを守備し、家老の桑名彌次兵衛を誘うた。彌次兵衛は土寇の態度に反対であつたが伴はつてこれに賛成し、直に入城して謀計を以て惣左衛門等以下を追ひ出したが、土寇はこれを見て大に怒り、城を圍むで攻撃した。城外でもまた大に戦つた。されど土寇の悲しさ戦闘となると到底精兵の敵でない。十一月晦日と翌十二月朔日の二日の戦ひで土寇は二百七十餘人も殺された。そして五日には惣左衛門は腹を屠つてしまつた。かゝれば指麾者を失つた群集はたちまち散じた。家老等はこれを見るや一刻の猶豫の時にあらずとて、即刻

城を重好等に交附した。

二二三 行長捕はる

以上白石より浦戸に至るまでの諸城の攻陥開城に由つて關ヶ原本戦の前後における各地の戦闘は終りを告げた。これから賞罰の次第を略記して本物語りの大團圓とせやう。

關ヶ原の本戦における義軍の首領は秀家といひ、三成といひ、行長といひ、惠瓊といひ、みな遁竄した。中に在つて小西は逸早く捕へられた。小西の捕へられたことに就いて種々の説があるが「板坂卜齋覺書」に據れば關ヶ原の庄屋が捕へたといふことである。即ち一日庄屋の主人が卜齋に物語つたところを取つて記せば、近所の山でのことであつた。

「そこなる人來れ」

といふ者がある。庄屋これを見て、

「いらざる拙者へ御用と仰らるゝよりは早く何方へなりとも落ちたまへ」

と曰へば、

「是非とも近く來れよ」

といふ、敢て、

「いらざる御事」

石田三成を中心に

と曰へば、

「きつと近くへ参れ、頼みなきことがある」

といふ、そこで庄屋は已むなく、近づいて、

「何の御用でござるか」

と問へば、

「我れは小西攝津守である、内府へ連れ行き、褒美を取れよ」

といふのである。庄屋は行長と聞いて驚いた、かつは情を知つた男と見えて、

「沙汰の限り勿體なきこととござる、少しなりとも早く落ちさせたまへ」

と曰ふ。行長は既に覺悟してをると見え、

「自害するは易きことながら、我れは貴利支丹を信ずるもの、貴利支丹の法には自害はせぬものとあり心に任せ難し」

と曰つて、庄屋の搦め捕つて伴れ行かむことを望むだ。情ある庄屋も相手が覺悟の前であるので、その希望に任すべしとして、

「さらば御供申すべし」

と一旦、我が家に伴れ來り、それから家康の本陣に伴れ行かむとしたが、もしも途中で奪ひ取らるゝことでもあつては大變と先づ竹中重門までその由を訴へ出た。重門の家老の某は急ぎ庄屋の宅に來

た。庄屋は行長の前で、家老に行長が希望の次第を語つた。そこで重門の家老と庄屋とは行長を護して草津なる家康の陣營に送つた。家康はそれを聞いて大いに喜び、重門に朱印狀を與へてその功を賞し、行長は村越茂助の旅宿に入れて監視させた。これ實に九月十九日のことである。

行長を捕へたことに就いては異説多けれども、捕へられた場所の糟賀部なること、捕へしもの、相川村の里正林藏主といふものなること、は大概一致する。よつて惟ふに叙上の關ヶ原の庄屋なる者は多分林藏主であり、また近所の山といふのも糟賀部のことではあるまいか。

二二四 三成捕はる (上)

三成は古橋村の與次郎太夫が情けで病をそこに養ふてゐたが僅かに一兩日の後村人の探知するところとなり、危険はまた刻々に迫つて來た。村の又左衛門といふ者、與次郎太夫を訪うて曰つた。

「聞けば石田殿を隠し置ける由、田中兵部殿、昨日、井口まで御越しあつてこの邊、嚴しく穿鑿中なり、いかに隠し置くとも顯はれてお咎めにあはむこと必定ぞ、心せられよ」

與次郎太夫は、固よりいつかは發覺と覺悟してゐたが、少しも驚かない、素知らぬ振りしてイ、加減な挨拶で、又左衛門を追ひ返した。

三成は物蔭で始終の様子を耳にしてゐたが、又左衛門が歸り去るや否や、與次郎太夫を呼び寄せ

「其方が懇志はさることながら運命は既に極まつた。一命の置所なし、この上は田中が方へ注進して我等を引渡せよ」

と曰つた。與次郎太夫はこれ聞き涙を流して、

「お情なき仰せかな、何とて殿様を田中へ渡し参らすべきや、こゝより何方へなりとも落させたまへ」

三成は押返して曰つた。

「其方申すところ、祝着なれども我等は煩ひ重ければ、僅の歩行もなり難し、とかくして搜し出されては、必ず其方が身の爲めにも悪く、我等も覺悟なきやうなれば、速かに田中に告げ知らせよ」
與次郎太夫は泣く泣く田中兵部へ訟へた。これより先、家康は關ヶ原に大勝を博したが、秀家・三成・行長・惠瓊等の敵將を捕ふることが出来なかつたので、速かにこれを逮捕しなければならずと、十八日田中兵部少輔吉政を永原に召して捜索逮捕のことゝ命じ、同時に他の偵吏に、惠瓊を毛利の隊中に物色させた。かゝれば吉政は井口村に出張して三成等の潜伏所を捜査しつゝあつたが、與次郎太夫の訴へを聽いて大に悦び、家人の野村傳左衛門等を召捕に遣はした。

三成は傳左衛門等の來たるを見るや、

「石田木工は如何なる體になりたるや」

これは居城佐和山のその後の様子を知らむとするものである。傳左衛門は佐和山の落城、木工頭等

が三成及び自分等の妻子を殺して死むだことなどを悉しく告げた。三成はそれを聞いて、

「ザツと濟んだ」

と曰ひ、更に傳左衛門に曰ふ、

「我等もかやうに落ち行く仔細はないが、大阪の城へ何卒して入らば、今一度かやうに催す可きを……」

三成はかく曰つて、乗物に乗せられ、井口村に送られた。吉政は途中までこれを出迎へて三成に對面し、

「貴殿、この度、一方の將となり四國九州の諸將を手付け、勝負を争ひしこと、誠に末代の聞えなるべし、およそ合戦の勝敗は、古今珍らしからず、十五日の戦に負けたまひ、御謀忽ち空しくなるとも、今は御後悔を止めらるべし」

と懇勸に挨拶した。三成はこれを聞いて、打ち解けたる態度で、

「事新らしきやうなれども、我等は太閤の重恩を受けたるもの故秀頼公の御爲めを計り、秀家・景勝・輝元以下と相談して、天下の安危を計るといへども、一戦に利を失ひ、敵に頭を擡けさること言語に絶へて無念である、さりながらかくなり果つるもみな報恩の爲めと思へば、さまでの後悔はなし」

と曰ひ、帯べる脇差を手にし、

「今日まで身を離さず秘藏せし脇差なり、先年太閤より給はりたる切及貞宗の名刀なれば記念に進ず」

とて吉政に授けた。三成は曾て盛時において吉政を田兵々々と呼びすてにしてゐたが、この時もまた依然、田兵と呼びすてにして少しも屈する氣色はなかつたといふことである。

二二五 三成捕はる (下)

吉政は三成との對面を終るや三成を伴うて井口村に歸り、一農家を三成の宿に充て、そこに病を養はせた。吉政は大切な囚人として馳走人を附けて懇に饗應したが、三成は

「一刻も早く刑戮にあはむ」

と曰つて食事も取らうとしない。馳走人は慰めつゝ曰つた。

「御志は理なれども、兵部の心得としてはその沙汰には及び難し、それまでにはなほ餘日もあることなるべし、御食事を聞き召し御氣力を補ひたまうて御最期の嗜みを、専ら御心に懸けらるべし」三成これを聞いて納得顔、

「さらばこの程來痢病を煩ひをれば葦雜炊といふ物をたまはりたし」

馳走人は極めて易きことであるとして、早速葦雜炊をこしらへて與へた。吉政はなほ三成の病を氣遣ひ醫師を附して藥を勧めたが、三成は、

「この身になりては、藥を服用すべきにあらず、田兵とも覚えぬことを承はるものかな」と曰つて、これまた一向に服さうとしない。吉政は、

「仰は然ることなれども、暫く御病苦を安めむためなれば、藥を召さるべし」

と強めて勧めた。三成はさらばとて藥を取り、二十日までは井口村に保養した。

吉政は三成の病の少しく癒ゆるを見て、廿一日井口村を立つて大津に護送し、廿三日の晩大津なる家康の陣營に着した。家康はこれを聞いて大いに喜び、直に三成を本多正純に託し、嚴重に監視を命じた。

家康はまた三成の病めるを聞いて醫師を附し、小袖を與へ、その夜、正純に命じて三成が擧兵の始末を聽かせた、正純は三成の前に出で、問うた、

「秀頼公御幼稚なれば、大老奉行相計り、天下靜謐なるやうにと御心を盡さるべきに、さはなくして却つて益なき兵亂を起し、ただ一戦に利を失はれたるは、愚痴なる者の計らひに似たり、この張本人は、誰殿にて、如何なる御思慮ありてにや」

隨分皮肉な問ひ方である。三成は固より正純など眼中に在るものでない。昂然として、

「其方陪臣なれば、井の中の蛙も同様、大海を知らぬ類にて、天下の安危を計るなどは、覺悟もなかるべきに、この企ての始終を思案して、分明に申聞けらるゝ趣き、この方の及ばぬ武略なり」と皮肉の指平返しをくれて更に、

「秀家・景勝・輝元を始め、徳善院・右衛門尉（長盛）大藏大輔（正家）に至るまで同心なかりしを我等頼りに諫めてこの亂を起したるものにして、糺明さるゝまでもなく張本は我れ一人なり。この上は人々の罪科を宥められ我等が首を刎ねらるゝやう、内府へ申されよ、かくいへば一向謀を知らず大事を企てたるやうなれども、既に合戦の時至りて或は裏斬をなし、或は節を失ふ輩ありたれば、打勝つべきやう更になし、若し彼輩、兼約を守り、槍先を並べて突懸らば、御邊達が武略も徒らになりて恐らくは敗北せられることなるべし。然るを引かへて利を失ひ今囚人となりて御邊達が手に渡りたれば、淺ましく負を取りたるやう批判せらるゝも理なり。去りながら裏斬の輩あつて味方あらゝゝになるまでも、秀家を始め、大谷・島津・我等は陣列を亂さず、馳せかゝつて敵を東西に追ひ靡けたれば不覺の敗を取りたるにもあらず、この上強めて我等を口汚く譏る者あるとも我等は心において何の恥づるところなし」

と曰つた、正純は執念深く問うた、

「御辯舌は承はることなれども、いよく以て仰せのほどに疑ひあり、凡そ智將は、人情を計り、機微を察すと聞くに、おのゝは諸將の心をも計らず、卒爾に馬を出され、終に裏斬にあひたまへり、反忠の輩なくば勝ちたらむものとは心得難き仰せなり、また秀家卿にしる貴殿にしる、長束殿に至るまで濃州へ御出馬の日より、討死の御覺悟あるべきを、大谷殿を棄殺にして引退かれたるばかりか、貴殿は生捕になり給へり、それも策にや。」

三成は笑つて曰つた、

「御邊のいへる如く諸將の心を知らざりしゆゑ、裏斬りにあひたれば、今は兎角いはむやうなし、たゞし大谷を敵に討たせて、秀家と我等が退きたるを、不覺のやうに申さるゝは、御邊が狭き心に任せてこの論をなすといふものぞ、大谷は多年の病者なり、死を急ぎたるも故なきにあらず、秀家と我等が退きしは時節を待つべき謀なり、田中が家人の我が宿に來れる時、その輩を刺殺して自害せむは易かりつれど、この上は敵の手にて尋常に首を討たせばやと思ひ、又關ヶ原合戦の日は手前開はしかりしより、人々のなれる様をも知らず、その働きの善惡をも語り聞かする人あらば泉下において太閤へその物語申さむため、斯くは暫く浮世に存命せるものなり、今は御邊と差向ひて問答するも益なし、この後は口を噤むべし」

かくて後は何を聞いても口を開かぬので正純も仕方なく、その場を退いた。

附言 三成が逮捕されてから大津の陣營に置かれるまでの間には彼に關する種々の説がある、いづれも後世の附會で、以上の外は信を置くに足る者はない。

二二六 惠瓊捕はる

關ヶ原で味方の敗を聞いて多良口へ退走した安國寺惠瓊は本道は危険と江州那須の里より引返して朽木谷へかゝり、山城坂を打越え八瀬、小原を過ぎて、鞍馬に入りその白照院といふに隠れたが、

これより先、家康は惠瓊を毛利の隊中に求めむとて吉川より差出した人質の粟谷十郎兵衛に命を含め彼れを毛利の隊中に還した。十郎兵衛は家康の命を受けて京都に上つたが、惠瓊は早くもそれを聞いてこの上白照院にをるは危険と六條の道場に隠れた。

時に江州佐々木の浪人に北村五郎左衛門といふがあり、それが遁世して樂鎮と號して、京都にゐたが、一日惠瓊の潜伏所を聞き付け早速、それを當時家康から命ぜられて所司代となつてゐた奥平信昌に告訴した。信昌は直に家人の鳥居庄右衛門に手の者を添て六條の道場へ遣はした。

惠瓊はそれと氣付いた爲か、身の刻々危険に迫れるを知り、そこも覺東なしとて平井藤九郎、長坂長七の兩人を召連れ、身は張輿に乗つて東寺の方へと逃げ出した。がこの時は早や捕手がその背後に逼つてゐた。且つ樂鎮は寸時も油断せず見張つてゐたので、惠瓊の張輿が出るや否や、捕手に向つてそれを教へた。捕手は聞いて、それとばかりにバラ／＼と張輿を取卷いた。もうかうなつては絶體絶命である。平井はこれを見て、一刀抜くなり、ズブリと輿の中を刺した。こは主人を敵に渡すまじとの考へからであつた。かくて平井は捕手を敵手に目覺ましき働きして討死した。長坂も同じく平井と共に大いに闘ひ、平井と枕を並べて死むだ。

庄右衛門は兩人の死するを待つて輿より惠瓊を引き出した。惠瓊は平井に刺されたけれども、急所を外れてゐたためなほ死せず、引出されて繩をかけられ、一旦信昌の役所に引かれ、それより大津の家康が陣營に護送された。これ九月二十三日である。

この時、家康は信昌に命じて彼の樂鎮に黄金十枚を賞として與へたが樂鎮は受けず、

「安國寺の在所を申し出でたるは、御褒美を受くべきためにあらず、先年秀次公滅亡の時、石田・安國寺等、故主六角を支へて代々の領地を召放され、主人は勿論、我等家來一同、浪人してかく淺ましくなり行きたるよりこの恨み骨髓に徹し、かくは訴人に及びたり、遺恨を晴らすためにごさる」と曰ふ。信昌これを聞き、

「やさしき申様なれども褒美は天下の定法なり、宜しく申受くべきぞ」

と曰ひ、強めて與へた。そこで樂鎮はこれを受け、故郷に歸つて農夫に分つたといふことである。

二二七 正家兄弟切腹

長東正家は安國寺と共に關ヶ原の敗を聞いて居城水口へ逃げ歸つたが佐和山陥落の後、家康は池田長吉に命じて、圖つて城より出し切腹させた。

初め正家は水口に歸るや、籠城の準備を家人に命じたが、家人の多くは賛同せぬ。さりとして何ともしやうなきまゝ、評議に日を暮してゐたが、間もなく長吉は水口に來つて城中に使ひを立てた。

「貴方、いよく籠城の覺悟あるにおいては、内府必ず根を絶ち葉を枯らすことであらう。速かに城を出で、罪を謝したまへ」

といふが使者の口上であつた。城から誘き出して腹を切らせやうといふが家康の寸法で、長吉にはそ

の手段方法を授けて置いたから、長吉はその命のまゝを行つてをるのであつたが、それとは知らぬ正家は味方の敗を聞いて尻に帆をかけて逃げ出すほどの臆病者ゆゑ、城さへ出たらば一命助かること、信じ、早速に退去して櫻井谷の民家に移つた。長吉はうまく圖つてやつたとばかり直に城を收め、それより改めて櫻井谷に出張し正家及弟伊賀守の兩人共に切腹すべしと家康の命を傳へた。正家はこれを聞いてやうやく圖られたと覺つたらうが最早及ぶことではない。家人を以て、

「これまでお出での上は腹切ること勿論でござる。さりながら少しく時刻を延べてたまはるべし」と曰はせ、それ〴〵最期の準備に取りかゝつた。長吉は、

「お心靜かに用意せらるべし」

と曰て待つてゐた。時に伊賀守は兄の切腹を待ちかねてか、または氣おくれを勵ますためか、兄より先に切腹すべしとて廣庭に疊を敷かせ、檢使に挨拶して腹搔き切つた。介錯は郎従の林長藏といふものであつたが伊賀守の首を落すやこれを洗つて檢使に差出し、己れも追腹切らむとしたが傍輩に取おさへられてそのまゝとなつた。

弟に先たゝれた正家は、最期の準備を取急ぎ、家人の奥村左馬・西川兵庫・小西治右衛門・長束與十郎等に記念の品を分配し、それより白装束を着して切腹の座に直り、長吉に向つて、

「御檢使御苦勞でござる、さらば今生のお暇をたまはらむ」

と曰つて腹切つた。けだしこの沈着方は臆病者には不似合ではないか。正家の介錯は前記の奥村であ

つたが、彼れは正家の首を落すや、直にその刀をば自分の腹に突き立てた。長吉の家人等これを見て馳せ寄り、遮二無二、刀を奪ひ取つた。こは蓋し正家が、かねて長吉に依頼するに奥村の殉死を制止せむことを以てしてあつたためである。

正家の死後、彼れが認めた目録に就いてその遺産を調査したところ、黄金五千枚・銀三百貫目・金鬘斗付の刀・脇差千腰その他珍奇の物夥しかつたといふ。さすがは理財家だけあると言ひたいが、しかしこれでは戦場で一戦もせず逃げ出すこともまた道理あることであつたらう。

二二八 英雄の末路

英雄の末路、哀れむべし、太閤在世の時は、石田三成といへば一世の寵兒として飛ぶ鳥も落さむばかりの威勢であつたが、一朝關ヶ原に敗戦するや、身は捕へられて、行長・惠瓊の兩人と共に六條磔に斬らるゝに至つた。英雄の末路、眞に哀れむべし。

初め家康は天津より大阪に向ふや既に捕へし、三成・行長・惠瓊の三囚を大阪に送らせた。家康の腹は已に決してをる。それは斬るに在つたのである。三囚を大阪・堺の兩市に引廻し更に京都に送つて市中に拘へその日を以て六條磔に斬つた。これ十月一日である。

これより先、三成は大阪において行長・惠瓊の兩人と共に家康から時服一重宛を與へられた。その時行長は家康の好意に感じ、

「忝なく存する」

と禮を述べた。惠瓊はまた、

「それを着やう」

と直に着用したが三成は禮も述べねば無論手にも取らず、

「それはどこからか」

と問ふ。使者、

「上様より」

と曰へば、三成は嗟嘆して、

「さて、上様は此の中、御他界なされたるに、早や内府を上様といふことよ」

と曰つて時服には目もくれなかつた。三人三様の態度であるがそれに由つて三人の心事が推せらるゝではないか。この態度は三人とも最後まで同じであつた。惠瓊はさきに家人から刺されたためその傷の痛みの故もあつたらうが、京を引廻された時には面色頗る衰へてゐた。これに反して三成・行長の兩人は毫も平生と變れるところなく、ために見る者をしてさすがなりといはせた、また三成はその時或る家の前において、

「茶をくれよ」

と高らかに呼むだが、家の内より老女走り出て、

「お痛はしや茶を參らせたまへ」

と茶を差出し、同時に烏柿を盆に載せて出した。三成は、

「志は祝着なれど、この頃腹中を煩ひ、未だくと本復せざる故柿は禁物である」

と曰ひ、心地よく茶ばかりを飲み干した。行長がこれを見て、

「唯今、首を斬らるゝ身にて養生無益なり、老女の志を受けられよ」

と勸めると三成は行長を顧みて、

「貴所は心得ぬことをいふ人かな、今日河原に引出されて首を討たるゝ際までも、世間の變化測るべからず、この故に我等はまだ身の養生をするなり」

と曰つた。英雄の願ふところ、けだし三成の如くならざるべからず。彼は確に將の器であつた。

三成等三囚の斬られた日に、さきに伏見城において敵に内通した永原十内・山口宗助等十八人もまた粟田口において磔に懸けられた。

勝てば官軍、敗れば賊、三成等三囚の斬らるゝや、その首は一々文言を附して三條の大橋に梟された。その文言といふは三成の分には

此者謀叛を起し、京・田舎の人をなやますによつて、如斯おこなふもの也。

子十月一日

行長の分には、

石田三成を中心に

此者むほんに組する科によつて、かくの如く申付くるもの也。

子十月一日

それから惠瓊の分には

此僧むほんにくみする科に依つて、かくのごとく申付るもの也。

子十月一日

とあつた。因に長束正家の首もまたこの日こゝに送致され、三囚と共に梟された。

二一九 長盛流さる

増田長盛は最初から兩端を持し何れかといへば家康を欺いてゐたのであつたが、家康はどうして長盛ごときに欺かれるやうな男でない。長盛が、關ヶ原の大敗を聞いてから種々陳謝したけれども、家康は承知しない。

「右衛門尉は、秀頼守護のため、大阪城内にゐて、我等に敵せざる由、陳謝するといへども手の者を下知して、伏見、天津の城を攻めさせ、その上安藝中納言輝元と連判の廻文を諸方へ遣はしたること分明なり、急ぎ郡山に蟄居させよ」

と藤堂高虎外一人に命じた。長盛は陳謝聽かれず、力なく大阪城を退去した。これ輝元が木津の邸に退いた日である。長盛は徳川勢が數百人道路の左右に堵列して監視嚴重の中を悄然として立ち去つた

が、居城郡山へ歸還の途中において家康から俄の下知として、高野山へ籠居せよとのことである。長盛はこれを聞いて、

「兎も角も仰せに任すべし」

と曰ひ、そのまゝ高野山に護送されながら登つた。

一方郡山の居城では、主人が歸城すると聞き、待ちに待つたが、歸城なく、何れに行きたりとも知れぬ間に、早くも殺されたといひ高野山に登つたともいひ、眞偽もごも風評されて遂には上を下へと騒動するに至つた、折柄筒井伊賀守その他和州の小身が家康の命で兵を率て郡山近くに出張する、續いて藤堂高虎等も寄せ來つたので城中ではますます騒ぎ出したが、それを客分である渡邊勘兵衛が城代その他を引廻して取鎮め、何時敵が寄せ來るともあつばれ一戦と身構へた。然るに間もなく長盛の使者が高野山から馳せ來り、城を開いて、金銀諸道具までみな目録にして藤堂に引渡せよとのことである。そこで城兵は主人の命なれば已むを得ずと尋常に城を明け渡した。

長盛は其後、武藏へ流さるゝこととなり、岩槻の城主高力左近太夫に預けられたが、十幾年も存へて大阪陣の時に當り、家康からの命なりと高力から、

「御邊は太閤の御恩深き人なれば、この節大阪の有様、秀頼公の御行末をも見届けられたく思はるゝであらう、大阪へ上りたまふては如何、駿府よりの御免である」

と曰はるゝや、

「大御所は誠に天下の仁君である、尋常の君ならばいかで、この免しあるべきや、但し某今日大阪に上り、新集の浪人など下知するとも抄々しきことあるべからず、かへつて太閤の御眼力を徒らにしては残念故、このまゝ配所で終りたし」

と曰つたが其後嫡子の兵大夫守次が大阪に籠城し、八尾の合戦に討死したことが知れたのを、正しく長盛、指圖となし、高力に命じて誅戮した。或はいふ、長盛、秀頼の最期を聞き、最早何の頼むべきなし、身の暇を賜はれとて自ら請うて切腹したと。

二二〇 毛利の封を削る (上)

前にも言つた如く家康が輝元の本領安堵を約したは兎も角もして廣家を關ヶ原において中立させたかつた爲め、その後はまた兎も角もして輝元を大阪城中から退去させたかつたためである。それが證據には當時彼は一言も自分の口からは發せず、一筆も自筆のものを出さず、みな直政・忠勝等にその筆舌を弄させ、そしていよく輝元を大阪城から追出して、自分が入城すると、直政等をして正則・長政に通牒(一)させて曰く(一)薩摩を攻伐するについて、廣島まで秀忠を出動させるから、かねて太閤の法規の如く、沿道の諸城に警備の兵を入れおかれよ。(二)兩家の家老達の質子を出されよ。(三)輝元の奥方は、前々のやうに大阪なる上之屋敷に移らるべし。(四)薩摩へ出陣については輝元自ら先鋒をつとむべし。(五)かねて大阪に在つて、さきに廣島に移した諸將の妻子の質は急に返上せられよ。

(六)右の諸事項、果行の上で、家康は秀就に對面してやるとのことである。と、人焉ぞ瘦さむやと古人は曰つたが、ウソは何時かばれるものである、右の書は家康が毛利に對するウソをばらしたものである。なぜならば薩摩を攻伐するに秀忠を廣島に置く道理はないではない歟。成程營を大阪に置くよりは名代の秀忠でも廣島に置いたら、それだけ距離が短縮するから命令に便利であるといふ人もあるかも知れない。けれどもそれは苦しい辯護である、家康の本心は、かくいつて毛利の諸城を開かせ、これに兵を入れて然る後、毛利の領地を沒收せむとしたものである。一城や二城の小藩なら、使者を發するなりして收むることもできるが、中國の大部分を占有してをる毛利の諸城を收めむとするには使者や少數の兵ぐらゐるでは危険至極である。これ家康がかゝる老獪な策を案じた所以である。

然るに越えて三日、即ち十月二日に至つて、家康は薩摩攻伐の事は噓にも出さず、直政に授くるに輝元の領地沒收の旨を以てした。惟ふに形勢ますます自家に有利にして最早輝元の諸城を收むるに必ずしも兵力を以てするに及ばざるを看取した、めであらう。

直政は家康の旨を受けて福島正則・黒田長政の兩人に左の如く曰つた。

「吉川廣家赤坂において人質を出し、別心なき證據を表はすにより、輝元の領地相違なかるべき旨内府公の御内意を請けて某等誓約を爲すと雖も輝元別心の罪においては更に許容あるべからず、この上は輝元の領地を一圓に沒收せられ、吉川藏人には中國において一二箇國たまはり、近日内府の墨附を廣家にたまはるべき議定でござる、この旨甲州より吉川方へ御内意あられよ」

廣家は家康の態度が氣にかゝり、その後しばらく正則長政に使者を立て、聞き合せ、二日にも兩度も長政へ使を遣はしたと見え、長政は直政から前記の旨を聞き取るや、直にそれを誓書(2)に認めて廣家に遣つた。曰く(一)輝元の身上については、正則と共に協議して随分骨折つたけれども、輝元は五奉行等に加擔して、大阪西ノ丸に移り、諸方への廻狀數通に加判したこと確實となつた、その上にも四國へ出兵してをることも知れてをるので、最早何とも仕様がなない。(二)貴殿の實直のことは、直政が取なし十分で、中國押へのため、その國々中で一二ヶ國は賜はることに議決したとのことである。いづれ家康から墨付を取つて進ぜるであらう。このことは直政が堅く請けあつた。(三)直政から呼出されたら早速出頭されるがよい。隨員などは、馬廻り三四人だけにされたがよい。槍などは無用である。當面の事態につき、拙者は貴殿を陷害させるやうなことはさせないつもりであるが、この邊のことは、よくよく分別されたがよい、と。

- (1) 一薩摩え之行付而、廣島迄、中納言(秀忠)可被致出勢候條、如太閤様御置目路次筋諸城え番手可被入置事
 一御家中年寄衆、質物(家老の質子)可被出事
 一輝元御内儀、如前々、當地上之屋敷え可有御移事
 一薩摩御陣御先え、輝元御自身可有御出陣事
 一今度上衆質物(大阪に在りし諸將の妻子にして曩に廣島に下せしもの)急可被返上事

右之旨相濟候上、藤七郎(秀就)え對面可被申由候、以上

九月晦日

井伊兵部少輔直政
 本多中務大輔忠勝
 榊原式部大輔康政

羽柴左衛門大夫殿
 黒田甲斐守殿

- (2) 先刻兩度御使者被差越候得共、相違候而、不能御返答候
 一輝元御身上之儀、羽左太、申談、隨分取持候ひつれども、奉行共御一味候而、西丸え御移、諸方廻狀數通、中納言殿(輝元)御判慥に候上、尙又四國へ人數被差渡候條、旁以不及是非儀共に候
 一貴所様御律儀之事者、井伊兵部御前之御取成共無殘所候、中國之内に而爲押一二箇之間、貴所様可被下之旨、御議定候由に候、此上は内府様御直之御墨附取候而可進候、井兵少堅請あひ申候
 一井兵少より被呼候者、早速可有御出候御供は御馬廻計三四人之間被召連可然存候、槍共は御無用に候、雖此節之儀候拙者儀、對貴所様、全御身をはめさせ申候儀、御坐有間敷儀、爲御分別、令申候、恐惶謹言
 右於僞者

日本國中大小之神祇御罰、立可罷蒙者也

十月二日

長 政

廣 家 様

石田三成を中心

三二二 毛利の封を削る (下)

直政は翌日更に廣家を招いて曰つた、

「中納言殿今度の御覺悟、沙汰の限りなるにより、領地を召放され、周防・長門の兩國を貴殿に與へらるべき御内意である。その心得あるべし」

廣家は前日既に長政より書狀があつたので直政の申渡には今更の如く驚きもしないが、さりとて由來取り來つた態度の手前、直には承引も出来ない。

「中納言一旦、石田・安國寺等に語らひ入れられたりとも、某かねて御内通申し、秀元その外家老共を、内府公の御味方になし申したる上は一國なりとも輝元に與へたまはり、毛利の本家を立てらるべきこと勿論でござる。然るを某に過分の領地をたまはるべき御内意においては、憚りながら幾度もお断り申さむ」

と曰つて退出した。

長政は正則と共にしばし廣家に約するところあつたので、事ここに至つてはセメて廣家だけでも救はねばならぬと思つたか、廣家が直政に對して返答した一條を聞き込むや、驚いて廣家に一書(1)を送つた。その要は毛利の領地の運命今明に迫つたから分別が肝要である。直政に對して言ひ切つた

ことは仕方がないが、今後言ひ切りは慎まねばならぬ、かうなつては領地中セメて君の分だけでも残れば毛利の爲になるといふものである。兎も角も直政・正則と自分の三人に任せて然るべしといふのである。廣家は毛利に對する責任上絶対絶命の場合であるから、長政から言ひ切りは慎めといはれてもそのまゝ黙してはをられない。

更に正則・長政の兩人宛誓書(2)を入れて毛利一家のために惻願した。その書意に曰ふ、この度のことは、輝元においてはその心底から出たことではない、安國寺惠瓊が策略に乗つたものであつて、奉行等の言ふ通りになつて大阪西丸に上つたのは、秀頼に忠義とばかり考へたからである。これは畢竟、輝元が未熟の爲めであつた。しかし、今後は決して家康に對して野心など起さず、忠節を盡すであらうから、セメて毛利の姓氏だけでも存しおかれるやう御配慮願み入る。輝元が許されないで、自分ばかりが増封されることは、自分としては、自分の身上をはかつて本家を見すてるやうで、自分の本意でない。輝元の心中は言ふまでもなく、外聞もわるくて、自分としては面目次第もない。故にさうされるやうではむしろ輝元と同罪にされたが本望である。もし幸にして恩恵を垂れ、毛利一家を存置されるに於ては、今後逆心の殘黨が蜂起することあるとも、輝元は決して恩義を忘却せず、忠節を盡す心底である。千萬一にも不屈の心底があつた其時は、たとへ本家であらうと容赦はない、自分一存で打ツ潰し、そして飽まで忠節を盡すであらう、と。

廣家としてはその責任上、この位の誓書を入れてなりとも毛利家の爲め奔走すべきは當然のことで

ある。正則等は廣家の誓書を見てそれを家康に披露した。且つ彼等も廣家に對して義理あれば多少は奔走したものが、十日に至つて家康は廣家を召き、

「この度の逆亂に、始終心底を變せず、秀元その外輝元が家老共に意見を加へ、南宮山の諸勢を押へて十五日の合戦に手合せを留めたるは、其方が忠節なれば以來忘却あるまじ、且つ其方が誓紙にての斷りの旨に任せ、輝元の罪を宥めて防長二州を輝元父子に與へるぞ」と曰つて、その旨を誓書(3)にして輝元に與へた。

毛利の領土は安藝の外に備中・備後・伯耆・出雲・隱岐・石見・周防・長門の八州を占めてゐた。今周防長門の二州を與へるといふのであるから七州を削られたわけである。領土安堵で喜ばせて内通させ、また領土安堵で大阪城を退去させ、それから薩摩攻伐と觸て沿道の諸城の明渡を命じ、かくして敵手の態度を見極めて領土没收を脅迫し最後にお情けを以て二州を與へて七州を削る、その段取りの巧妙なること實に老獪この上なし、彼が如き狸にあらざれば出來難き藝當である。さるにても毛利の意氣地なさ、晒笑の至りである。内應内通などの古來その結果のよからざること、わかりきつてをることである。廣家こゝに至つて思ひ知つたであらう。因に記す輝元は二州を受けて長州を秀就・秀元の兩人に分ち、周防は全部廣家へ、己れは隱居して髪を削り宗瑞と稱した。

(1) 扱もく中國の御安否、今日日に相究候、御方様御分別迄に候、井兵少^え被仰切候、御覺悟兵は不及是

非候。急度御申切は御無用に候。乍去拙者心底之儀は無殘所可申入候。中國之内せめては貴所様計成共御殘り候は、輝元の御爲、是過間敷候、中納言殿へ御届候事、一重二重迄は御尤に候、貴所様御身やぶれ候は、輝元の御爲にも成間敷候、能々御分別無之は無曲候。恐惶謹言

十月三日

吉藏様

黒田長政

尚々於此度者、兎も角も井兵少・羽左太我等三人に御任せ置可然存計に候、更に此外無御座候以上

(2) 起請文前書之事

一案外之逆亂、失十方候に付而、先達而御理申上候所、御兩所様依御氣遣、私身上之義は被聞召分、忝御惠之御内意共御座候段は、今生不及申上、後世迄も、忘却仕間敷候事

一此度之義、輝元心底より出不申儀、安國寺調議を以、奉行衆任申分、西丸罷上、對秀頼様御忠義之様に相心得候段は輝元心底、ねれたる分別無御座候之故、各如御存知候、無是非次第に御座候、雖然、向後對内府様無野心、御忠節可仕段は、全別異御座有間敷候、毛利と申名字計成共、御立置被下候様御氣遣存迄に御座候、輝元御理聞召分無御座、私儀於蒙御恩候者、先達而關東迄御理申及候所も、私一分之身上氣遣仕候而、本家を見捨候様に御座候此段非本意候、輝元心底は不及申、他人之見聞迄も、無面目次第に御座候、兎も角も輝元同罪被仰付候様、幾度も御理可申上覺悟、他事無御座候事

一此度御惠を以、毛利一家を御立置於被下候は、向後逆意之殘黨御座候共、於輝元、全此度之御惠、忘却仕間敷心底に御座候、千萬一、毛頭も不届之心底於御座候は、其節は私一分之才覺を以本家之儀に御座候共、打

石田三成を中心

潰し候て、驗を差上一途に御忠義可仕候事
右於僞者

梵天帝釋・四大天王・惣而日本國中大小之神祇、別而氏神八幡大神・愛宕摩利支天・住吉大明神・天滿大自在天神・巖島兩社大明神之御罰、立可蒙者也、仍神文如件

慶長五年十月三日

廣 家

福島左衛門太夫殿

黒田甲斐守殿

(3) 敬白起請文前書之事

一今度周防、長門兩國進之置候事

一御父子進退異議有間敷事

一虚説申掛候者可遂糺明事

右於申者

梵天帝釋・四大天王總而日本國中六十餘州大小之神祇、八幡大菩薩、富士箱根並三島大明神、天滿大自在天神可罷蒙御罰者也、仍起請文如件

慶長五年十月十日

家 康

安藝中納言殿

毛利藤七郎殿

二三三 島津の謝罪

關ヶ原で敵中を突破して退却し、追撃に遭ふて士卒を失ひ、僅少の家臣と共に文右衛門といふ案内者に案内させつゝ、艱苦を嘗めて泉州堺に出で、それより大阪に入つて質人を取り戻して、薩摩に歸つた島津惟新は、兄の龍伯に由來の行動の寡兵のため已むを得ざるに出たものであることを述べて謝罪し、翌六年四月責を引いて櫻島に幽居した。

これより先、龍伯は惟新から委曲を聞かや、惟新の子忠恒と共に一書(1)を寺澤廣高に遣つて周旋を依頼した。その書意に曰く、今度の戦争の原因結果、惟新が歸來したので残らず判明した。惟新においては大阪方が今度の企謀、その前以て何等協議にあづからなかつた由である。家康の厚恩はいさゝか忘却いたさぬが、家康も承知の通り、秀頼に對して末永く忠節を抽する旨起請文を差出してあるのでその旨變らずば、今度の企謀に同心せよと奉行衆から退引ならぬ談判につき、君臣の道、こゝに至つて黙止がたく、遂に同意したとのことである。勿論我々は、かねての家康の懇親をいさゝか忘却しないでをる。いやが上にも心底に變りはない。これ等のことを諒引されるやう家康に對する取成しを頼み入る、と。

この書に據ると君臣の道黙止難くして義軍に與みしたとあるがこれは後から案出した理窟であつて當初は決してソナナ立派な考へではなかつた。それは前にも記した如く伏見には入城できず、さりと

て寡兵のため自立もならず、已むを得ず長いものに巻かれてゐたのである。但しそれを有體には自白せず、却つて理窟を考へ出して陳辯する、そこに島津の強味があらはれてをるといふものである。

家康は毛利脅迫のためでもあつたらうが、兎に角、薩摩攻伐の令を發し、また伊東祐兵に命じて相良・秋月等を薩摩に向はせやうとしたが、そうかうする間に前記の如く龍伯の使者が廣島に周旋を請うて東上し來つたので、それを中止し、なほ如水清正等の薩摩に發向せむとせるをも止め、そして井伊直政・山口直友の兩人に命じ、龍伯と忠恒とに書を遣して東上謝罪するやう勸告させた、しかも龍伯は病の故を以て東上せずそれが爲め、双方より使者の往復數回に及むだが、遂に七年四月に至つて忠恒が東上した。家康は忠恒の東上を見て大に悦び、これを延見して黄鷹二連馬二疋を忠恒に與へ、且つ龍伯の養子となつて、その家を繼ぐべしと命じ、諱の家の字と松平氏とを賜ふた。忠恒はそれより松平薩摩守家久と改稱した。かくして島津は罪を免れ、本領も元のまゝたるを得たのである。

* * *

(1) 依遠邦其以來無音打過候、本慮之外候、然ば今度御弓箭之成立、惟新罷下、巨細致承知候、惟新事、最前御談合之御企、曾不被仰聞由候、殊内府様御厚恩之儀、雖無忘却候、内府様如御存知、奉對秀頼様、永々可抽忠節爲證跡、度々靈社上卷上置候、其筋於無相違は可同心仕旨、御奉行衆承に付、君臣之道難默止、任其意候由、申候、勿論我々事御懇之儀聊不存忘候、彌心底不可有別儀候、此等之段被聞召分候様、御取合憑存候、委曲は彼使可申達候、恐惶謹言

十月二十二日

忠 恒
龍 伯

寺澤志摩守殿

人々御中

二二三 秀家流さる (上)

關ヶ原における義軍の首魁は大概捕縛されて誅戮された。獨り秀家のみ未だ縛につかず、さりとして家康は強めてもこれを捜査させやうとしなかつた。しかるに或日秀家の家人進藤正次といふ者本多正純を訪ふて秀家の佩刀を證としてその自殺を告訴した。ところが後二年即ち慶長七年に至つて島津忠恒が秀家を自家に匿せる旨を首告したので、家康は八年九月これを八丈島に流した。

初め秀家は關ヶ原の戰場から遁逃して、家人進藤正次・黒田勘十郎の主従三人で鎧を脱ぎ捨て馬を乗り放し、伊吹山の東の岨傳ひに美濃の粕川の谷を越したが、日は暮れる、雨は降る、山路ではあるので頗る難澁して岩陰に立寄つて休憩した。ところが秀家は當時大いに心勞してゐたので、勘十郎の膝を枕に前後も知らず寝入つてしまつた。宵の口より朝に彌らむとして遠里の鶏の聲さへ聞ゆる頃とはなつた。従へる兩人は氣が氣でない。正次は秀家を搖り起した。

「起きさせたまへ、いつまでかくておはすべき、敵の來らぬ間に何方へなりとも落ちさせ給へ」

石田三成を中心に

秀家は目を醒し、

「さらば行かう」

と岩陰を立ち出で、中山の郷へ下つたが、この時落人の武具衣裳を剝ぐ百姓ども群り來り、早や秀家を取圍まむとした。その内に白樫村の浪人矢野五左衛門といふがるたが、彼れは槍を取直して秀家に近づいた。今や秀家主従は絶體絶命である。秀家は曰つた。

「人を憐れむを人といふ、其方能きに計らへよ」

五左衛門は熟々と秀家を視てその人品骨柄言葉の調子に考へてこれは普通の落人ではない、必ず高貴の方であらうと俄に槍を横たへて、

「昨日の雨に道ぬかりで、御歩みも覺束なし。負はせ參らせて、某が在所へ御供申さむ」と曰ひ、伴へる九藏といふ者に、秀家を負せて畔傳ひの細道を走つた。百姓はこれを見て後追ひかけた。五左衛門は振りかへつて、

「年頃知れる人なるが廻り逢ひたり、そこまで誘ひ參らす、曲けて免ぜよ」
百姓共はナカ／＼承知せぬ、

「その御方は御邊に任すべし、持たせたまへる腰の物をこれへ給はり候へ」

と曰つてなほも追ひかける。正次は、武士が刀を差し出すほど口惜しきことはないので、殘念でたまらなかつたが、今は主人の一大事の場合である、主人の爲めだとして主人から持たされてゐた主人の刀

と自分の刀、脇差とを百姓共に與へた。かくて秀家主従は五左衛門に誘はれて、白樫村に至り、五左の家の後なる岩窟の中に藎を敷いて、そこに潜伏した。

二二四 秀家流さる (下)

秀家は思はぬ人の情で數日を岩窟に潜伏したが、かくて何日まで在るべきでもないから、一日正次を近づけて曰つた、

「惟新は定めて本國に下れるならむ、我等も如何にもして薩摩へ赴き、惟新と謀りて重ねて旗を揚ぐべし」

正次は聞き終り、

「仰せの如く、島津殿は關ヶ原敗軍の後薩州へ御下向と承はる、急ぎ彼國へお下りあつて宜しく御相談あそばされよ、某計略を仕らむ」

と曰つて案じた一計を物語り、

「年頃御身を放したまはぬ國次の御腰物を某に賜はりたし」と請うた。秀家はそれを承引して國次の名刀を正次に授けた。正次はそれを受けて直に身仕度をなし、殘る勘十郎に向かひ、

「御邊は、殿さまの御行末を水火の中までも見届奉るべし」

と曰つて白樫村を立ち出でた。

正次の案ぜる計略とは如何のものである。彼れは何れに行かむとする、正次の行先は大阪であつた。彼れは大阪に着するや、本多正純を訪ひ、

「關ヶ原の戦ひ敗れて後、主人秀家は僅に主従三人となりて北國の方へ落ちたまひしが、石田・小西以下の輩、面縛せられしと聞えければ今は遁るゝところなしとて自害して果てたまひたり、それを或山陰にて煙となし白骨をお供の黒田勘十郎と申す者が首に懸け、高野山に登りて候、某も遁世すべかりけんを淺ましくもこれまで参りたるは、御不審あるべきことながら、秀家が行末知れざるに於いては、内府様御心にかけてたまひ、妻子一族を召籠めたまはむ、またこの名刀は取替國次とて宇喜多の家の重器なれば、下劣の者に渡さむも口惜く本意なきにより内府様へ奉りたくかくはこゝまで参りて候、願くは主人秀家の息八郎の一命をお助けありてたまはるべし」

と誠しやかに訴へた。正純はそれとは知らず、家康に言上した。家康もまた一杯食はされて、
「主人を見届けたる心中不便なれば扶助して遣はす」と曰ひ、そのまゝ留めて置いた。

一方秀家は彼の岩窟の中で、今は一人の勘十郎を近づけ、

「何時までこの里に隠れ住むも益なきことなり、いかにもして大阪に出で薩摩へ下るべし」と曰ひ更に五左衛門を召寄せて、

「其方夫婦が今度の懇誠、更に言はむ方なし、とても情に大阪へ送り届けよ」と曰つた。五左衛門は承引して古き乗物に秀家を乗せ、有馬へ湯治の病人との觸れ出して道を急ぎ、途中、事なく大阪へ着き、それより薩摩へ船を下つた。かくて七年にして忠恒の訴へ出づるところとなり、遂に八丈島に流されたのである。秀家は髪を下し、休移と號し、八丈島において長壽を保つたといふことである。また彼の正次は秀家の所在が判明したので、正純の糺明に遭ふたが、少しも悪びれず、

「兎角の返答にも及び申さず、この罪は逃れ難し、早々首を刎ねられ候へ。」

と罪を待つた。家康は、またそれを聞いて忠義感すべしとて知行を與へて家人としたといふ。正次は秀家の鳥見の役を勤め、至つて下賤の者であつたのを侍に取立てられ、宇喜多家の侍としては新參の者であつた、こゝに至つて思ふことがある。大事に際んで、日を貫くやうなことをする忠臣といふは何時の世にも、大概新參者地位の低い者であつて譜代とか、老臣とかいふ者には忠臣は稀である。赤穂の義士においても證據歴然ではない歟。正次の如きもまた記者が想定の内に在るものである。

二二五 景勝削封

上杉景勝は三成と共に東西における發亂者であつたので、家康は西方平定の後更に會津を攻伐しやまとした。それを聞いた僧承兌は直江兼續まで降を勧めた。

兼續は一代の政治家、景勝はまた一世の雄、共に天下の大勢に明かなるものである。大勢既に決したる今日、なほ家康と戦ふが如き愚策に出づるものではない。承兌の勸告があると、それに由つて今が陰忍自重の腹を固む可き時であるとして兼續はこれを景勝に勧める。景勝も同感である。そこで當時景勝の押へに宇都宮へ出陣してゐた結城秀康に就て降を請うた。これ慶長六年三月である。秀康は景勝の降を聽いてこの旨を家康に申告した。家康は當時大阪より伏見に移つてゐたが秀康の申告を聽いて、さらば景勝に西上して謝罪するやう命ぜよと秀康に沙汰した。秀康はそれを景勝に諭告した。會津と宇都宮と伏見の間の往復は汽車や郵便電信のない時であるから日數の非常にかゝるのは當然であるが、それにしてもこれはまた格別で、秀康の諭告は景勝の手許には六月に達した。三月降を請うてから三ヶ月目に沙汰のあつたわけである。惟ふにその間家康において何等か考ふところがあつたのであらう。

さて景勝は旅装を整へて七月初め會津を立ち、宇都宮において秀康に會見して伏見に上つた。秀康も景勝と共に後からかに上つたと見えて八月、伏見において景勝を伴ふて家康に謁見した。かくして景勝は攻伐を免れたが、封地安堵といふ譯にはゆかず百二十萬石から九十萬石を削られ、しかも前日まで家臣の領地であつた米澤に移された。

三成・行長・惠瓊・正家・長盛・惟新・秀家・輝元・景勝は關ヶ原の亂における義軍中の大立者であるが、これ等に對する處分は以上の略記で始末がついたが、なほ地方に在つて名ある人々の處分にあつたは

丹羽長重・前田利政・青木一矩・眞田昌幸の褫封、大友義統の秋田配流である。佐竹義宣は父義重が家康と別懇の間柄であつたので、義重が西上謝罪し、そのまゝ罪を問はざることになつたが、六年冬義重が卒去するやその翌年封を削られ秋田に移された。また前田德善院は心を關東に寄せてはゐるが、その證なきが故に、家康は、

「立以が志一度も顯はれたることなし」と曰つて罪を宥さず封を褫むとしたが後子の茂勝に本領を與へた。

二二六 處罰一束

上來記するところは、大頭株の處分のみである。以上の外に大小名で、褫封又は削減の處分にあつたものは、少からずある。今これを以上のものと共に一括、以て表にして示さう。

領地没收	
宇喜多秀家 <small>(備前岡山)</small>	長會我部 <small>(土佐浦戸)</small>
前田利政 <small>(能登七尾)</small>	増田長盛 <small>(大和郡山)</small>
宮部長熙 <small>(因幡鳥取)</small>	小西行長 <small>(肥後宇土)</small>

石田三成を中心に

石田三成(近江佐和山 一九四〇〇石)
 立花宗茂(筑後三二〇〇石)
 丹羽長重(加賀小松 一二五〇〇石)
 青木一矩(越前北庄 八〇〇〇石)
 太田一吉(豊後白杵 六五〇〇石)
 安國寺惠瓊(伊豫の石 六〇〇〇石)
 山口宗永(加賀大聖寺 六〇〇〇石)
 相馬義胤(陸奥中村 六〇〇〇石)
 大谷吉繼(越前敦賀 五〇〇〇石)
 丹羽長昌(越前藤枝 五〇〇〇石)

織田秀信(美濃岐阜 一三五〇〇石)
 毛利秀包(筑後久留米 一三〇〇〇石)
 岩城貞隆(磐城 一〇〇〇〇石)
 小川祐忠(伊豫國府 七〇〇〇石)
 木下勝俊(若狭小濱 六二〇〇石)
 毛利勝信(豊前小倉 六〇〇〇石)
 多賀谷重綱(常陸下妻 六〇〇〇石)
 織田秀雄(越前大野 五〇〇〇石)
 長束正家(近江水口 五〇〇〇石)
 青山宗勝(越前丸岡 四六〇〇石)

田丸忠昌(美濃岩村 四〇〇〇石)
 眞田昌幸(信濃上田 三八〇〇石)
 伊藤盛正(美濃大垣 三〇〇〇石)
 小野寺義道(出羽横手 三〇〇〇石)
 島津豊久(日向土原 二八六〇石)
 木下頼繼(越前の内 二五〇〇石)
 佐藤方秀(美濃上有知 二五〇〇石)
 齋村廣道(但馬竹田 二二〇〇石)
 多賀秀家(大和宇多 二〇〇〇石)
 木下重賢(因幡若櫻 二〇〇〇石)

南城忠成(伯耆 四〇〇〇石)
 小野木公郷(丹波福知山 三一〇〇石)
 原勝胤(美濃太田山 三〇〇〇石)
 石田正繼(封地 未詳 三〇〇〇石)
 堀内氏善(紀伊新宮 二七〇〇石)
 氏家行廣(伊勢桑名 二五〇〇石)
 新庄直頼(攝津高槻 二四〇〇石)
 岡本宗憲(伊勢龜山 二二〇〇石)
 木下利房(若狭高濱 二〇〇〇石)
 木下利久(封地 未詳 二〇〇〇石)

石田三成を中心に

五四三

木下延重(播磨二〇、〇〇石内)
 垣見一直(豊後二〇、〇〇石來)
 赤座直保(越前二〇、〇〇石内)
 筑紫廣門(筑後一八、〇〇石島)
 横濱茂勝(播磨一七、〇〇石内)
 寺田光吉(封地一五、〇〇石詳)
 石田正澄(近江一五、〇〇石内)
 宇多忠頼(大和三三、〇〇石内)
 石川貞清(尾張二、〇〇石山)
 石川貞道(封地二、〇〇石詳)

瀧川雄利(伊勢二〇、〇〇石)
 丸毛兼利(美濃二〇、〇〇石)
 杉谷氏宗(紀伊一九、〇〇石邊)
 高橋長行(筑後一八、〇〇石内)
 氏家行繼(近江一六、〇〇石内)
 熊谷直盛(豊後一五、〇〇石岐)
 村上義忠(封地一四、〇〇石詳)
 藤掛永勝(封地一三、〇〇石詳)
 石川頼明(封地二、〇〇石詳)
 糟谷宗孝(播磨磨加古川一、〇〇石)

池田高祐(伊勢二、〇〇石洲)
 奥山正之(越前一、〇〇石内)
 戸田重政(越前一〇、〇〇石居)
 早川長政(豊後一〇、〇〇石内)
 中江直澄(封地一〇、〇〇石詳)
 松浦久信(伊勢一〇、〇〇石生)
 寺西清行(伊勢一〇、〇〇石内)
 岸田忠氏(封地一〇、〇〇石詳)
 木村勝正(美濃一〇、〇〇石方)
 加賀井秀望(美濃加賀井一〇、〇〇石)

平塚爲廣(美濃二、〇〇石内)
 垣屋光成(因幡一〇、〇〇石住)
 赤松則房(阿波一〇、〇〇石吉)
 山崎定勝(伊勢一〇、〇〇石原)
 山口修弘(封地一〇、〇〇石詳)
 寺西信乘(封地一〇、〇〇石詳)
 池田勝俊(封地一〇、〇〇石詳)
 上田重安(越前一〇、〇〇石内)
 高木盛兼(美濃一〇、〇〇石須)
 川尻直次(美濃一〇、〇〇石木)

堅田 廣澄(封地 一〇、〇〇〇石 詳) 高田 治忠(封地 一〇、〇〇〇石 詳)
 川勝 秀氏(丹波 一〇、〇〇〇石 詳) 三好 丹後守(封地 一〇、〇〇〇石 詳)

▽姓名の傍に圈點を附せるは、後年新地或は慶米を與へられ、又は舊封に復せられしもの
 ▽一萬石以下は略す

封土削減

毛利 秀就

新封地 周防・長門
三六九、〇〇〇石

(舊封地安藝外六國)

一一〇五、〇〇〇石

上杉 景勝

新封地 出羽米澤
三〇〇、〇〇〇石

(舊封地奥羽の内)

一一二〇〇、〇〇〇石

佐竹 義宣

新封地 出羽秋田
二〇五、八〇〇石

(舊封地常陸)

五四五、七〇〇石

秋田 實季

新封地 常陸夫戸
五〇、〇〇〇石

(舊封地出羽秋田)

一九〇、〇〇〇石

▽右の二表は日本戰史關原役に據る

二二七 交換布置

賞を行ふは速かなるを善しとする。家康は三成等の處刑もまだ決行せぬ九月廿七日に於て早くも井伊直政・本多忠勝・神原康政・本多正信・大久保忠隣及び徳永壽昌の六名に命じて論功行賞を調査決定せしめ、翌月十五日には前田利長小早川秀秋等五十餘の諸客將に封地を増賜しそれより翌々年に至るまで殆ど毎月の如くに客將・世臣の領地を按配交換した。これ實に行賞の名の下に自家の基礎を固めむとするものである。その證據には諸客將に封地増賜の時に當つて結城秀康・松平忠吉・井伊直政の三人を東海北陸の要衝に移し、翌年二月にはまた本多忠勝・奥平信昌等二十餘人の譜代を東海・中山の兩道に移した。これ秀吉が往きに爲したところを爲せるもので、秀吉は西より東を制するの按配をなしたが、家康は東より西を制するの按配に出た。けだしこれより先、彼れが關ヶ原に大勝するや、直に秀忠と共に徳川覇府の位置に就いて密議し、遂に賴朝に做つて關東に奠むること、なし江戸を以て都としたといふ。客將・世臣に對する封土の増賜を名としての交換布置は、威な彼の根本の地を定めて然る上にした事であつたらう。

七年に至るまでの交換布置の模様は、之を一々記さむよりは寧ろ表にして一目の下に置くに如かず即ち前章の處罰表に做つて日本戰史關原役の附録たる封邑革新表より借用しやう。

領地加増

石田三成を中心に

新封地と石高

前田利長	加賀	一九五、〇〇〇石	新封地と石高		
結城秀康	越前	七五一、〇〇〇石	加賀	八三五、〇〇〇石	
伊達政宗	陸奥	六〇五、〇〇〇石	下	一〇一、〇〇〇石	
蒲生秀行	陸奥	六〇〇、〇〇〇石	陸奥	五八〇、〇〇〇石	
小早川秀秋	備前	五七四、〇〇〇石	下	一八〇、〇〇〇石	
最上義光	出羽	五七〇、〇〇〇石	筑前	五二二、五〇〇石	
黒田長政	筑前	五二三、〇〇〇石	出羽	二四〇、〇〇〇石	
松平忠吉	尾張	五二〇、〇〇〇石	豊前	一八〇、〇〇〇石	
池田輝政	播磨	五二〇、〇〇〇石	武藏	一〇〇、〇〇〇石	
加藤清正	肥後	五二〇、〇〇〇石	三河	一五二、〇〇〇石	
			肥後	二五〇、〇〇〇石	
					二九八、二〇〇石
					一七八、〇〇〇石
					一三九、〇〇〇石
					一二五、〇〇〇石
					七〇、〇〇〇石
					一一〇、〇〇〇石
					一三四、〇〇〇石
					一〇〇、〇〇〇石
					一〇、〇〇〇石
					六〇、〇〇〇石

舊封地と石高

加増高

福島正則	安藝	四九八、二〇〇石	尾張	二〇〇、〇〇〇石	二九八、二〇〇石
淺野幸長	紀伊	三九五、〇〇〇石	甲斐	二一七、〇〇〇石	一七八、〇〇〇石
細川忠興	豊前	三六九、〇〇〇石	丹羽	二三〇、〇〇〇石	一三九、〇〇〇石
田中吉政	筑後	三二五、〇〇〇石	三河	一〇〇、〇〇〇石	一二五、〇〇〇石
堀尾忠氏	出雲	二四〇、〇〇〇石	遠州	一七〇、〇〇〇石	七〇、〇〇〇石
藤堂高虎	伊勢	二〇二、〇〇〇石	伊豫	八三、〇〇〇石	一一〇、〇〇〇石
山内一豊	土佐	二〇二、六〇〇石	遠州	六八、六〇〇石	一三四、〇〇〇石
加藤嘉明	伊豫	二〇〇、〇〇〇石	伊豫	一〇〇、〇〇〇石	一〇〇、〇〇〇石
蜂須賀至鎮	阿波	一八七、〇〇〇石	阿波	一七七、〇〇〇石	一〇、〇〇〇石
井伊直政	近江	一八〇、〇〇〇石	上野	一二〇、〇〇〇石	六〇、〇〇〇石

中村一忠
生騎一正
武田信吉
京極高知
寺澤廣高
里見義康
眞田信幸
奧平信昌
鳥居忠政
奧平家昌

伯耆 一七五、〇〇〇石
讚岐 一七三、〇〇〇石
常陸 一五〇、〇〇〇石
丹波 一二三、〇〇〇石
肥前 一二〇、〇〇〇石
安房 一二〇、〇〇〇石
信州 一一五、〇〇〇石
美濃 一〇〇、〇〇〇石
陸奥 一〇〇、〇〇〇石
下野 一〇〇、〇〇〇石

駿河 一四五、〇〇〇石
讚岐 一五〇、〇〇〇石
下總 一四〇、〇〇〇石
信州 一〇〇、〇〇〇石
肥前 八〇、〇〇〇石
安房 九〇、〇〇〇石
信州 二七、〇〇〇石
上野 八〇、〇〇〇石
下總 四〇、〇〇〇石

三〇、〇〇〇石
一三三、〇〇〇石
一一〇、〇〇〇石
一二三、〇〇〇石
四〇、〇〇〇石
三〇、〇〇〇石
八八、〇〇〇石
一二〇、〇〇〇石
六〇、〇〇〇石
一〇〇、〇〇〇石

京極高次
富田信高
池田長吉
平岩親吉
金森長近
有馬豊氏
大須賀忠政
古田重勝
九鬼守隆
本多康重

石田三成を中心に

若狭 九二、〇〇〇石
伊勢 七〇、〇〇〇石
因幡 六五、〇〇〇石
甲斐 六三、〇〇〇石
飛騨 六一、〇〇〇石
丹波 六〇、〇〇〇石
遠江 六〇、〇〇〇石
伊勢 五五、〇〇〇石
志摩 五五、〇〇〇石
三河 五〇、〇〇〇石

近江 七〇、四〇〇石
伊勢 五〇、〇〇〇石
未詳 一五、〇〇〇石
上野 三三、〇〇〇石
飛騨 三八、〇〇〇石
遠江 三〇、〇〇〇石
上總 三〇、〇〇〇石
伊勢 三四、〇〇〇石
志摩 三〇、〇〇〇石
上野 二〇、〇〇〇石

一一一、六〇〇石
一一〇、〇〇〇石
五〇、〇〇〇石
三〇、〇〇〇石
一一三、〇〇〇石
三〇、〇〇〇石
三〇、〇〇〇石
一一一、〇〇〇石
一一五、〇〇〇石
三〇、〇〇〇石

松平忠頼
德永壽昌
稻葉貞通
一柳直盛
石川康通
本多忠朝
小笠原秀政
松平忠輝
菅沼忠政
津輕爲信

遠 五〇、〇〇〇石
美 五〇、七〇〇石
豐 五〇、〇〇〇石
伊 五〇、〇〇〇石
美 五〇、〇〇〇石
上 五〇、〇〇〇石
信 五〇、〇〇〇石
下 五〇、〇〇〇石
美 五〇、〇〇〇石
陸 四七、〇〇〇石

武藏 二五、〇〇〇石
美 三〇、七〇〇石
美 四〇、〇〇〇石
尾 三五、〇〇〇石
上 二〇、〇〇〇石
下 二〇、〇〇〇石
武藏 一〇、〇〇〇石
上 二〇、〇〇〇石
陸 四五、〇〇〇石

稻葉道通
戸川達安
龜井茲矩
山崎家盛
松平信一
酒井重忠
木下延俊
西尾光教
織田有樂
福島正頼

伊 四〇、七〇〇石
備 三九、〇〇〇石
因 三八、〇〇〇石
因 三五、〇〇〇石
常 三五、〇〇〇石
上 三三、〇〇〇石
豐 三〇、〇〇〇石
美 三〇、〇〇〇石
大 三〇、〇〇〇石
大 三〇、〇〇〇石

伊 二五、七〇〇石
因 一三、八〇〇石
攝 二三、〇〇〇石
下 一五、〇〇〇石
武藝 一〇、〇〇〇石
播磨 二〇、〇〇〇石
美 二〇、〇〇〇石
攝津 一五、〇〇〇石
伊 一〇、〇〇〇石

二〇、〇〇〇石
三九、〇〇〇石
一四、二〇〇石
一一、〇〇〇石
二〇、〇〇〇石
一一、〇〇〇石
二〇、〇〇〇石
一〇、〇〇〇石
一〇、〇〇〇石
一五、〇〇〇石
二〇、〇〇〇石

宇喜多正親
松平康重
内藤長政
松平家清
内藤信成
戸田一西
松平定勝
片桐且元
諏訪頼水
遠藤慶隆

石見津和野
常陸笠間
上総佐貫
三河吉田
駿河府中
近江勝所
遠州掛川
大和龍田
信濃高島
美濃八幡

武藏駿西
上総佐貫
武藏八幡山
伊豆非山
武藏鯨井
上総小南
攝津茨城
未詳
美濃小原

三〇、〇〇〇石
一〇、〇〇〇石
一〇、〇〇〇石
二〇、〇〇〇石
二〇、〇〇〇石
二五、〇〇〇石
二七、〇〇〇石
一六、〇〇〇石
一五、〇〇〇石
一九、五〇〇石

保科正光
大關資増
市橋長勝
分部光嘉
有馬則頼
淺野長重
松平家乗
菅沼定仍
松平康長
本多康俊

信濃高遠
下野羽黒
美濃今尾
伊勢上野
攝津有馬
下野眞岡
美濃岩村
伊勢長島
上野白井
三河西尾

下総多古
下野羽黒
美濃今尾
伊勢上野
攝津の内
上野那波
上野阿保
武藏深谷の内
下総小笹

一五、〇〇〇石
七、〇〇〇石
一〇、〇〇〇石
一〇、〇〇〇石
一〇、〇〇〇石
一〇、〇〇〇石
一〇、〇〇〇石
一〇、〇〇〇石
一〇、〇〇〇石
一五、〇〇〇石

大久保忠佐
土屋忠直
大久保忠常
大島光義
青山忠成
鳥居成次
那須資景
那須資清
松平忠明
佐久間安次
小堀正次

駿河 沼津 二〇、〇〇〇石
上 總久留里 二〇、〇〇〇石
武藏 駿西 二〇、〇〇〇石
美濃 關 一八、〇〇〇石
兩 總 一八、〇〇〇石
甲 斐郡 一八、〇〇〇石
下 野那須 一七、〇〇〇石
三 河作手 一七、〇〇〇石
近 江高島 一五、〇〇〇石
近 江 一五、〇〇〇石

上 野茂原 五、〇〇〇石
相 摸 一、〇〇〇石
攝津 太田 八、〇〇〇石
未 洋 七、〇〇〇石
下 野 一五、〇〇〇石
上 野長根 七、〇〇〇石
信州 長沼 一〇、〇〇〇石
未 詳 五、〇〇〇石

一五、〇〇〇石
一九、〇〇〇石
二〇、〇〇〇石
一〇、〇〇〇石
一一、〇〇〇石
一八、〇〇〇石
二一、〇〇〇石
一〇、〇〇〇石
五、〇〇〇石
一〇、〇〇〇石

稻葉通孝
三浦重盛
太田原晴清
堀直重
西尾吉次
土方雄氏
遠山友政
桑山元晴
六郷政乘
古田重然

豊後 石内 一四、〇〇〇石
近 江 一三、〇〇〇石
下 野太田原 一二、四〇〇石
下 野矢作 一二、〇〇〇石
武藏 原市 一二、〇〇〇石
伊勢 菰野 一二、〇〇〇石
美濃 苗木 一〇、五〇〇石
大 和葛上 一〇、〇〇〇石
常 陸府中 一〇、〇〇〇石
未 詳 一〇、〇〇〇石

美濃 中山 五、〇〇〇石
下 總佐倉 一〇、〇〇〇石
下 野太田原 七、九〇〇石
未 詳 一〇、〇〇〇石
未 詳 五、〇〇〇石
未 詳 三、〇〇〇石
出 羽仙北 五、〇〇〇石
未 詳 八、〇〇〇石

九、〇〇〇石
三、〇〇〇石
四、五〇〇石
二、〇〇〇石
七、〇〇〇石
一一、〇〇〇石
一〇、五〇〇石
二、〇〇〇石
五、〇〇〇石
七、〇〇〇石

土方雄久	加賀野々市	一〇、〇〇〇石	五、〇〇〇石
織田長孝	美濃野村	一〇、〇〇〇石	一〇、〇〇〇石
松倉重政	大和五條	一〇、〇〇〇石	一〇、〇〇〇石
青山成重	下總の内	一〇、〇〇〇石	二、〇〇〇石
阿部正次	相模一宮	一〇、〇〇〇石	五、〇〇〇石
天野康景	駿河興國寺	一〇、〇〇〇石	五、〇〇〇石
酒井忠世	上野那波	一〇、〇〇〇石	五、〇〇〇石
山口重政	常陸牛久	一〇、〇〇〇石	五、〇〇〇石
戸田高次	三河田原	一〇、〇〇〇石	五、〇〇〇石
根津信政	上野豊岡	一〇、〇〇〇石	五、〇〇〇石

酒井忠利	駿河田中	一〇、〇〇〇石	七、〇〇〇石
稻垣長茂	上野伊勢島	一〇、〇〇〇石	七、〇〇〇石
土井利勝	下總小見川	一〇、〇〇〇石	八、五〇〇石
丹羽氏次	三河伊保	一〇、〇〇〇石	一〇、〇〇〇石
水野分長	尾張小河	一〇、〇〇〇石	一〇、〇〇〇石

▽姓名の傍に圈點を附せるは、徳川譜代のもの
 △一萬石以下は略す
 行賞は上記の如くにして終りを告げたが、右の外に尙ほ人もあり、土地もあつた。その人と土地とは加増にも與からず、減封もされず、封土舊に依ると云つた譯である。此の人々は或は内通せるもの或は降れるもの、或は戦後謝罪せるもの等であるが、中には最初より加擔せるものもあり亦た譜代の功臣もあつた。即ち左の如し。

△封土依舊

封地

祿高

島津忠恒
 石田三成を中心に
 薩隅日の内
 六〇五、〇〇〇石
 五五九